

古宇利原A遺跡

—古宇利大橋橋梁整備事業に伴う緊急発掘調査報告—



2005年3月

な き じん
沖縄県今帰仁村教育委員会

古宇利原A遺跡

－古宇利大橋橋梁整備事業に伴う緊急発掘調査報告－

2005年3月

沖縄県今帰仁村教育委員会

序

本報告書は、今帰仁村字古宇利における「古宇利屋我地線道路造成事業」に伴って実施された、埋蔵文化財の記録保存を目的とした緊急発掘調査の成果を収録したものであります。

発掘調査は平成14・15年度に行い、その後平成16年度に資料整理を実施しました。今回調査の行われた一帯は古宇利港近くの集落中心部にあって、これまでに道路改修工事や港湾整備等により現況は改変されておりましたが、それでも多くの成果を得ることができました。特に今帰仁村における縄文時代後期並行期（およそ3500年前）の様相の一端をつかめたことは大きな成果であります。また、今回出土した多くの文化財は、我々の祖先達の生活や文化環境を知る上で貴重な歴史資料であります。

本書が多くの方々に有効に活用されることを希望するとともに、文化財愛護思想の高揚、諸開発における保存協議の円滑な推進に寄与することを期待します。

おわりに、本調査にあたり調査指導、報告書作成等で協力をいただいた先生方、また調査に参加協力くださった古宇利島の方々に記して御礼を申し上げます。

2005年 3 月

今帰仁村教育委員会
社会教育課長 諸喜田 展生

例 言

1. 本書は平成14年度及び平成15年度に今帰仁村教育委員会が古宇利大橋橋梁整備事業に伴って発掘調査を実施した「古宇利原A遺跡」の発掘調査報告書である。

2. 本書に収録した遺跡は、沖縄県今帰仁村字古宇利 1、2、1－1 番地ほかに所在する。

3. 発掘調査及び整理作業にあたり次の方々から指導・助言をいただいた。

平成14年度

金武 正紀（那覇市教育委員会）

藤田 宏（広島県立安芸府中高校教諭）

中村 誠司（名桜大学）

平成15年度

木下 尚子（熊本大学）

西本 豊弘（国立歴史民俗博物館）

坪井 洋平（国立歴史民俗博物館）

平成16年度

木下 尚子（熊本大学）

黒住 耐二（千葉県立中央博物館）

名島 弥生（慶應義塾大学博士課程）

高宮 広土（札幌大学）

赤嶺 信哉（名護市教育委員会囑託）

4. 本書掲載の現場における遺構実測図、現場の撮影については宮城弘樹・玉城靖・仲里なぎさ・与那嶺俊が行った。

5. 調査の記録及び出土遺物の保管は、今帰仁村教育委員会で行う。

6. 本書の作成・執筆・編集は宮城・玉城が行った。

目 次

第Ⅰ章 古宇利原A遺跡の概要

- 1 古宇利原A遺跡の位置と環境 2～3
- 2 古宇利原A遺跡の歴史概観 4～7
- 3 古宇利原A遺跡周辺の民俗祭祀空間 8

第Ⅱ章 調査の概要

- 1 調査経過 10～12
- 2 調査組織 13～14
- 3 調査地区 15～16

第Ⅲ章 層 序 18～21

第Ⅳ章 遺 構

- 1 先史時代の遺構 24
- 2 グスク時代以降の遺構 24～34

第Ⅴ章 人工遺物

- 1 先史時代の遺物 36～51
- 2 グスク時代以降の遺物 52～76

第Ⅵ章 おわりに 78～79

参考文献 80

写真図版 83～113

図表目次

図

1. 沖縄本島位置図	2
2. 今帰仁村位置図	2
3. 古宇利原A遺跡位置図	3
4. 古宇利原の民俗遺跡地名	8
5. 調査地区	16
6. セクション位置図	21
7. 古宇利原A遺跡セクション図	21
8. 第2次調査 第Ⅰ区遺構配置図	27
9. 第2次調査 第Ⅱ区遺構配置図	29
10. 第3次調査 第Ⅰ区遺構配置図	31
11. 性格不詳の落ち込み遺構	33
12. SR1〔石列遺構〕詳細図	34
13. シャコガイ集積(SS8)遺構詳細図	34
14. 土器(1)	40
15. 土器(2)	41
16. 土器(3)	42
17. 土器(4)	43
18. 石器(1)	46
19. 石器(2)	47
20. 貝珠と素材巻貝断面図	49
21. 貝製品・骨製品	50
22. 土器・カムイヤキ・白磁・青磁	54
23. 青磁	55
24. 青花	57
25. 褐釉陶器・タイ陶磁	58
26. 清朝磁器(1)	60
27. 清朝磁器(2)	61
28. 本土産近世陶磁	64
29. 本土産近・現代陶磁	65
30. 沖縄産陶器(1)	68
31. 沖縄産陶器(2)	69
32. 沖縄産陶器(3)	70
33. 銭貨	72
34. 円盤状製品・煙管	73
35. 石器	74
36. 金属製品・骨製品	75

グラフ

1. 古宇利原A出土貝珠の直径と直径差	49
---------------------	----

表

1. 今帰仁村内と屋我地島の主な縄文時代遺跡	3
2. 今帰仁村字古宇利の人口	5
3. 古宇利島の歴史略年表	7
4. 出土土器観察表(1)	38
5. 出土土器観察表(2)	39
6. 出土石器観察表	45
7. 第2次古宇利原A遺跡出土貝珠一覧	48
8. 出土陶磁器観察表(土器・カムイヤキ・白磁・青磁)	53
9. 出土陶磁器観察表(青花)	56
10. 出土陶磁器観察表(褐釉陶器・タイ陶磁)	58
11. 出土陶磁器観察表(清朝磁器)	59
12. 出土陶磁観察表(本土産陶磁)	63
13. 出土陶器観察表(沖縄産陶器)	67
14. 出土銭貨観察表	71
15. 円盤状製品・煙管観察表	73
16. 金属製品観察表	74

図版

1. 空から見た古宇利島	83
2. 遺跡遠景(南から)	84
3. 遺跡近くで行われる祭祀(ウンジャミ)	84
4. 第2次調査 第Ⅰ区(前期)全景(西から)	85
5. 第3次調査 第Ⅰ区全景(西から)	85
6. E-16 東壁セクション	86
7. H-25 南壁セクション	86
8. J-36 西壁セクション	86
9. 2次調査Ⅰ区作業状況	87
10. 3次調査Ⅲ区作業状況	87
11. 現場説明会	87
12. SR2下のピット	88
13. 石列遺構(SR1)	88
14. 二枚貝廃棄遺構(SS4)	89
15. マガキガイ廃棄遺構(SS5)	89
16. マガキガイ廃棄遺構(SS6)	89
17. マガキガイ廃棄(SS7)	90
18. シャコガイ集中遺構(SS8)	90
19. シャコガイ集中遺構下層のマガキガイ(SS8)	90
20. 土器出土状況	91
21. 石斧出土状況	91
22. 石器出土状況	91
23. 石器出土状況	92
24. 陶磁器出土状況	92
25. 銭貨出土状況	92

26. 土器 (1)	93
27. 土器 (2)	94
28. 土器 (3)	95
29. 土器 (4)	96
30. 石器 (1)	97
31. 石器 (2)	98
32. 貝珠、貝・骨製品	99
33. 土器・カムイヤキ・白磁・青磁	100
34. 青磁	101
35. 青花	102
36. 褐釉陶器、タイ陶磁	103
37. 清朝磁器 (1)	104
38. 清朝磁器 (2)	105
39. 本土産近世陶磁	106
40. 本土産近・現代陶磁	107
41. 沖縄産陶器 (1)	108
42. 沖縄産陶器 (2)	109
43. 沖縄産陶器 (3)	110
44. 銭貨	111
45. 円盤状製品・煙管・石器	112
46. 金属製品・骨製品	113

第 I 章

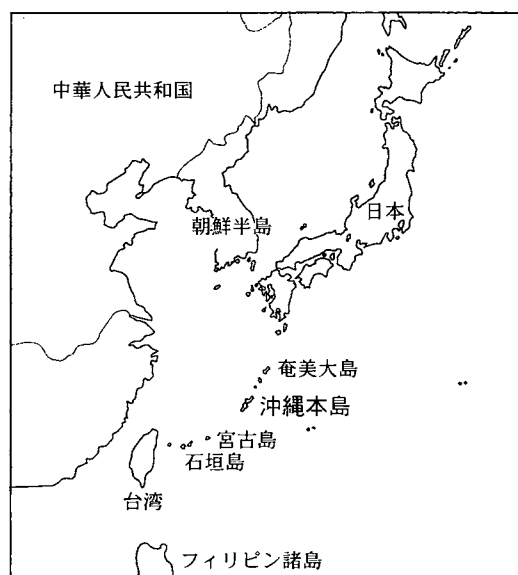
古宇利原A遺跡の概要

1 古宇利原A遺跡の位置と環境

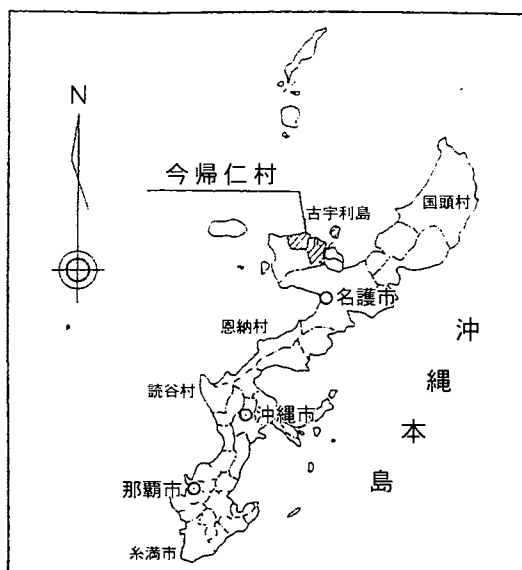
古宇利島は、沖縄本島北部の本部半島北東方向(N-36°、E-124°)に位置する約3.1km²の円形の島で、行政区は今帰仁村に属する。対岸の運天まで1.5km、一日五回往復する定期連絡船で約15分程の近距離にある。現在は橋梁で繋がった屋我地島までは約2kmの距離にある。古宇利島の頂上からは、北に伊是名島、伊平屋島、西に伊江島、南から東にかけて本部半島の連山及び国頭の山々、加えて塩屋湾が望め、眼下に屋我地島を見渡すことができる。

島は隆起珊瑚礁を基盤とし、概ね三段の海岸段丘面が認められる。海岸段丘は海食作用等によって海岸付近に形成された平坦面が、海水準の低下や陸の隆起により離水し、海岸沿いに平坦地として分布する地形である。同島中央部が古生代石灰岩からなり上位面(標高100~75m)、次いで中位面(65~35m)、下位面(30~10m)に区分され、中位面の地質は古生代から中生代の石灰岩で、下位面の地質は更新世(琉球)石灰岩となり下位ほど新しい地質となる。いずれの縁も段丘崖となり自然植生を残しているので、航空写真からもこの平坦面と段丘崖の連続を確認することができる。島の最高所は約100mを測り、標高70m付近までは緩やかに傾斜しているが、それ以後は急斜面で海岸に至る。従って海岸から島の中央部に行くには坂が急である。海岸地形は北東部から南側に小規模な砂丘が形成され、外周の約70%は3~5mの隆起した岩場で囲まれている。土壌は石灰岩風化の赤土(マージ)で島全体が覆われ、その被覆は薄い。この為、島内での農作物は限られており、サトウキビやサツマイモが基幹作物となっている。

南側台地縁辺部には、今回調査した古宇利原A遺跡を含め古宇利原B遺跡、古宇利原C遺跡の3遺跡が知られている。いずれも標高10m前後の下位面(段丘)の遺跡である。同じく南側海岸に面した中位面には中原遺跡がある。また、海を渡れば、渡喜仁から上運天の台地縁辺部及び崖下に渡喜仁浜原遺跡を代表とする遺跡が集中し、他方屋我地島では大堂原貝塚などの遺跡がある。加えて与那嶺の海岸一帯、伊是名島・具志川島などにも同時代の遺跡が集中しており、沖縄の先史時代を考える上でも重要な遺跡が多い地域の一つである(第3図・第1表)。



第1図 沖縄本島位置図



第2図 今帰仁村位置図



第3図 古宇利原A遺跡位置図

第1表 今帰仁村内と屋我地島の主な縄文時代遺跡

	遺 跡 名 称	字名(市町村名)	立 地	標高(m)	遺跡現況	備 考
1	古宇利原A遺跡	古 宇 利	崖 縁 辺 部	7	宅地・道路	
2	古宇利原B遺跡	古 宇 利	崖 縁 辺 部	15	畑・道路	
3	中原遺跡	古 宇 利	崖 縁 辺 部	85	畑	
4	シチャガブ遺跡	湧 川	海 岸 砂 丘	2		
5	兼久原遺跡	湧 川	海 岸 砂 丘	2		
6	運天港土器出土地	上 運 天	沖 積 平 野	10	宅地・道路	
7	運天貝塚	運 天	崖 下	5	畑	
8	大地原遺跡	運 天	崖 縁 辺 部	20	畑	
9	渡喜仁浜原貝塚	渡 喜 仁	海 岸 砂 丘	5	原野	
10	長根原遺跡	仲 宗 根	崖 縁 辺 部	25	原野・公園	
11	ウンビナグスクガマ遺跡	平 敷	洞 穴	16		
12	謝名遺跡	謝 名	台 地 上	30	畑	土地改良により埋土
13	謝名大島原遺跡	謝 名	丘 陵	50	宅地・畑	旧称：謝名ウンジョウヘイ遺跡
14	東長浜原遺跡	与 那 嶺	海 岸 砂 丘	5		分譲宅地造成等により壊滅
15	西長浜原遺跡	与 那 嶺	海 岸 砂 丘	5	宅地	梯悟荘
16	仏ン当遺跡	与 那 嶺	洞 穴	7	原野	ゴミ等が投棄され埋没
17	兼次古島遺跡	兼 次	台 地 縁 辺	50	畑	
18	大堂原貝塚	(名 護 市)	海 岸 砂 丘	3	原野・道路	
19	大堂浜遺物散布地	(名 護 市)	海 岸 砂 丘	5	原	

2 古宇利原A遺跡の歴史概観

古宇利島の先史遺跡は現在のところ、古宇利原A遺跡、古宇利原B遺跡、中原遺跡の3遺跡が確認されている（上原ほか1983）。伝説によると古宇利島は、沖縄人類の発祥地であるという。また、サーザーウェー、海神祭の古い民俗行事を残している点が特徴的である。文献上で確認される最初の記載は『海東諸国紀』「琉球国之図」に「郡志摩 有人居」とあり、同書成立期の15世紀頃には文献上からも既に定住生活が認められるところである。この時代の遺跡として古宇利グスクが想起されるが、残念ながら未調査であり遺物の採集などは認められていない。但し、中森御嶽周辺地域の古宇利原A遺跡、古宇利原C遺跡ではグスク時代の遺物が採集されており、御嶽周辺に生活があったことが伺われる。

古宇利の表記を通史的に列記すると、下記の変遷をたどることがわかる。

『海東諸国紀』「琉球国之図」（1471年）	郡志摩
『琉球渡海日々記』（1609年）	こほり
『正保国絵図』（1645年）	沖ノ郡島
『琉球国高究帳』（17世紀中頃）	沖ノ郡島
『琉球国由来記』（1713年）	郡村
『琉球国旧記』（1731年）	古宇理村
「乾隆二年帳」（1736年）	古宇利村
「琉球一件帳」（1750年頃）	古宇利村
「農事御取締帳」（1861年）	古宇利村

※明治41年間切が村、村が字となる。

(現 在)	字古宇利
-------	------

表記の古宇利は方言では「フイ」あるいは「クイ」と呼ばれている。フイやクイは「越えた」の語意とみられ、フイジマ・クイジマは海を「越えた島」と訳される。また、人類発祥伝説から恋（コイ・クイ）あるいは恋島の字をあてたりすることもある。近世琉球期今帰仁間切の地頭代は、18世紀頃までは湧川大屋子の名を賜っていた（『琉球国由来記』）。1750年頃以後は古宇利親雲上を名乗り、地頭代の家は「フイヤー」の屋号が付けられたとされ、古宇利島との関わりのが指摘される（仲原1998）。また、同島は古くから今帰仁間切に属し、近世古宇利島が果たした役割の一つに、首里王府の役人などが伊是名へ向かう時、古宇利がその手助けをする役目を担っていた。島の最高所である標高107mの地には遠見番所があり、唐船や異国船などを見張る機能を有していた。『正保琉球国絵図』（1645年）には「今帰仁間切之内 沖ノ郡嶋 異国船遠見番所」として記載され登場する。しかし、近世期の古宇利島の人々の生活様子を確認できるような文献は乏しく詳細は不明である。少ない記録の一つに1846年フランス艦船が運天港に入港、宣教師フォルカードによって以下のように古宇利島の様子を記録している（フォルカード1993年）。

「提督のお供をして、現地の人が古宇利島と呼んでいるエルベール島に出かけた。これは地図で確認すると、とても小さな島だ。島と同じ名前の村が一つあるだけだ。耕地もあるが島の大部分は巨岩と、まるで原始林のように鬱そうと繁る森で覆い尽くされている。（中略）

耕された狭い盆地にさしかかると、一人で粟を刈り取っている少年に気がついた。」

これらの記載から、①村が一つあること。②耕地は少なく自然植生の森が多いこと。③僅かな耕地には、粟を栽培していたこと。などが確認できる。

先ず①について後年の古宇利の記録とともに概観する。集落の数に関してはフォルカードが島内をくまなく調査したとの確証はないので不確定要素もあるが、現集落とし集住する中森御嶽周辺の現集落を見聞しての記載と考える。神アサギや地名などから仲原弘哲は「古宇利のムラは2つ、あるいは3つのムラが統合していることになるが、17世紀初頭の『琉球国由来記』には神アサギは一軒しか記されていないことから、この時期には一つの行政ムラになっていた」（仲原1998）としている。

16世紀以前の村がはたしてどのような形であったのかは不明であるが遺跡として現時点で確認されるグスク時代に相当するものは、前述したよう古宇利原A・C遺跡である。両遺跡は隣接することから、古宇利原一帯はグスク時代からの系譜を引いた伝統的な集落と考えられる。また人口動態については近世まで遡って確認することは困難であるので、ここでは参考までに近代以降の人口推移を見る。明治13(1883)年の人口が539人、同36(1903)年は650人、昭和6(1931)年には703人とピークを迎え、現在島の世帯数は157戸、人口367人（平成14年10月現在）となっており、人口は減少している（第2表）。特に一世帯あたりの人口はピーク時が5人前後となるのに対し、現在では3人を割っており過疎化傾向を示している。

もう一点集落に触れて、古宇利には上原、下原といわれる古宇利原以外の集落が二つある。いずれも屋取集落とされる。下原は古宇利の本村から移住してきた松田家の系統と本部町（大堂・謝花）から移住してきたと言われる。上原は「土族百姓村」といわれるいわゆる首里土族の山原下りによって形成された集落で照屋家、久場、外間家の入植が聞き取りによって確認されている（新城・仲地1975年）。

第2表 今帰仁村字古宇利の人口

年	西暦	世帯	男	女	人口（人）
明治13年	1883	123	286	253	539
明治36年	1903	131	318	332	650
昭和6年	1931	146	359	344	703
昭和45年度	1970	153	402	405	807
昭和46年度	1971	143	377	372	749
昭和47年度	1972	143	354	351	705
昭和48年度	1973	142	348	346	694
昭和49年度	1974	140	334	335	669
昭和50年度	1975	146	325	326	651
昭和51年度	1976	139	292	274	566
昭和52年度	1977	136	281	268	549
昭和53年度	1978	138	273	260	533
昭和54年度	1979	136	268	241	509
昭和55年度	1980	132	263	234	497
昭和56年度	1981	135	241	216	457
昭和57年度	1982	138	227	212	439
昭和58年度	1983	140	222	219	441
昭和59年度	1984	145	236	220	456
昭和60年度	1985	147	236	213	449
昭和61年度	1986	146	236	209	445
昭和62年度	1987	142	228	196	424
昭和63年度	1988	134	213	180	393
平成元年度	1989	138	217	175	392
平成2年度	1990	139	208	172	380
平成3年度	1991	136	195	166	361
平成4年度	1992	136	185	161	346
平成5年度	1993	139	196	166	362
平成6年度	1994	141	196	166	362
平成7年度	1995	146	199	171	370
平成8年度	1996	145	195	157	352
平成9年度	1997	142	193	156	349
平成10年度	1998	152	205	162	367
平成11年度	1999	154	200	161	361
平成12年度	2000	154	195	160	355
平成13年度	2001	157	197	169	366
平成14年度	2002	157	195	163	358
平成15年度	2003	158	195	165	360
平成16年度	2004	157	196	165	361

次に、②について見ていきたい。整理された『沖縄県統計書』は古宇利島の土地利用を知る上で重要である。その様子を同時代史料の地積図『古宇利村全図』とともに見ると、土地利用について多くの情報を得ることができる。土地整理事業直後の土地反別表からは、租税対象となった民有地は総計285.1町あり、田地は無く、畑地123.4町、宅地7.0町、山林4.0町、原野153.5町となっている。島の面積から考えると、フォルカード神父の印象より耕地が増えているように感じられる。

最後に③についてだが、先に触れた『沖縄県統計書』に見るよう古宇利島内には水田耕作地は無く、その一方で畑が123.4町認められる。ほぼ同時代の村の生産物として米、麦、粟、黍、砂糖、大豆、小豆、甘藷、藍、苧麻、海産物、牛、馬などが挙がっており、一部の穀物類は古宇利からも生産されたと考えられる。

以上、古宇利島の概況について集落と土地利用、生産物の3つの視点から概観した。まとめると、現在確認される先史遺跡からは縄文時代後期頃に移住してきた集団が認められること。この集団は概ね縄文晩期頃までは海岸を見通せる島の南側台地を中心に住居を構えたようである。その後、島内には遺跡が確認されていないため不明である。あるいは島は無人となっていたのかもしれない。グスク時代になると、古宇利グスクの存在が知られるが、同地には遺物の散布などに乏しく恒常的な生活を肯定する材料は少ない。いずれにせよ古宇利島のグスクについては本格的な調査を待つて検討するとして、集落遺跡として古宇利原A遺跡を中心とした地域が重要であったことが考えられる。グスク時代まで遡る古宇利原一帯での生活は、その後近世琉球になっても途切れることなかったのだろう。近世期には古宇利が運天港とともに琉球王府に認識された重要港湾施設の一翼を担ったことが「遠見番所」などの存在からうかがい知ることができる。

その後、古宇利島での生活は島の環境下から様々な問題を抱えており、特に湧水地点も少なく、河川も発達していなかったため水事情が悪かった。水問題を解決したのは戦後水道の敷設を待たなければならない。本島よりケーブルが引かれたのは1974年（昭和49）、送電線とともに送水管が整備されたことによって解決された。また、当該調査原因となった古宇利大橋橋梁整備は、古宇利島と沖縄島を結ぶという島民の悲願であり整備によって利便性が改善されることが予測される。その一方で開発によって文化財の滅失や毀損が思量され、豊かな島の自然環境や文化遺産の保全が今後の課題となる。

第3表 古宇利島の歴史略年表

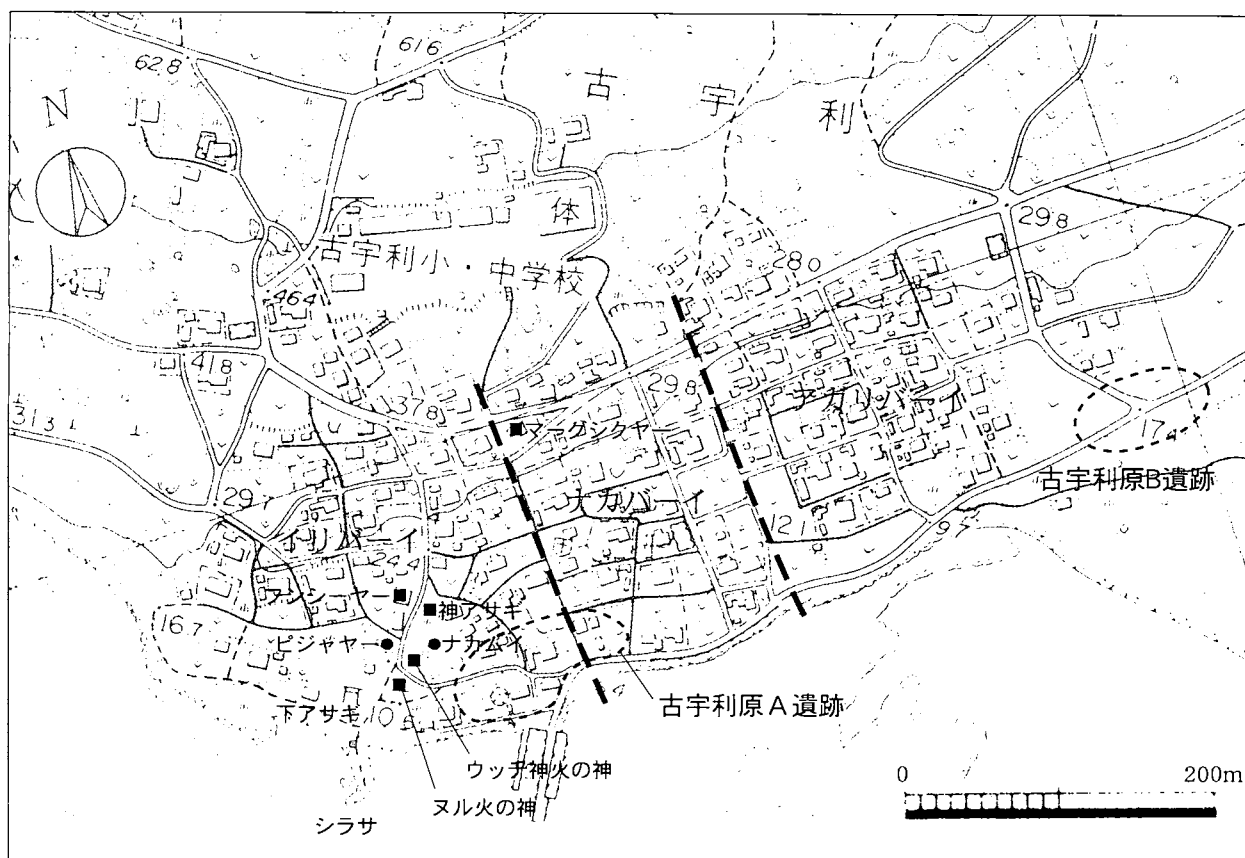
先史時代	BC	
	2000～500年	南側台地に縄文時代並行期の遺跡を残す。 古宇利原A遺跡、古宇利原B遺跡では住居跡が確認される。
古琉球	AD	
	1300年代頃	グスク時代の古宇利グスク。
	1471年	『海東諸国紀』（琉球国之図）に「郡志麻 有人居」として文献にはじめて登場。
近世琉球	1609年	『琉球渡海日々記』に「こほり」に停泊とある。
	1644年	『琉球国高究帖』に「沖ノ郡島」と記載。烽火の制が布かれ、遠見番所設置。
	1645年	『正保国絵図』に「沖ノ郡島廻一里拾貳町」「異国船遠見番所」が記載される。
	1713年	『琉球国由来記』に「中嶽 郡巫火神 郡村神アシャゲ」などの拝所が記載される。
	1720年	『球陽』に「古宇利邑の大城は四幅の帆船、山川・玉城は七幅の帆船を持っていた」として記載される。
	1731年	『琉球国旧記』に「古宇理」とある。
	1736年	『乾隆二年帳』に「古宇利」とある。
	1743年	このころ古宇利島の「バル石」が設置されたと思われる。 ※18世紀中頃から今帰仁間切の地頭代は古宇利親雲上を名乗る。
	1816年	バジル・ホールの海図に古宇利島がハーバーツ島(Herbert's island)、小(古)宇利の集落を「Village of Cooe」とある。
	1846年	『球陽』に「四月、古宇利の洋面に異国船一隻が停泊、六名が杉板一隻に乗り上陸。牛・羊・蔬菜などを求め、それに応じる」とある。フランス艦船運天に入港。『幕末日仏交流記ーフオルカード神父の琉球日記ー』（中公文庫）に古宇利島（エルベール島）の記録される。
	1847年	在番奉行が古宇利・屋我地の地形・水深等を調査する。
	1853年	『ペリー遠征記』に古宇利は「koui」と記述。
近代沖縄	1879年（明治22）	沖縄県となる。
	1890年（明治23）	古宇利簡易小学校創設。
	1893年（明治26）	5月、天底小学校古宇利分校となる。 12月、古宇利尋常小学校となる。
	1897年（明治30）	校舎落成・学校敷地変更。
	1908年（明治41）	村政の始まり。古宇利村から古宇利となる。
	1912年（大正元）	校舎改築・移転。
	1918年（大正7）	旧校舎取壊し・10月1日より借り民家にて授業。
	1919年（大正8）	現校地に校舎完成。
	1920年（大正9）	高等科を併置・古宇利尋常高等学校となる。
	1934年（昭和9）	牧場護岸工事を整備する。
	1939年（昭和14）	2600年記念牧場を整備する。
	1941年（昭和16）	古宇利国民学校と改称。
	1944年（昭和19）	10・10空襲で校舎爆撃を受ける。
	1945年（昭和20）	沖縄戦、沖縄県は壊滅状態。アメリカ軍の統治下に置かれる。 6月、島民が羽地・田井等に収容。 11月半ば、帰島を許される。 12月6日古宇利初等学校の名で開校する。
	1946年（昭和21）	古宇利初等学校となる。
戦後沖縄	1947年（昭和22）	字民の寄付で大型伝馬船（帆船）を新造。 10月1日、村陸上へ向かう途中沈没する（教師・生徒、一般女子の10名が亡くなる）。
	1948年（昭和23）	6・3・3学制施行。古宇利初等学校・中等学校の併置校になる。
	1952年（昭和27）	古宇利小中学校と改称。石積み校舎落成（四教室）。
	1959年（昭和34）	船着場完成。
	1962年（昭和37）	古宇利に貯水池・天水タンクが整う。
	1967年（昭和42）	天水タンク・突堤完成。 古宇利島遺跡調査（高宮廣衛・金武正紀）。
	1968年（昭和43）	古宇利中学校、全琉球大会優勝。県代表として南九州大会派遣。船着場完成。
	1970年（昭和45）	小型フェリー就航・祝賀会。道路改良工事竣工。
	1974年（昭和49）	送水管・送電線の完成。
	1977年（昭和52）	水道送水落成式。
	1988年（昭和63）	古宇利架橋建設促進村民総決起大会。
	2005年（平成17）	2月8日 古宇利大橋開通。

※『なきじん研究』Vol.8 1998年 今帰仁村教育委員会、『今帰仁村史』1975年今帰仁村役場、『古宇利小中学校創立100周年記念誌』1992年 参照

3 古宇利原 A 遺跡周辺の民俗祭祀空間

古宇利島の集住域は南側に特に発達しており、当該地域はムラウチ（村内）と呼ばれている。島の中央部にある集落はウイバル（上原）、島の北西にある集落はシチャバル（下原）と呼ばれている。

南側に展開する最も大きなムラウチ集落は、伝統的に東からアガイバーイ、ナカバーイ、イリバーイと三つに区分けされ呼ばれている（第4図）。毎年旧暦7月最後の亥の日に行われる、ウンジャミ（海神祭）のハーリーのときは、その三つの区分で競漕する。ムラウチの中でもイリバーイの方にアサギや旧家、中森（ナカムイ）御嶽などがありムラの祭祀の場となっている。御嶽を中心とした集落形態がみられ、ここの地積は東側が整然と基盤目状に区画されているのに対して、宅地割り形態および道路配置も中森の周辺が不規則なので、このあたりが最も古いと考えられるとされる（坂本1989）。



第4図 古宇利原の民俗遺跡地名

第Ⅱ章

調査の概要

1 調査経過

村内における埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和56年度～58年度に遺跡の分布調査が実施されて以後、これに報告された遺跡を「周知の遺跡」とし、報告される遺跡については取り扱いに関して事前協議を図っている（上原ほか1984）。本遺跡も周知化された遺跡で、以前サブセンターの建設に伴って事前調査が行われた経緯があった。このため計画された古宇利大橋橋梁整備事業によって遺跡に影響を与える地域の取り扱いについて協議を行った。その結果、工事変更は困難で掘削工事が実施され、遺跡の一部消失が免れないことから本調査を行い記録保存措置を講ずることを決定した。

表面調査（1967年7月）

高宮廣衛・金武正紀両氏によって表面調査を中心とした島内の調査が実施された。

試掘調査（1968年12月）

突堤工事のため重機によって遺跡破壊されているのが確認されたことから、金武正紀氏によって試掘調査が実施された。既に調査の内容については金武によって報告されている（金武1975）。

表面踏査（1970年6月17日・8月7日・10月25日）

金武正紀氏によって表面調査を中心とした島内の調査が実施された。

第1次 古宇利原A遺跡発掘調査（昭和57年（1982）5月18日～7月7日）

離島地区振興事業に係る道路の改修や公民館の改修工事が計画され、当該地域には古宇利原A遺跡が広がることが確認されたことから昭和57年度に記録保存を目的とした緊急発掘調査が実施された。事業の実施にあたっては今帰仁村が主体となり、沖縄県教育庁文化課の指導協力を得た。これが本格的な発掘調査としては1回目であることから、以下これを一次調査とする。既に報告書が刊行されているので参照にされたい（上原ほか1983）。

試掘調査（平成13年（2001）11月12日～16日）

平成13年度に今帰仁村内遺跡発掘調査として古宇利島内における埋蔵文化財の分布調査を目的とする調査を文化庁、県の補助事業として実施した。この際古宇利原A遺跡についても遺跡範囲の確認を目的とした試掘調査を実施した。これによって遺跡の東西の範囲を概ね確認することができた。これに基づいて、平成13年7月4日今教社文第102号にて「古宇利大橋橋梁整備に於ける文化財有無について（回答）」を北部土木事務所に提出。調査の結果を踏まえて13年度に北部土木事務所と調整を重ね、工事によって遺跡への影響が免れ得ない地区について記録保存調査を行うこととなった。本調査は平成14年度～16年度までに実施することとして、平成14年9月10日「古宇利原A遺跡発掘調査に関する協定書」を締結した。

第2次 古宇利原A遺跡発掘調査（平成14年（2002）11月1日～3月31日）

古宇利原A遺跡の発掘調査は、本調査としてはサブセンター建設工事に伴って昭和57（1982）年に実施された調査に続いて2度目の調査となる。このことから古宇利原A遺跡の第二次発掘調査として報告する。

二次調査は平成14年度に今帰仁村教育委員会が古宇利大橋橋梁整備事業に係る緊急発掘調査として実施した。同調査は古宇利港近くの旧サブセンター一帯を範囲として、道路の北側半分を前期、南側を後期とした。Ⅰ区を平成14年11月1日～平成15年1月22日まで、Ⅱ区

を1月23日～3月31日まで現場での作業を行った。同地域はこれまで道路の改修、拡張及び港湾工事等の開発工事による破壊を受けており、業者にアスファルトの剥ぎ取り、攪乱土の搬出作業を委託し、除去作業の折を見て排土からの遺物を採集する作業から開始した。

先ず11月11日に調査区周辺の清掃やグリッド設定を行った。グリッド設定はIP# 1 (E-17) を基準点として (x=100.00、y=100.00) 設定し、5 m間隔で西から東へ10・11・12・・・、南から北へA・B・C・・・の数字、記号を用いることにした。

第Ⅰ区調査区はE-10～17、G-24～26、H-24～26を設けて発掘を開始し、調査区の東端であるH-29～30、I-29～30ではバックホーによる表土除去を行ったが遺物包含層は確認できなかった。また、調査区が海岸に隣接することから定置網などへ赤土流出がないようにと沈砂池を設けた。調査は大部分が攪乱を受けていたことから攪乱層を除去してから作業を開始した。特に水道管が敷設され攪乱が深部まで及んでいる場所は遺構も破壊している状況であった。完掘後随時図面を作成し道路確保を目的に早期に埋め戻しを行い調査を進めた。最終的にはⅠ区調査区については1月23・24日に埋め戻しを行い作業を完了した。

Ⅱ区調査区はD-10～15、F-23～26、G-23～27、H-23～27の地区において実施、G-25ではG-27、H-27では港湾工事による大規模な破壊を受けており、遺構及び遺物包含層は確認できなかった。かつて当該地区の一角で金武正紀氏が試掘調査を実施しており、その当時の包含層は滅失していると思われたD-12グリッドではマガキガイ貝廃棄遺構、D-15グリッドではシャコガイ集中遺構及びマガキガイ貝廃棄遺構、G-25グリッドでは機能不明の石列遺構をそれぞれ確認することができた。

当該調査区は古宇利島の中心部に位置し、道路の半分を剥ぎ取って調査を行ったため、発掘作業は常に安全に配慮しながら慎重に実施していった。加えて相次ぐ天候不順等の様々な要因により調査は難航したが、平成15年3月31日に実測作業と完掘状況の写真撮影を終了し、発掘調査業務を完了した。

第3次古宇利原A遺跡発掘調査（平成15年（2003）7月1日～10月31日）

古宇利屋我地線に係る第三次古宇利原A遺跡発掘調査は、平成15年度に今帰仁村教育委員会が実施した。同調査は古宇利港近くの民宿「しらさ」前一带を範囲として調査を実施した。調査は周辺住民の交通の障害となることから仮設道路を設け、道路の中央を第Ⅰ区、西側を第Ⅱ区、東側をⅢ区とした。Ⅰ区を平成15年7月1日より平成15年9月4日まで、Ⅱ区を9月5日から9月6日まで、Ⅲ区を9月8日から10月31日まで調査を実施した。同地域はこれまで道路の改修、拡張及び港湾工事等の開発工事による破壊を受けており、業者にアスファルトの剥ぎ取り、攪乱土の搬出作業を依頼し、除去作業の折を見て排土からの遺物を採集する作業から開始した。

グリッド設定は、2次調査と同様にIP# 1 (E-17) を基準点として (x=100.00、y=100.00) 設定し、5 m間隔で西から東へ10・11・12・・・、南から北へA・B・C・・・の数字、記号を用いることにした。

第Ⅰ区はJ-35～39、K-35～36を設けて発掘を開始した。遺構としてJ-35、J-38、J-39で落ち込み遺構が確認されたが、付随すると考えられる明瞭な柱穴は確認することができなかった。Ⅱ区についてはバックホーによって遺跡の状況を確認したところ保存状況が不良であったことから掘削後すぐに埋め戻し作業を実施した。第Ⅲ区はI-40～43、J-40～43のセクションを設けて発掘を行った。

当該調査区は古宇利島の中心部に位置し、加えて台風等の相次ぐ天候不順等の様々な要因により調査は難航したが、平成15年10月31日に実測作業と完掘状況の写真撮影を終了し、発掘調査業務を完了した。

第2・3次古宇利原A遺跡資料整理業務（平成16年（2004）4月1日～平成17年3月4日）

古宇利屋我地線に係る第二・三次古宇利原A遺跡発掘調査の資料整理業務は、現場での発掘調査完了後、平成16年度に今帰仁村教育委員会において実施した。2ヶ年度で実施した発掘調査によって回収された遺物は、遺物収納コンテナで約100箱を数え、その大半は食料残滓と考えられる貝類遺体によって占められる。整理に際しては特に時期の判別可能な包含層からの出土遺物を中心として遺物、自然遺物に大別し順次作業を進めていった。調査担当者は初年度が宮城、次年度が玉城であったこともあり、やや繁雑であったが、玉城が平成16年度は主に今帰仁城跡周辺の発掘調査に従事していたことから、宮城が資料整理について担当することとなった。

具体的な整理作業は原則として各分割調査区（2・3次－Ⅰ区・Ⅱ区）を分別し、遺物については時期毎に、自然遺物に関しては時期及び地区毎にこれを整理した。遺物の洗浄及びナンバーリングまでは現場で行えたため、接合作業から進めた。この際に遺物の分類を並行して行い調査員が常時確認しながら小分けした。更に実測を行う遺物などもこの時点で選定し遺跡を復元するのに必要な遺物の組成を抜き出した。陶磁器の鑑定については調査担当者と金武正紀（今帰仁村発掘調査アドバイザー）が中心になって行った。実測は今帰仁村教育委員会で臨時職員を雇用し1年間常時5～7人の資料整理員が実測等の諸作業を行うよう進めた。製図作業についてもこのメンバーで進めている。最後に遺物の復元作業についてだが、今回遺物の石膏復元などの諸作業については割愛している。これは時間的な制約とともに熟練した技術が必要なため短期間での整理作業ではこれらの整理作業を断念せざるを得ない状況にあった。

なお、整理作業では下記の方々にご教示を得た。

人工遺物（貝製品）の整理作業：木下 尚子

人工遺物（石器）の石質同定：神谷 厚昭

自然遺物（貝類）の整理作業：黒住 耐二、赤嶺 信哉

自然遺物（脊椎動物骨）の整理作業：名島 弥生

あわせて、図面整理作業は遺物整理作業と並行して作業を進めた。現場で作成した図面は整理・点検・調整を行い遺跡全体が表現できるよう縮尺を統一して作成した。

2 調査組織

発掘調査を平成14年度～15年度、資料整理を平成16年度に実施した。発掘調査は下記の体制で実施した。報告書の刊行は平成17年3月を期日とした。

平成14年度の発掘調査及び出土資料整理調査関係者

事業主体	今帰仁村教育委員会					
事業責任者	教育長	山城 清光				
	社会教育課長	諸喜田展生				
	社会教育課長補佐兼歴史文化センター館長	仲原 弘哲				
事務総括 調査担当者	文化財係長	田港 朝津				
	文化財係専門員	宮城 弘樹				
	文化財係主事	玉城 寿				
調査補助員	臨時職員	玉城 靖	仲里なぎさ			
発掘調査協力						
中村 誠司（名桜大学） 金武 正紀（那覇市教育委員会）						
藤田 宏（広島県立安芸府中高校教諭）						
資料整理	臨時職員					
松本 綾子						
発掘調査作業員（五十音順）						
新垣 正司	伊差川初美	上間 喜有	大城ヒデ子	金城美智子	国吉 宏	
島袋 桂吾	玉城 末子	玉城テル子	玉城日出子	玉城 松枝	玉城美代子	
照屋タツ子	照屋千代子	仲尾次元太	仲宗根 淳	仲宗根直美	仲原シズエ	
比嘉 愛子	比嘉 香代	松田 敏雄	宮城 章	山川 巖	山川 ツル	
山城 大輔	与那嶺 俊					

平成15年度の発掘調査及び出土資料整理調査関係者

事業主体	今帰仁村教育委員会					
事業責任者	教育長	山城 清光				
	社会教育課長	諸喜田展生				
	社会教育課長補佐兼歴史文化センター館長	仲原 弘哲				
事務総括	文化財係長	當山 清巳				
調査担当者	文化財係専門員	玉城 靖				
	文化財係主事	玉城 寿				
調査補助員	臨時職員	仲里なぎさ	宮城 弘樹			
		与那嶺 俊				
		仲宗根 淳				

発掘調査協力

木下 尚子（熊本大学）

資料整理 臨時職員

松本 綾子 伊差川初美 金城美智子 玉城 信江

発掘調査作業員（五十音順）

伊差川初美 金城美智子 島袋 忠雄 玉城 末子 玉城テル子 玉城 信江
玉城日出子 玉城 松枝 玉城美代子 照屋タツ子 照屋千代子 照屋 文子
仲宗根文子 比嘉 愛子 日高 寛人 松田カルザード・ユーラリア 山川 巖

平成16年度の発掘調査及び出土資料整理調査関係者

事業主体 今帰仁村教育委員会

事業責任者 教育長 山城 清光

教育長代理 吉田 克己

社会教育課長 諸喜田展生

社会教育課長補佐兼歴史文化センター館長 仲原 弘哲

事務総括 文化財係長 當山 清巳

調査担当者 文化財係専門員 宮城 弘樹

文化財係主事 玉城 寿 玉城 靖

発掘調査アドバイザー 金武 正紀

調査補助員 臨時職員 与那嶺 俊

資料整理協力

黒住 耐二（千葉県立中央博物館） 神谷 厚昭（神谷地質研究所）

資料整理 臨時職員（五十音順）

上間 恵子 玉城 美都 知念亜紀乃 仲里なぎさ 西谷麻希子 松本 綾子
与那嶺いずみ

3 調査地区

第2次発掘調査

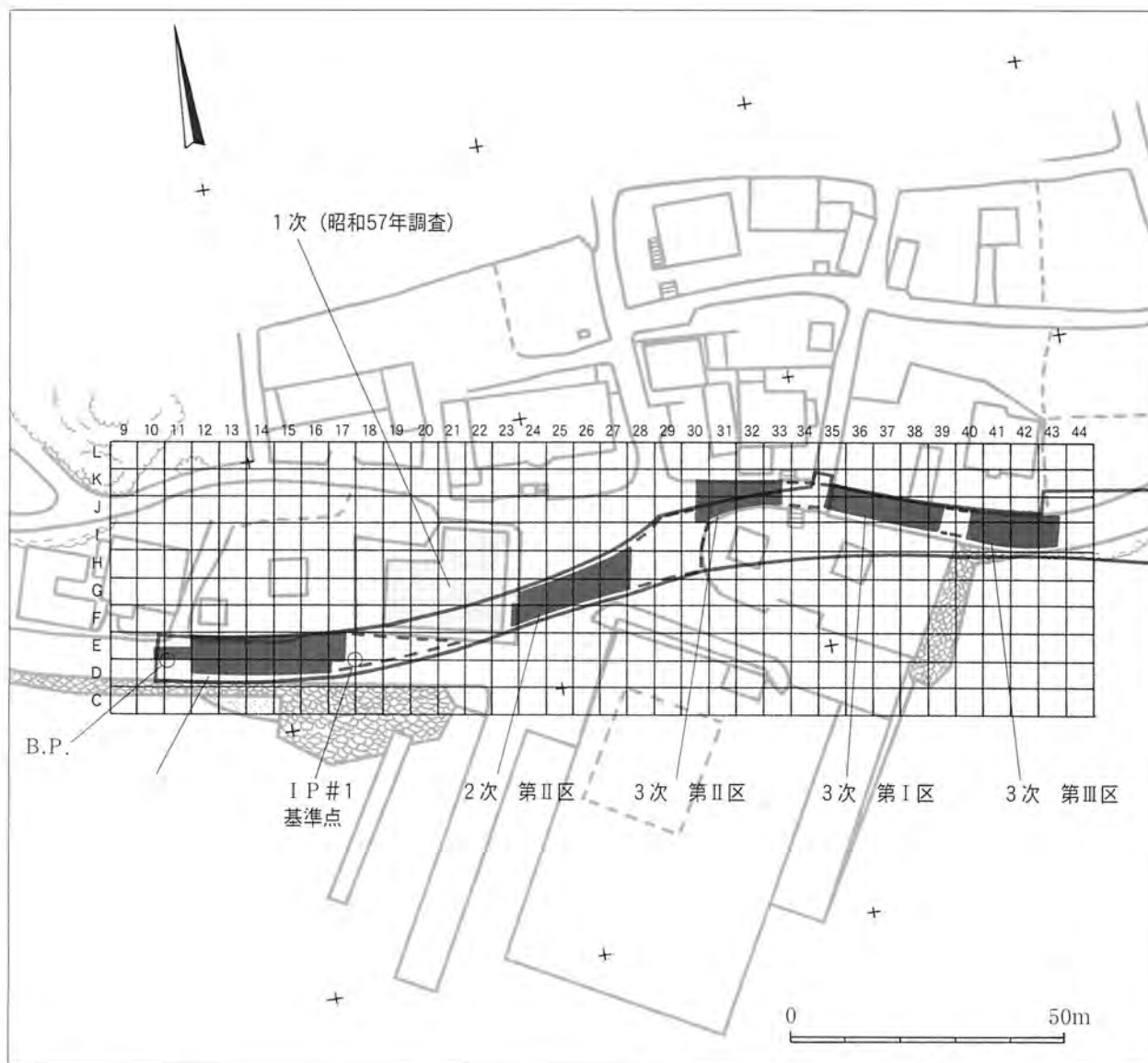
発掘調査は道路工事に伴い実施される記録保存調査である。このため調査区は道路敷下に限られており、グリッド設定にあたっては、道路のセンターラインに合わせて行った。具体的には終点となるB.P. (X=76,825.025、Y=51,477.288) とIP# 1 (x=76,810.782、y=51,514.348) を基準線としてセンターラインを設定した。また、本調査区の基準点をIP# 1 として任意の座標値 (x=100.00、y=100.00) を設定した。IP# 1 とB.P.を直線で結んだラインを基線として、5 m間隔に西から東へ10・11・12・・・、南から北へA・B・C・・・の数字、記号を用い、IP# 1 はE-17杭とした。調査対象地区は約450㎡で、D-10～15、E-10～17、F-23～26、G-23～27、H-23～27のグリッドを調査地区に定め発掘調査を実施した。

発掘調査は主にⅠ区とⅡ区の2箇所であるが、常時車両が利用する道路であることから片側交互通行ができるように両地区の北側半分を前期として、これを一端埋めた後に南側半分为後期として発掘している。

第3次発掘調査

グリッド設定は2次調査と同様にIP# 1 (任意座標値：x=100.00、y=100.00) を基準点として設定し、これの延長とした。IP# 1 はE-17である。調査対象地区は約300㎡で、I-40～43、J-35～43、K-40～43のグリッドを調査地区に定め、記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

当該地区も生活道路である。この為一端調査区外に仮設道路を通して調査を実施している。但し、商店や個人住宅の入り口が調査区に面しているなど、調査期間中住宅への出入りに不自由がおよぶと考えた。このため東西に延びるそれぞれの調査区を3回に切り回しを行って実施した。



第5図 調査地区

第Ⅲ章

層 序

第 2 次発掘調査

第 I 区前期（GHグリッド）

I 層－にぶい橙色混砂礫土層。道路工事の際のコーラル造成土である。バックホーで除去。空き缶・空きビン・ビニール等の現代遺物を含む客土層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなる。30cm程度堆積している。

II 層－黒褐色土層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなる。やや粘性のある土層でグスク時代～近世の堆積層と考えられる遺物包含層。20～40cm程堆積している。

III 層－黒色土層。粘性がなく粒子の粗い土層。南側にいくほど厚く堆積する。貝塚時代の堆積層と考えられる遺物包含層。10cm程堆積している。

IV 層－赤褐色粘土層。国頭マージ（赤土）の粘土層で地山と考えられる無遺物層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなる。

岩盤－古宇利島の基盤となっている石灰岩。

第 I 区後期（Eグリッド）

I 層－にぶい橙色混砂礫土層。道路工事の際のコーラル造成土である。バックホーで除去。空き缶・空きビン。ビニール等の現代遺物を含む客土層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなり、40cm程度堆積する。

II 層－暗褐色土層。やや粘性のある土層でグスク時代～近世の堆積層と考えられる遺物包含層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなる。10cm程堆積している。

III 層－黒色土層。粘性がなく粒子の粗い土層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなる。貝塚時代の堆積層と考えられる遺物包含層。20cm程堆積している。

IV 層－赤褐色粘土層。国頭マージ（赤土）の粘土層で地山と考えられる無遺物層。

岩盤－古宇利島の基盤となっている石灰岩。

第Ⅱ区前期（FGグリッド）

I層－にぶい橙色混砂礫土層。道路工事の際のコーラル造成土である。バックホーで除去。空き缶・空きビン・ビニール等の現代遺物を含む客土層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなり、30cm程度堆積している。

II層－黒褐色土層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなる。やや粘性のある土層でグスク時代～近世の堆積層と考えられる遺物包含層。30cm程度堆積している。

III層－黒色土層。粘性がなく粒子の粗い土層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなる。貝塚時代の遺物包含層で最厚部は60cmを測る。

IV層－赤褐色粘土層。国頭マージ（赤土）の粘土層で地山と考えられる無遺物層。

岩盤－古宇利島の基盤となっている石灰岩。

第Ⅱ区後期（Dグリッド）

I層－にぶい橙色混砂礫土層。道路工事の際のコーラル造成土である。バックホーで除去。空き缶・空きビン・ビニール等の現代遺物を含む客土層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなり、20～70cm程度堆積している。

II層－暗褐色土層。やや粘性のある土層でグスク時代～近世の堆積層と考えられる遺物包含層。下部にいく程シャコガイなどを中心に貝類の出土が目立つ。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなり、20～70cm程堆積している。

III層－認められない。

IV層－赤褐色粘土層。国頭マージ（赤土）の粘土層で地山と考えられる無遺物層。

岩盤－古宇利島の基盤となっている石灰岩。

第3次発掘調査

第Ⅰ区（J-35～39、K-35～37グリッド）

I層－にぶい橙色混砂礫土層。道路工事の際のコーラル造成土である。バックホーで除去。空き缶・空きビン・ビニール等の現代遺物を含む客土層。層は約30cm程度堆積している。

I b層－暗褐色土層。一見するとⅢ層と酷似するが、土層の締まりが悪い。港湾工事等の開発工事により一度破壊され、また埋められたと考えられる層。

Ⅱ層－暗褐色混砂礫層。やや粘性のある土層でグスク時代～近世の堆積層と考えられる遺物包含層。5～10cm程度堆積する。道路造成時に破壊を受けており、場所によっては見受けられない。

Ⅲ上a層－暗褐色土層。粘性がなく粒子の粗い土層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなる。貝塚時代の堆積層と考えられる遺物包含層。30～40cm堆積し、厚い所では70～80cm堆積する。

Ⅲ上b層－暗褐色混砂礫層。樹根による影響と考えられる土層。

Ⅳ層上－褐色土層。Ⅲ層（暗褐色土層）からⅤ層（地山）へと移行する漸移層。粘性は弱く、Ⅳ層上bにいくにつれて強くなる。上面ではpit状の遺構が検出される。

Ⅳ層－赤褐色粘土層。国頭マージ（赤土）の粘土層で地山と考えられる無遺物層。粘性は強い。

岩盤－古宇利島の基盤となっている石灰岩。

第Ⅱ区（J-30～34、K-30～34グリッド）

I層－にぶい橙色混砂礫土層。道路工事の際のコーラル造成土である。バックホーで除去。

Ⅳ層－赤褐色粘土層。国頭マージ（赤土）の粘土層で地山と考えられる無遺物層。粘性は強い。

岩盤－古宇利島の基盤となっている石灰岩。

第Ⅲ区（I-40～43、J-43グリッド）

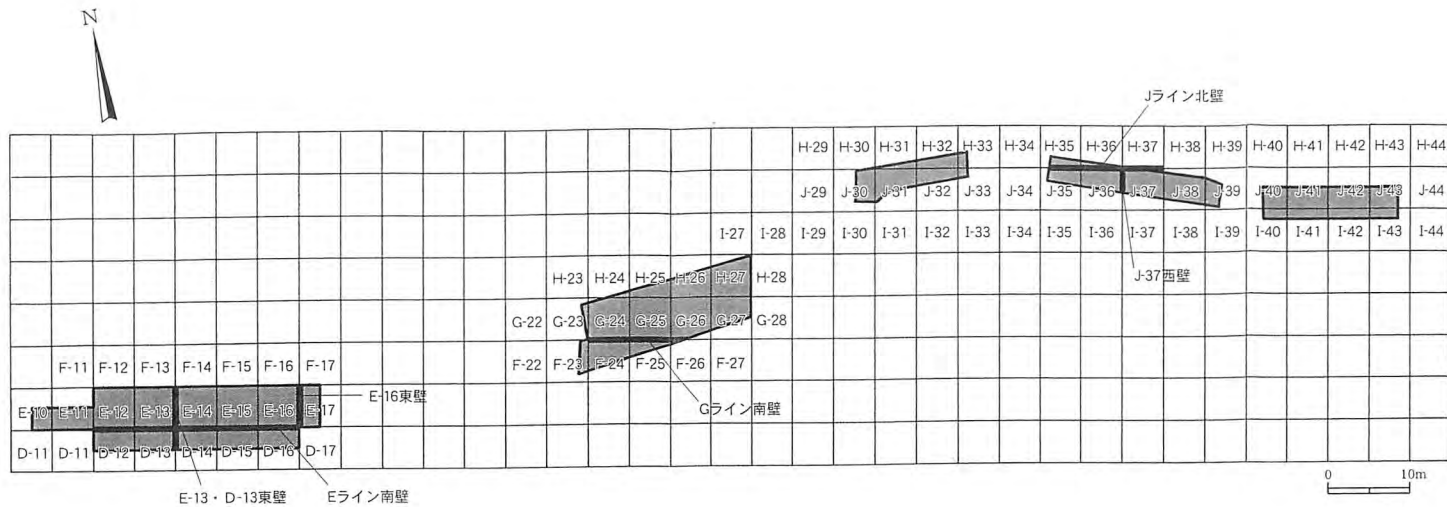
I層－にぶい橙色混砂礫土層。道路工事の際のコーラル造成土である。バックホーで除去。空き缶・空きビン・ビニール等の現代遺物を含む客土層。層は約30cm程度堆積している。

Ⅱ層－暗褐色混砂礫層。やや粘性のある土層でグスク時代～近世の堆積層と考えられる遺物包含層。全体的に20～30cm程度の堆積だが、南東側にいくにつれて傾斜し厚くなり、東端では約100cm堆積する。遺物はそこに流れ込み、大量に出土する。

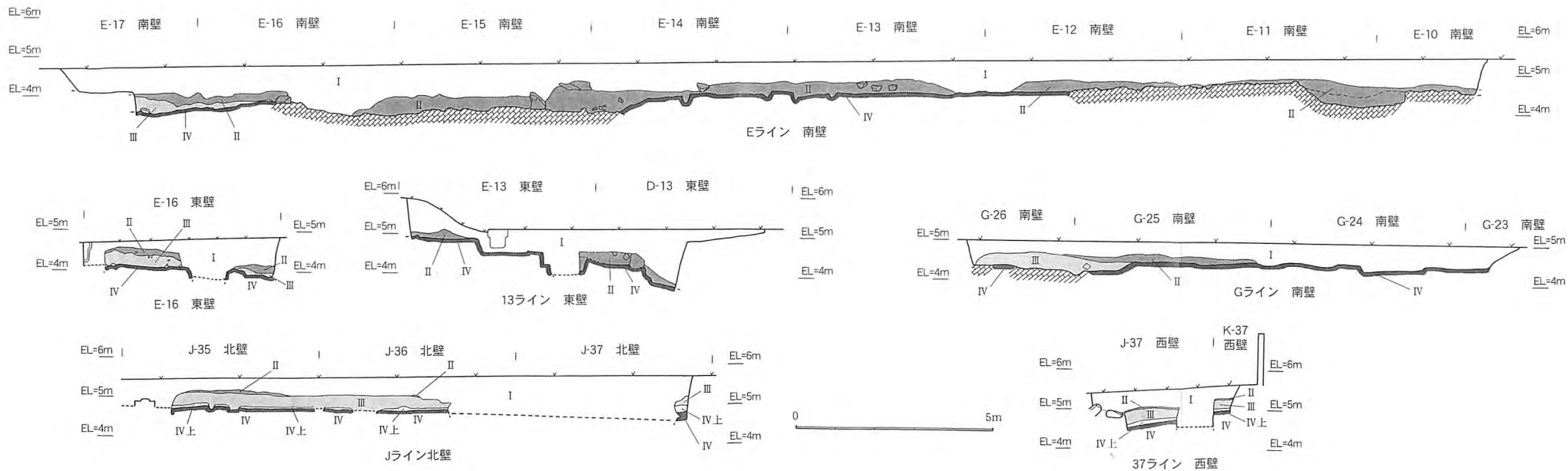
Ⅲ層－暗褐色土層。粘性がなく粒子の粗い土層。層は南側へ緩やかに傾斜し厚くなる。貝塚時代の堆積層と考えられる遺物包含層。30～40cm堆積し、厚い所では70～80cm堆積する。

Ⅳ層－褐色土層。Ⅲ層（暗褐色土層）からⅤ層（地山）へと移行する漸移層。粘性は弱く、下層にいくにつれて強くなる。

岩盤－古宇利島の基盤となっている石灰岩。



第6図 セクション位置図



第7図 古宇利原 A 遺跡セクション図

第Ⅳ章

遺 構

1 先史時代の遺構

1) 性格不詳の落ち込み遺構 (第8図・第10図・第11図)

E-14～15グリッドでは不定形の落ち込みが確認された (第8図)。浅い落ち込みで性格は不明。1982年に実施した発掘調査では本地点の北東側で環状集石遺構 (竪穴住居跡) が検出されていることから、一帯が縄文時代の生活跡であることが分かっている。本遺構も縄文時代に帰属すると考えられるが機能については判然としない。地山を浅く掘り窪めたもので、落ち込みは不連続的に10基確認されている。そのうち6基について詳細を図示している (第11図)。いずれの落ち込みも深さ10cm程度と浅く窪んでいる程度である。

同様の遺構は第3次調査 (第10図) でも検出されておりいずれもピットとして報告している。これも深さは10cmにも満たないもので柱穴になるのかは不明であるが、規格性に乏しい配列で検出された浅い落ち込みである。しばしば縄文時代並行期の遺跡では柱穴とするには不整形で浅い落ち込みが見られる。このような遺構が例えば竪穴住居跡などに付帯するような柱穴なのか、あるいは別途の遺構であるのかは解らない。今後検討検討されるべき遺構である。

2) S S 2 [貝塚] (第9図)

G・H-24グリッドで貝が集中して出土した。当該調査地域ではⅢ層から貝が多出するケースが少なかったため、G・H-24グリッドで出土した貝が唯一集中的に検出された地点であると言える。この為、貝塚状の堆積として遺構の項において紹介する。前述したように、西側では以前の調査で縄文時代の住居跡が検出されていることから、一帯が縄文時代の生活跡であることが分かっている。本遺構も縄文時代に帰属すると考えられる。石斧 (第18図3) や、骨製品など多くの遺物が含まれていたが、分布は局地的である。これは当該地域一帯に広がっていた貝層の端部であるため、もしくはこの地域以外については後世に攪乱を受けたため失われた結果であると考えられる。貝塚状の堆積は岩盤に堆積するような状況であり、岩盤の窪みに堆積した貝層が攪乱から免れたのではないかと考えられる。

2 グスク時代以降の遺構

1) S R 1 [石列遺構] (第9図・第12図)

G-25グリッドの端部で検出された遺構。約30cmの大きめの石灰岩を直線に3.5m程度並べる。遺構北側周辺 (第Ⅰ区G-25) に粘性のない黒色土層が広がっていたことから、当初は貝塚時代の包含層と考えられた。しかし掘り下げた結果、石列直下にやや粘性の強い黒褐色土層が数cm程度堆積するのに加えて、遺構南西側周辺にも黒褐色土層が広がっていた。よって当該遺構はグスク時代から近世以降に形成された構築物と考えられる。直下には岩盤が広がる。当該遺構周辺には付随すると考えられる明瞭な柱穴は検出されなかった。性格不詳の遺構である。

2) S R 2〔石列遺構〕(第8図)

E-13~15グリッドの北端で検出された。北から南へ傾斜する斜面に構築されることから土留め的な目的で構築されたと考えられる。近現代の柱穴や土坑などの多くはこの、SR2を境に北側で検出され、貝を集中廃棄したと考えられる小規模の貝廃棄遺構は当該遺構南側で検出されることから、この遺構を境に北側が生活箇所、南側が廃棄箇所として分けししていたものと類推される。約50cmの大きめの石灰岩を円弧状に並んで検出された。約10mの長さになる。遺構覆土や遺構下からはグスクから近世の包含層が被覆、近代の遺物を多く含むことから構築年は近代を遡らないと考える。よって当該遺構は近代に形成された遺構と考えられる。当該遺構の東側にはシャコガイが多数出土した、また、石列遺構除去後にも柱穴(SP.70~81)が検出されている。

3) SP.1~81〔柱穴〕(第8・9図)

いずれも10cmにも満たない浅いピットでグスク時代~近代に構築された柱穴と考えられる。岩盤を浅く掘りこんだものから、地山を掘るものなど構築された遺構の基盤層によっても状態は異なる。SP.1~5は調査時には建物跡の礎石跡と考えられた。しかし、柱列が1列であることなどからこれを礎石の抜き取り跡とするには判断材料に乏しいことから遺構の性格については保留した。

4) S S 4~7〔貝廃棄遺構〕(第8図)

S S 4はE-15グリッドで確認された二枚貝廃棄遺構で、二枚貝(ソメワケグリ)を476個(最小個体数)回収、その下位からヤコウガイ1個が検出された。

S S 5はD-12グリッドで確認されたマガキガイ廃棄遺構でマガキガイが115点採集されている。

S S 6はD-12グリッドで確認されたマガキガイ廃棄遺構でマガキガイが36点採集されている。

S S 7はD-12グリッドで確認されたマガキガイ廃棄遺構でマガキガイが66点採集されている。

S S 5~7のいずれもマガキガイを主体とする集貝と一緒に検出される遺物もほとんどないことから廃棄された年代を推定することは難しい。しかし、当該地区ではグスク時代~近代までの遺物が散見的に含むⅡ層から検出されることから、グスク時代から近代のいずれかの時代に廃棄されたものとする。

S S 4 (E-15) Ⅱ層

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| ●ソメワケグリ 右458 左476 | ●ザルガイ科(オオヒシガイ?) 右1 左2 |
| ●イソハマグリ 右1 | ●ヒメジャコ 右1 |
| ●アラスジケマンガイ 右1 | ●カワラガイ 左1 |
| ●マガキガイ 6 | ●ヤコウガイ 1 |
| ●チョウセンサザエ フタ 5 | ●サラサバテイ 破片1 |
| ●タカラガイ科 1 | ●オキニシ科 1 |
| ●イモガイ科 1 | |

SS5 (D-12) II層

- イソハマグリ 右23 左14
- マガキガイ 115
- サラサバテイ 破片2
- イトマキボラ科 1
- ヒメアワビ科 1
- アラスジケマンガイ 右1
- チョウセンサザエ フタ 4
- アマオブネ 1
- ニシキウズガイ科 1
- マイマイ 7

SS6 (D-12) II層

- イソハマグリ 右6 左1
- マガキガイ 36
- ヒメイトマキボラ 1
- タカラガイ科 1
- チョウセンサザエ 1 同フタ 1
- シオボラ 1

SS7 (D-12) II層

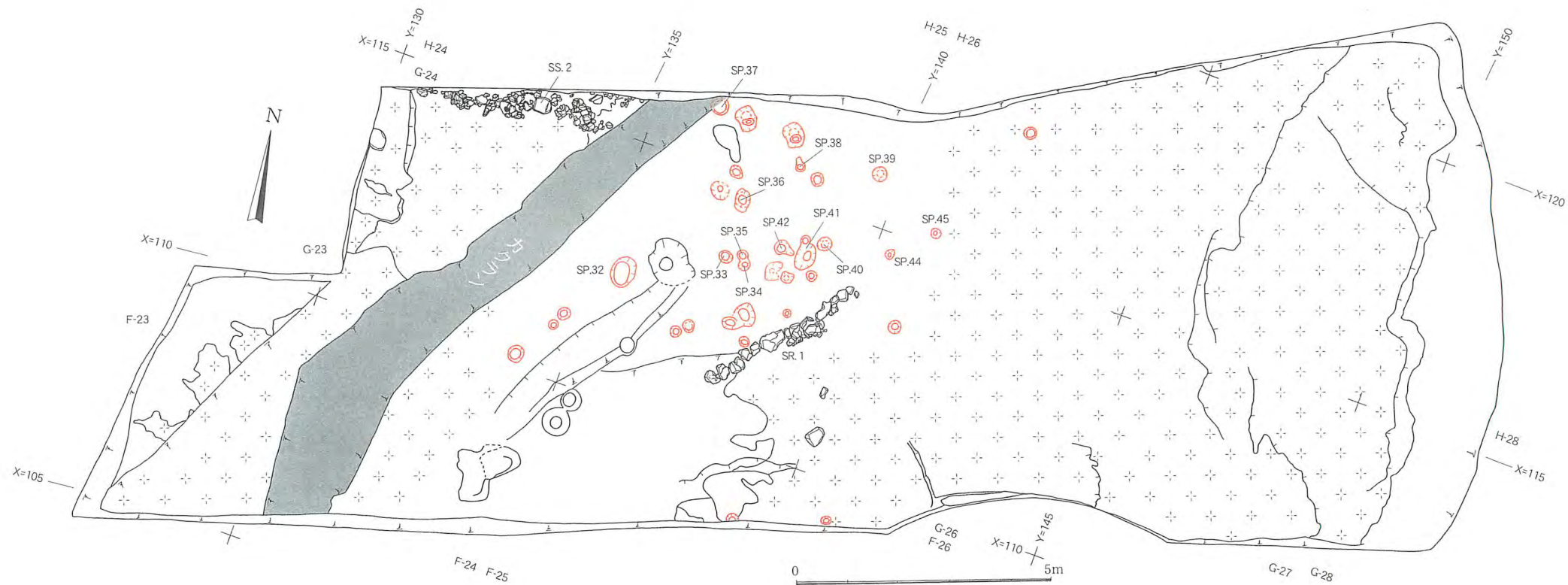
- イソハマグリ 右9 左7
- マガキガイ 66
- チョウセンサザエ 1 同フタ 2
- タカラガイ科 1

5) SS8〔シャコガイ集中遺構〕(第13図)

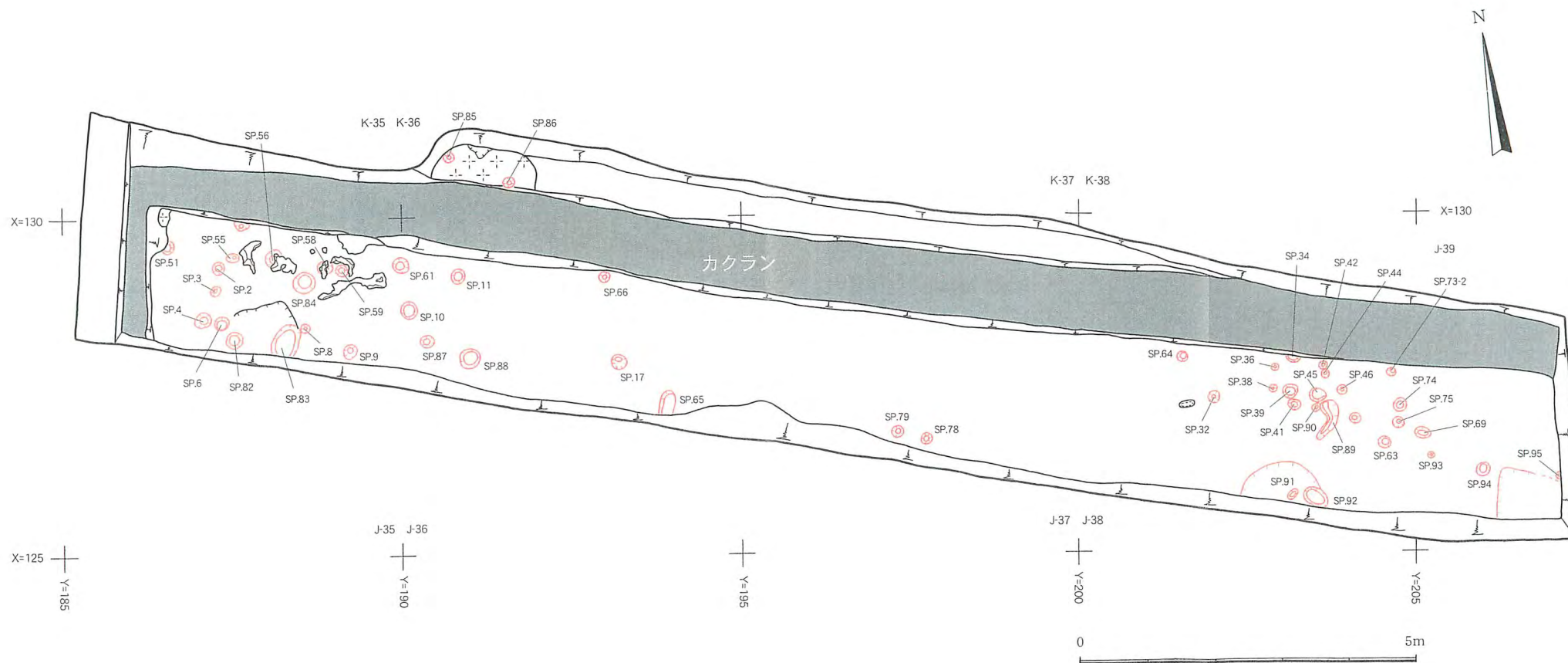
D-15グリッドではシャコガイ集中遺構が検出された。シャコガイはSR2に挟まるように集中しており、土留め石積みの材料としてシャコガイを利用するような状況であった。検出されたシャコガイ遺構の除去後、その下位よりマガキガイが集中して検出された。遺物も散在的に出土しており廃棄場としての性格を考える。その構築年代はグスク時代や近世のものもふくまれるが、近世末から近代以降の沖縄産陶器や本土産陶磁が主体となることから古く遡ることのない遺構と推定される。

6) SD1・SD6〔土坑〕(第8図)

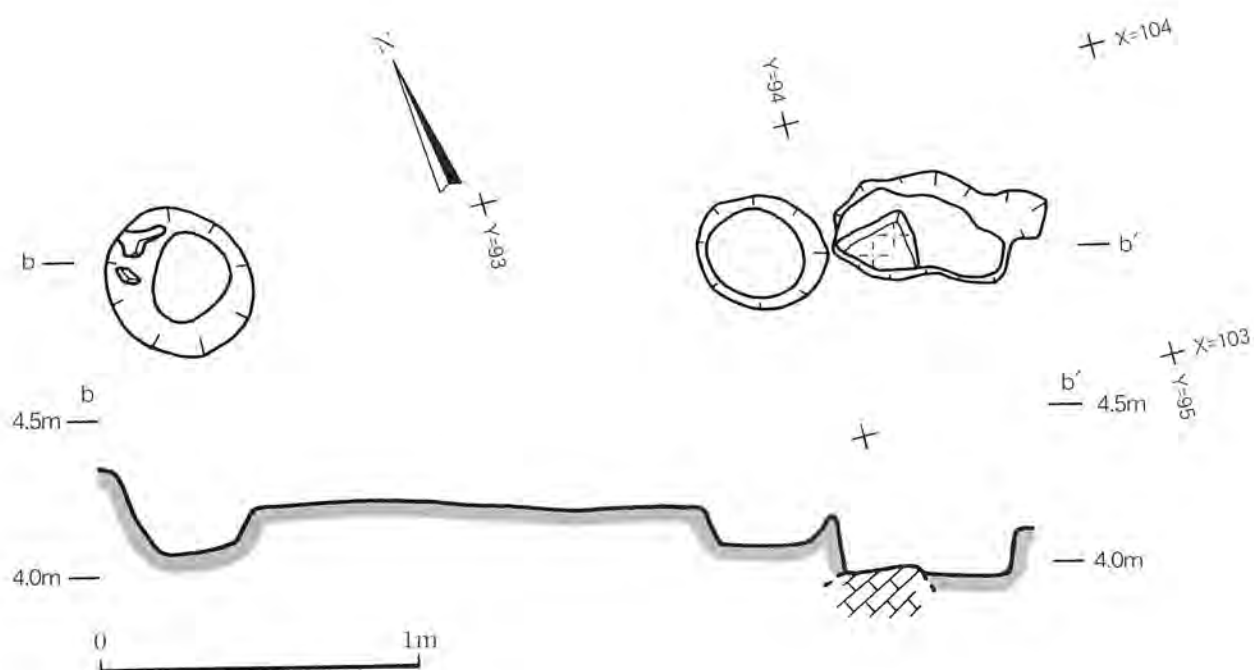
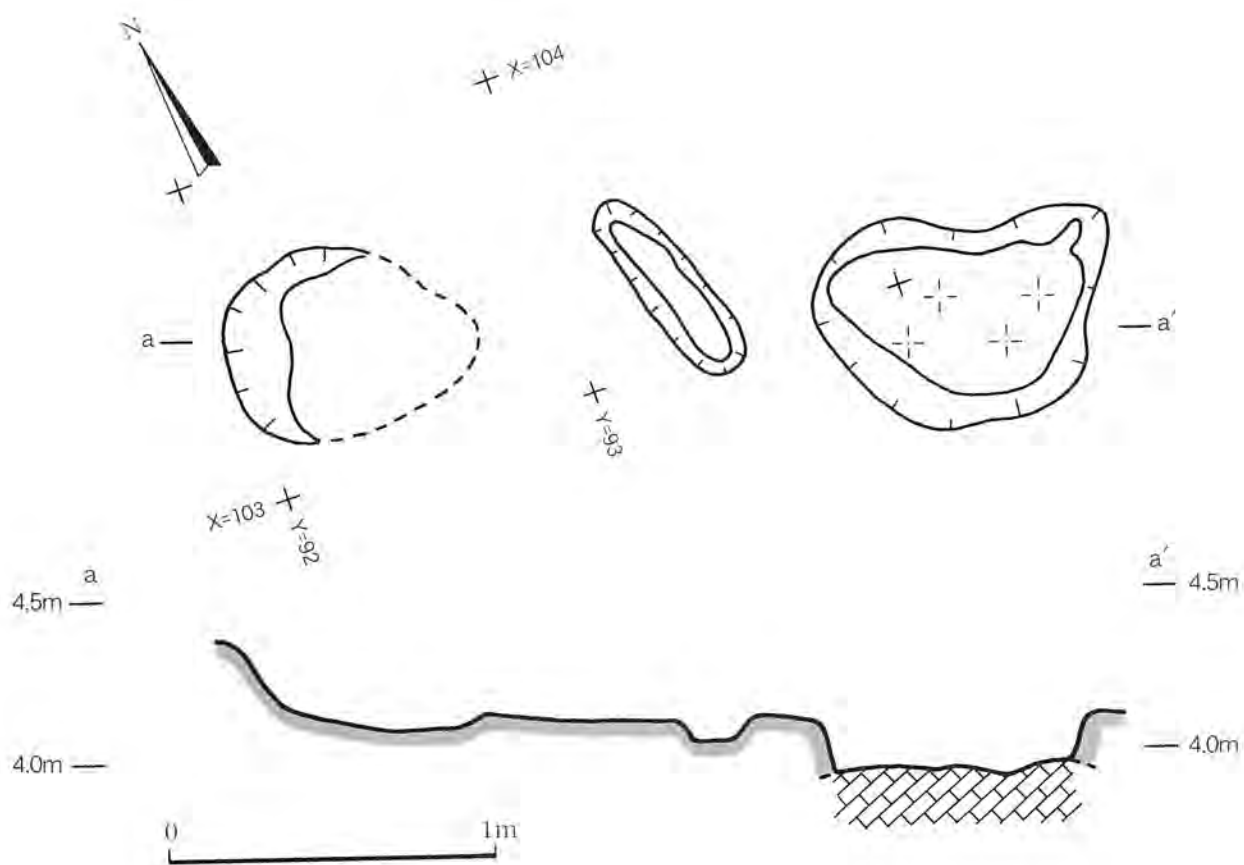
E-15からSD1(1~3)とSD6が検出された。SD6は攪乱溝によって北と南に分断されるが、北側を検出当初SD2として検出している。このSD6では銭貨(第33図4)が出土している。いずれも性格不詳の土坑で近世以降の遺物を含んでいる。



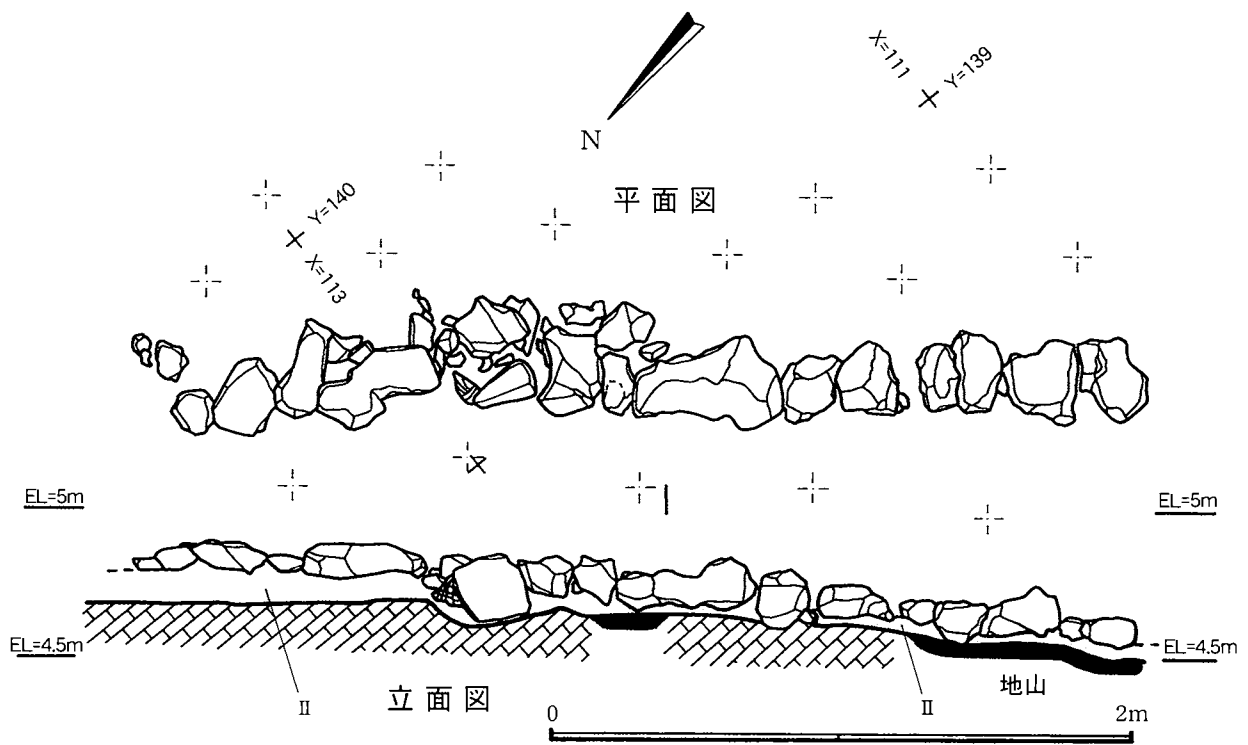
第9図 第2次調査 第II区遺構配置図



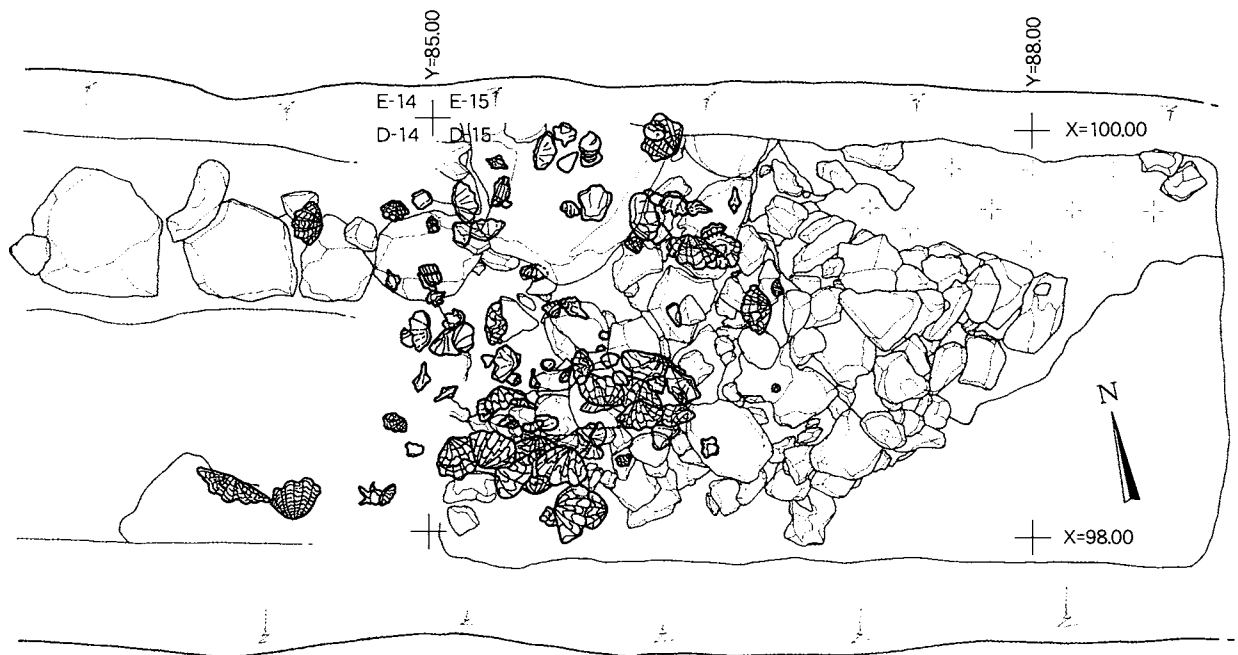
第10図 第3次調査 第I区遺構配置図



第11図 性格不詳の落ち込み遺構



第12図 SR1〔石列遺構〕詳細図



第13図 シャコガイ集積 (SS8) 遺構詳細図

第V章

人工遺物

1 先史時代の遺物

1) 土器

土器は2次調査の地区から多く出土している。今回得られた資料は口縁部資料を4群に大別分類した。また底部資料についてはその形状から3類に分類した。各分類は、現在の研究成果を踏まえて各遺物毎に詳述していく。

口縁部資料

I 群（第14図1） 器色はにぶい黄橙色で口縁部を外反させる器形となる。外面には2条の突帯文が施され、その上面に斜沈線を描く。いわゆる仲泊式として型式設定された経緯のある土器である。仲泊式は仲泊遺跡を標式とする資料で尖底の深鉢形土器、文様によってa種の貝殻腹縁部による刺突文、斜沈線文。b種の棒状工具による沈線文の2種に分けられる（當眞・上原1982）。本資料は後者に属する資料で前回調査（第1次調査）でも出土したものと同類のものである。

II 群（第14図2～16、第15図17～29） 口縁部が波状口縁になる土器群で胴部でふくらみを持ち、底部は平底となる。口縁外面に幅広の文様帯をつくり、概して第1文様帯～第4文様帯に区分され、先端の尖った棒状工具、叉状工具、単篋工具などによって点刻文、連点文、短沈線文によって文様を描く。口唇部にも文様を施すものもある。器色は明褐色、明黄褐色となる。文様や器形によってこれまで荻堂式、伊波式に整理されている資料でこれを参考に下記に4種に分け報告する。

a 類：2は摩耗が著しく型式の判別は困難であるが上面観が方形になる胴部（角部分）資料である。先端の尖った工具による押し引き文（三角刺突文）を網代状に施すように見られる、いわゆる面縄東洞式に属すると思量される。3は文様部分の摩滅が著しく型式の判別は困難であるが、やはり先端の尖った工具による押し引き文を主体とする。沈線文を間に入れること、文様帯が若干肥厚することから、いわゆる嘉徳IA式に属すると思量される。両者とも全体的な器形等が判然としないため、検討を要する資料である

b 類：4～11はいわゆる伊波式土器に該当する資料でいずれもE-16・17で得られている。6・10は口唇部に連点文や短沈線を施す資料で、他の資料は口唇部の施文は無く無文となる。口縁部に2列1条の連点文を第2文様帯は空白をつくって第3文様帯も口縁上端の文様と同様2列1条の連点文を施す。10は縦位に区画文を施す資料である。

c 類：荻堂式に該当すると考える資料である。12～17は山形口縁の頂部資料で上面観が方形にならず、ほぼ円形となること、摩滅が著しいがいずれも山形頂部を肥厚、もしくは瘤状突起状に成形することから荻堂式に該当すると考えた。12は短沈線による文様を口縁部に施す資料である。13・14は連点文、15は単篋工具による押し引き文で横捺刻文となる。16は沈線による文様を描く、縦位区画文も明確で典型的な荻堂式に該当する。17は摩滅が著しく型式の判別は困難だが、単篋工具による押し引きによって口縁を施文する山形頂部の資料。18～20は山形頂部はないが口縁部資料でいずれも幅の狭い半裁竹管、単篋工具によって押し引き文を描く。18・20は文様下端に鋸歯文が見られる。21～23は胴部資料で、やはり半裁竹管工具による押し引き文によって描かれ、文様の下端には鋸歯文が描かれる。24は幅の

狭い単篋工具によって文様を描き、山形頂部に近い箇所破片資料で文様は網代状に密に施す。25はやや幅の広い単篋工具による横捺刻文で口縁下に3条並列、山形頂部は僅かに高まりとなっている。大山式に近い要素も持っていることから過渡的な土器と想定される。26は典型的な荻堂式からはややはずれる資料であるが、山形頂部が肥厚する点などから当該分類に含めた。斜沈線は無軸羽状文で描いている。

壺：27・28はこれまでの先史時代遺跡の調査からは伊波式・荻堂式土器に属すると考えられる。このため、第Ⅱ群土器の壺として報告する。27は波状口縁、28は平口縁となると考えるがいずれも小破片で図上復元を試みたため検討を要する。

Ⅲ群（第15図29・第16図30～32） 大山式に該当する資料。29は5条の横捺刻文を口縁に、30・31は2条の横捺刻文を口縁に施す。いずれも直上する胴部から口縁部で若干外反する器形。32は器形が判然としないが、横捺刻文を施すことから本分類に含めた。

Ⅳ群（第16図33～39） 肥厚口縁の資料で、肥厚の形状から細分可能だが蒲鉾状に肥厚するa類と方形に肥厚するb類に概略細分した。

a類：33～38は室川式に該当すると考えられる資料で、肥厚口縁の断面の形状によって更に細分も可能と思量される。タイプサイトである室川貝塚出土資料に比べると胎土・器色が異なる。胎土から見ると前述のⅡ・Ⅲ群に近い。このような特徴は長根原遺跡（宮城ほか2002）で主体資料となった資料も同様な傾向を示している。

b類：39はカヤウチバンタ式に該当する資料で、断面歯ブラシ状の肥厚となる。若干、器表面がアバタ状になる。

型式不詳の土器（第16図40～42・第17図43～45） いずれも小破片の為分類を留保した資料である。40は胎土の特徴からⅡ群に属すると思量される。口縁部に連点文を施し口唇部も刻目文を施す。41も口縁部に沈線によって格子状の文様を施し、口縁部にも同様に格子状の文様を刻む。胎土の特徴からⅣ群に近いと考えるが口縁部は肥厚しないため不明資料として報告する。42は先端の尖った工具による押し引き文（三角刺突文）を施す資料で口縁部上面観は波状になるとも判断でき、胎土もⅡ群に近いことからⅡ群で整理できると考える。小片であることから今回は分類を留保する。43・44は無文の口縁部資料で外に大きく開く器形で胎土からはⅣ群に近い資料と目され、後者は内面に調整時の擦痕を残す。45は胴部資料で、いわゆる貝塚時代後期の土器と推測される。具体的な型式名としてはフェンサ下層式などが近いと考える。しばしばグスク時代の遺物に伴うことも報告されることから後述するグスク時代の遺物の中で報告するべきとも考えたが、本節で報告する。

底部資料（第17図46～57）

A種（46～51） 底面からストレートに張りのある胴部へ、斜め方向に立ち上がる資料。胎土からⅡ・Ⅲ群土器の特徴を有する。50は内面、51は外面に調整痕が残る。

B種（52～55） 円盤状の粘土塊の上面より輪積みして底部を成形。底部に厚みがあり立ち上がり部で一端直上し胴部へいたる。Ⅱ・Ⅲ群土器の胎土と近似する。

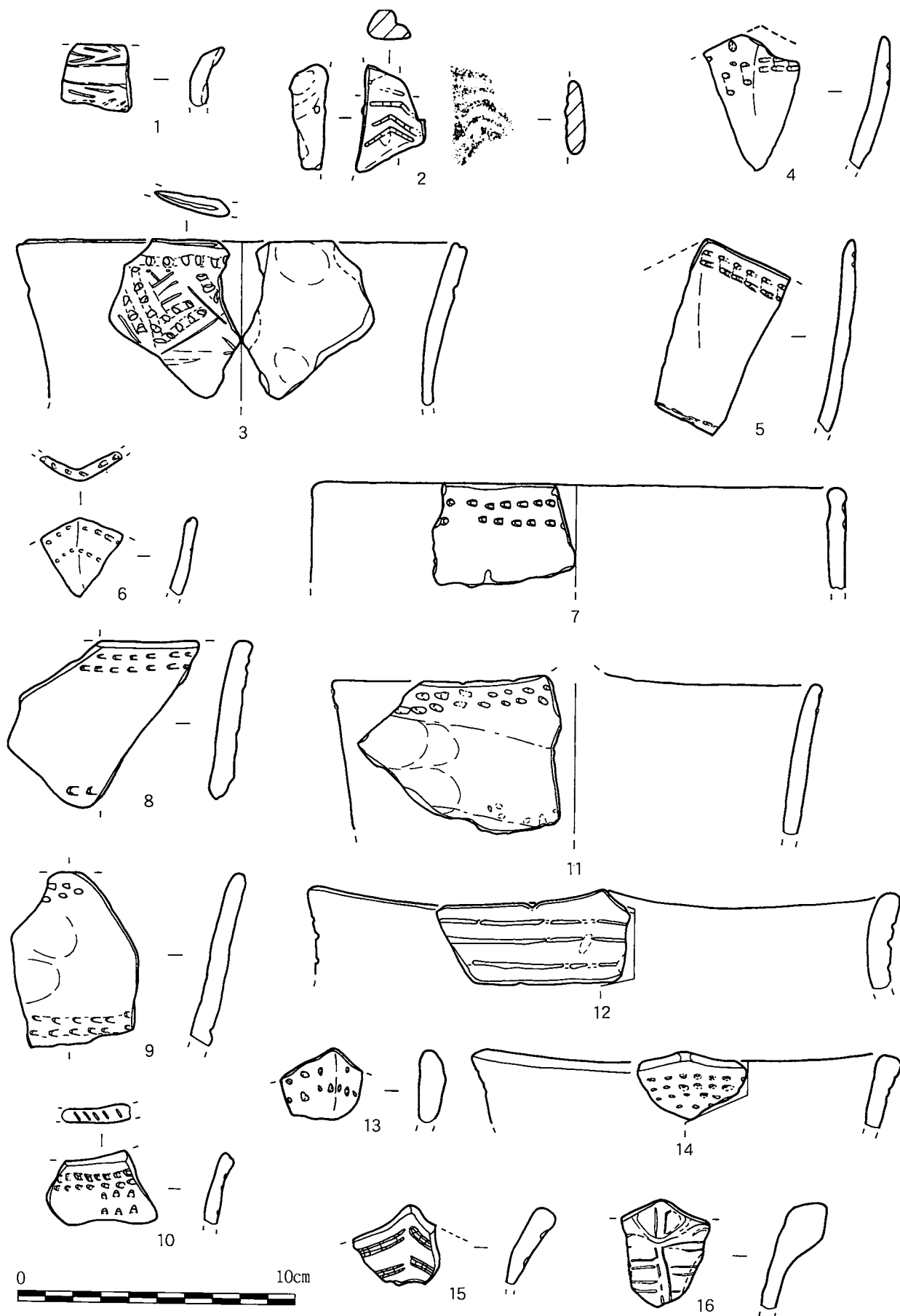
C種（56・57） 底面に厚みがあり、立ち上がりの稜は丸みがある。胴部へと斜めに開く器形。胎土からⅣ群土器の特徴と近似する。

第4表 出土土器観察表(1)

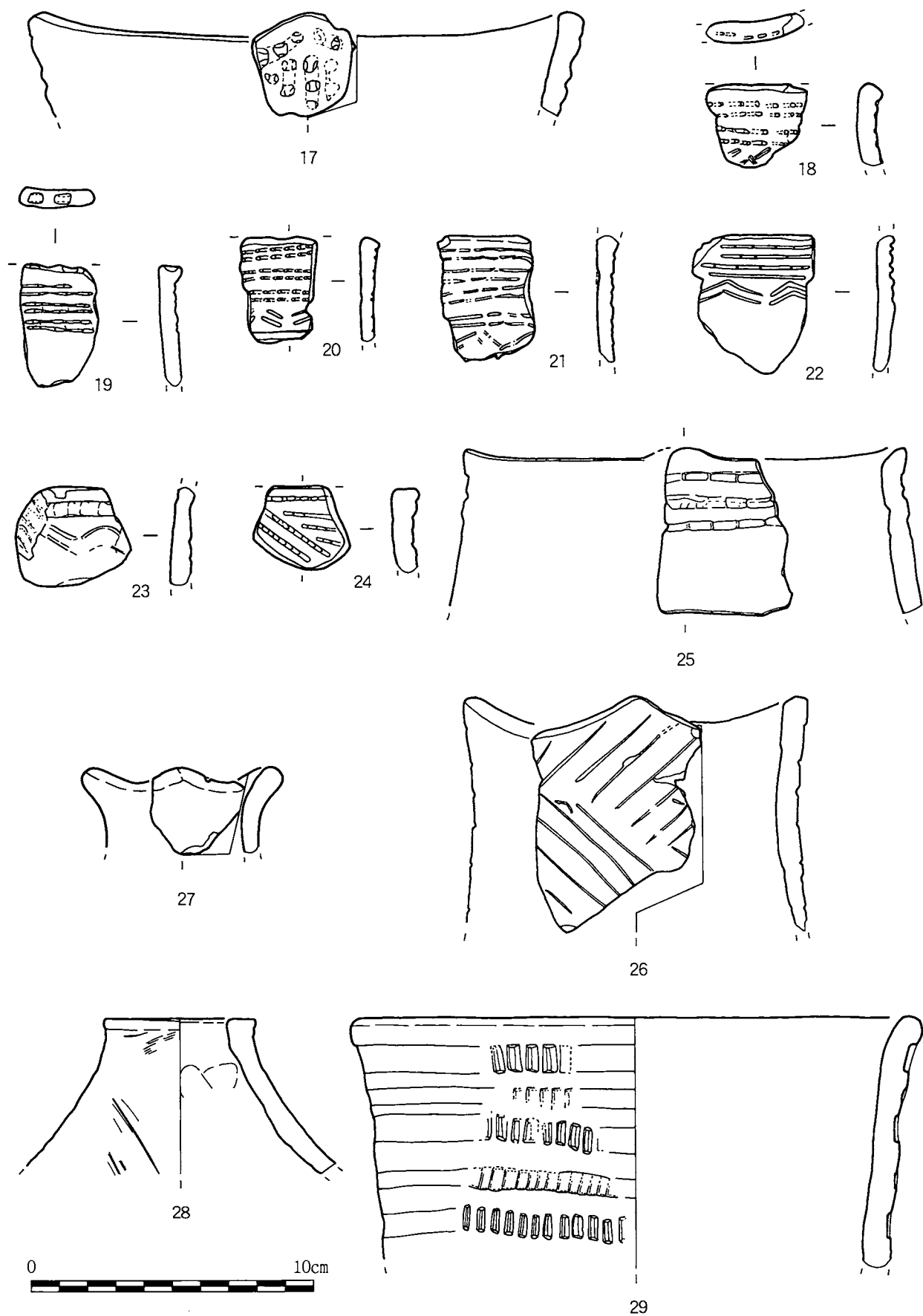
図 番号	図版 番号	枝 番号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	遺物No	分類	器種	部位	胎土・混和材	計測値(単位cm/g)			施文具	文様・装飾
													口径	器高	底径		
14	26	1	2	E-17	I	—	—	8712	I 群	深鉢	口縁部	石英・石灰岩細粒を混入。	—	—	—	棒状工具	口縁部を外反。羽状文を突帯上に施文。
14	26	2	3	J-35	III	—	1552	1678	II 群 a	深鉢	胴 部	石英・チャート・石灰岩質の粗粒混入。	—	—	—	先端の尖った棒状工具	押し引きによる鋸歯文。
14	26	3	3	J-35	IV	—	851	927	II 群 a	深鉢	口縁部	石英・チャート・石灰岩質の粗粒・砂粒と、金雲母を混入。	15.4	—	—	先端の尖った棒状工具	外面に点刻文により網代文を描き、点刻文間に斜沈線文が施される。口唇部上端に沈線文。
14	26	4	2	E-17	III	—	—	8541	II 群 b	深鉢	口縁部	石英の細粒、チャートの粒子を混入。	—	—	—	又状工具	口縁部に二条一組の連点文。山形口縁の頂部資料。
14	26	5	2	E-16	III	—	8808	—	II 群 b	深鉢	口縁部	石英・チャート・粘板岩の粒子を混入。	—	—	—	又状工具	口縁部、頸部に二条一組の連点文。山形口縁の頂部資料。
14	26	6	2	E-16	III	—	8198	—	II 群 b	深鉢	口縁部	石英・チャート・粘板岩の細粒を混入。	—	—	—	単覧工具	山形口縁の頂部資料。口縁部に三条の点刻文。口唇部にも点刻文有り。
14	26	7	2	E-17	III	—	—	8541	II 群 b	深鉢	口縁部	胎土は比較的堅緻。石英・粘板岩の粗粒を混入。	19.4	—	—	単覧工具	口縁部に二条の点刻文。内外面に横方向の擦痕(器面調整)有り。
14	26	8	2	E-17	III	—	8377	—	II 群 b	深鉢	口縁部	石英・チャート・粘板岩の砂粒を混入。	—	—	—	又状工具	口縁部、頸部に二条一組の連点文。
14	26	9	2	E-17	III	—	8401	—	II 群 b	深鉢	口縁部	粘板岩の粗粒、石英・チャートの砂粒を混入。	—	—	—	又状工具	口唇部は摩滅している。口縁部に二条一組の連点文。胴部に点刻文。
14	26	10	2	E-16	III	—	8250	—	II 群 b	深鉢	口縁部	胎土は比較的堅緻。石英・チャートの砂粒を混入。	—	—	—	先端の尖った棒状工具	口縁部は点刻文。口唇部には刻目文が施される。
14	26	11	2	E-17	III	—	8400	—	II 群 b	深鉢	口縁部	粘板岩の粗粒、石英・チャートの砂粒を混入。	17.0	—	—	又状工具	口縁部に二条一組の連点文。
14	26	12	2	G-25	III	—	9015	—	II 群 c	深鉢	口縁部	石英・チャート・石灰岩質の粗粒を混入。	21.4	—	—	又状工具	山形口縁。口縁部に、2条一組の単沈線文を押し引きする。
14	26	13	3	J-41	IV	—	2037	2233	II 群 不明	深鉢	口縁部	石英・粘板岩・石灰岩質の粗粒混入。	—	—	—	又状工具	山形口縁で、山頂部から下方への縦位稜線。外面に点刻文。
14	26	14	2	E-17	III	—	2301	—	II 群 不明	深鉢	口縁部	石英の細粒・微粒を混入。	15.5	—	—	又状工具	山形口縁。口縁部に多条の点刻文。
14	26	15	2	G-25	III	—	7802	—	II 群 c	深鉢	口縁部	石英・チャートの細粒を混入。	—	—	—	半裁竹管状工具	山形口縁。連点文を二条に施す。
14	26	16	3	J-37	III	畦	1580	1706	II 群 c	深鉢	口縁部	泥岩・石灰岩質の碎片と、石英・チャート・粘板岩・石灰岩質の微粒混入。	—	—	—	篋状工具	山形口縁。外面に沈線文。
15	27	17	3	J-43	III	—	2828	3158	II 群 c	深鉢	口縁部	石英の微粒と、泥岩・粘板岩の粗粒混入。	19.0	—	—	半裁竹管状工具	山形口縁。外面に点刻文。口唇部にも点刻文?
15	27	18	2	G-26	III	—	—	8437	II 群 c	深鉢	口縁部	石英・チャート・泥岩・粘板岩の微粒を混入。	—	—	—	又状工具	外面に連点文と鋸歯文、口唇部には連点文を施す。
15	27	19	2	D-14	III	石列	9692	—	II 群 c	深鉢	口縁部	石英・チャート・泥岩・粘板岩の細粒を混入。	—	—	—	半裁竹管状	外面に三条の連点文。口唇部にも連点文有り。
15	27	20	2	H-25	III	—	6762	—	II 群 c	深鉢	口縁部	石英・チャートの微粒を混入。	—	—	—	又状工具	外面に連点文と鋸歯文。
15	27	21	2	G-25	III	—	7593	—	II 群 c	深鉢	胴 部	石英・チャート・貝殻・泥岩の粗粒混入。	—	—	—	又状工具	押し引き文の下部に鋸歯文。
15	27	22	2	H-25	III	—	3577	—	II 群 c	深鉢	胴 部	石英・チャート・粘板岩の細粒を混入。	—	—	—	又状工具	外面に沈線文(やや連点文?)と鋸歯文を施す。内面には器面調整のための擦痕が斜め方向に残る。
15	27	23	3	K-36	III	—	106	144	II 群 c	深鉢	胴 部	石英・泥岩・粘板岩・石灰岩質の粗粒・細粒を混入。	—	—	—	半裁竹管状工具	横位押し引き文と鋸歯文。
15	27	24	2	G-25	III	—	6044	—	II 群 c	深鉢	口縁部	石英・チャートの粗粒や微粒を混入。	—	—	—		山形口縁?外面に、やや連点文がかった斜沈線文(綾杉文?)を施す。
15	27	25	2	E-17	II	—	8497	—	II 群	深鉢	口縁部	チャート・泥岩の粗粒混入。	15.8	—	—	半裁竹管状	山形口縁。横位文(左から右へ)を三条施す。
15	27	26	2	G-26	III	—	8675	—	II 群 不明	深鉢	口縁部	石英・チャートの碎片、金雲母を混入。	12.3	—	—		山形口縁。外面に斜沈線文(綾杉文?)有り。
15	27	27	2	H-25	III	—	5350	—	II 群 d	壺	口縁部	粘板岩の碎片、石英・チャート・貝殻の細粒を混入。	7.2	—	—		山形口縁。
15	27	28	2	H-25	III	—	3973	—	II 群	壺	口縁部	石英・チャート・石灰岩・泥岩・粘板岩の砂粒を混入。	5.4	—	—		無文。外面に指圧痕・擦痕・ナデ痕が、内面に指圧痕・擦痕有り。
15	27	29	2	H-25	III	—	224 4686 3140	—	III 群	深鉢	口縁部	石英・チャート・石灰岩・粘板岩の細粒を混入。胎土は、ほぼ均一な厚さ。	20.4	—	—	篋状工具	点刻文を多条に施す。
16	28	30	2	H-25	III	—	1384	—	III 群	深鉢	口縁部	石英・チャート・石灰岩・粘板岩の砂粒を混入。	18.6	—	—	篋状工具	口縁部に二条の点刻文。両面に指圧痕有り。
16	28	31	2	E-16 E-17	III	—	8344 8490	—	III 群	深鉢	口縁部	石英・チャート・石灰岩・粘板岩・貝殻の粗粒を混入。	19.2	—	—	半裁竹管状	口縁部に連点文を数条施す。外面胴部に擦痕有り。
16	28	32	3	J-38	III	—	—	—	III 群	深鉢	口縁部	石英・泥岩・粘板岩の砂粒混入。	—	—	—	丸みを帯びた篋状工具	爪形状の文様。

第5表 出土土器観察表 (2)

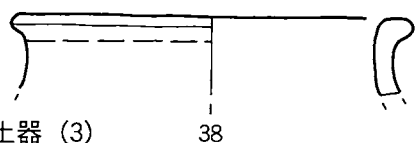
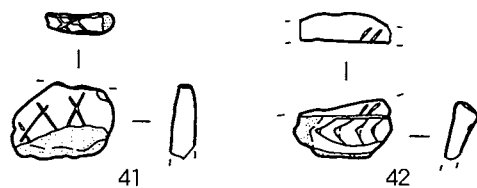
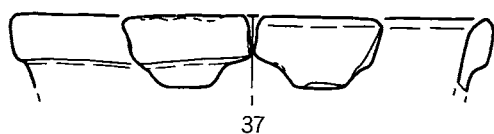
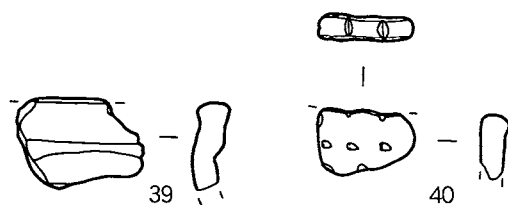
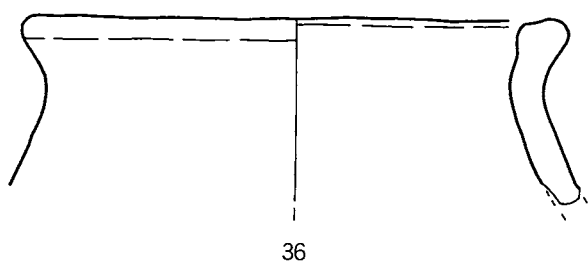
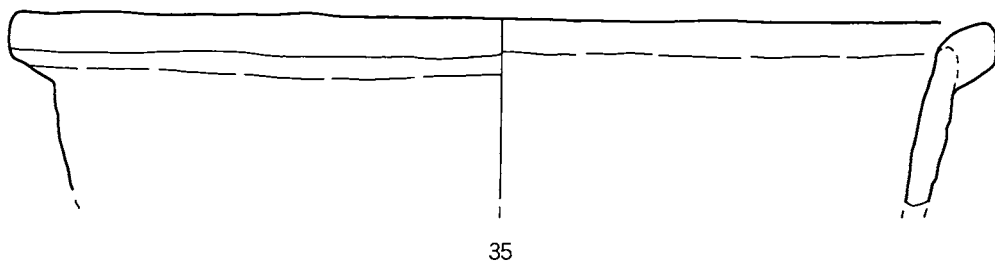
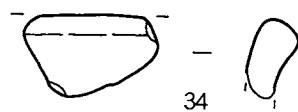
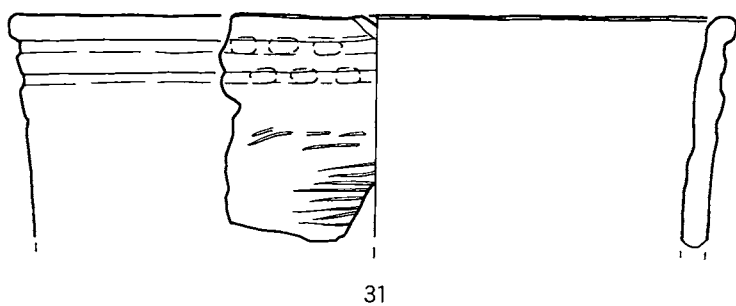
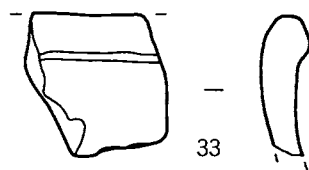
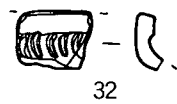
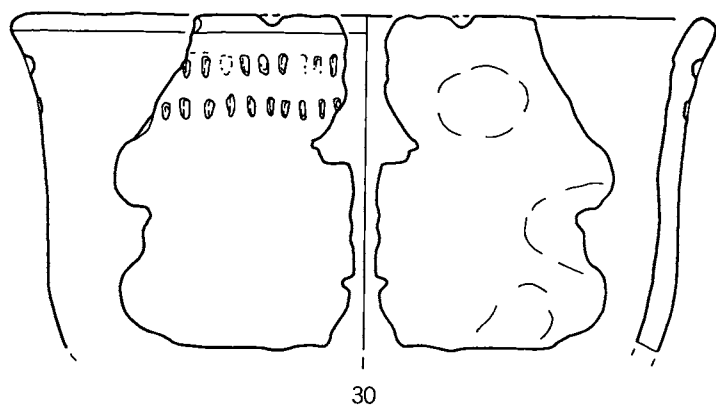
図 番号	図版 番号	枝 番号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	遺物No	分類	器種	部位	胎土・混和材	計測値(単位cm/g)			施文具	文様・装飾
													口径	器高	底径		
16	28	33	2	G-24	—	—	7670	—	IV群 a	深鉢	口縁部	石英・チャート・泥岩の 砂粒混入。	—	—	—	—	無文。外面に器面調整痕あり。
16	28	34	3	J-35	Ⅲ	—	1469	1588	IV群 a	深鉢	口縁部	粘板岩の粗粒混入。	—	—	—	—	無文。
16	28	35	2	G-24	Ⅱ	—	7576	—	IV群 a	深鉢	口縁部	石英・チャートの砂粒と、 金雲母混入。	25.6	—	—	—	無文。口縁部を貼り付けるが、 調整は粗い。
16	28	36	2	G-24	Ⅲ	—	8330	—	IV群 a	深鉢	口縁部	石英・チャート・泥岩・ 粘板岩の砂粒混入。	14.4	—	—	—	無文。外面頸部に指圧痕。
16	28	37	3	J-37	Ⅳ	—	1119	1220	IV群 a	深鉢	口縁部	石英・石灰岩質の微粒と、 泥岩・粘板岩の粗粒混入。	12.4	—	—	—	口縁部は肥厚。肥厚部下に篋 状工具による成形痕あり。
16	28	38	2	G-24	Ⅲ	—	3477	—	IV群 a	深鉢	口縁部	チャート・粘板岩の微粒 を混入。	10.6	—	—	—	無文。
16	28	39	2	F-25	Ⅲ	—	9346	—	IV群 b	深鉢	口縁部	石英・チャート・粘板岩 の細粒を混入。	—	—	—	—	無文。
16	28	40	3	J-35	Ⅲ	—	1418	—	不明	深鉢	口縁部	石英・泥岩・粘板岩の粗 粒混入。	—	—	—	又状工具	外面に又状工具による点刻文。 口唇部に篋状工具による刻目 文。
16	28	41	3	J-37	Ⅲ	—	—	—	不明	深鉢	口縁部	石英・粘板岩の細粒混入。	—	—	—	篋状工具	口唇部と外面に交差する斜沈 線文。
16	28	42	3	J-37	Ⅳ	—	1781	1935	不明	深鉢	口縁部	石英・チャート・石灰岩 質の粗粒・細粒を混入。	—	—	—	三角形の 篋状、篋 状工具	外面は、先の尖った三角形の 篋状工具による刺突文。 口唇部は篋状工具による斜位 の刻目文。
17	29	43	3	I-41	Ⅲ	—	2283	2502	不明	深鉢	口縁部	石英・粘板岩の粗粒と、 金雲母の微粒？混入。	23.2	—	—	—	無文。指圧痕あり。
17	29	44	2	E-16	Ⅲ	—	8205	—	不明	深鉢	口縁部	石英・粘板岩の粗粒・細 粒を混入。	—	—	—	—	無文。両面に器面調整の擦痕。
17	29	45	2	E-14	Ⅱ	—	—	8538	不明	不明	胴部	胎土は比較的堅緻。粘板 岩とチャート？の細粒が わずかに混入。	—	—	—	—	後期土器。縦横に凸帯を貼付。 凸帯貼付時の指圧痕と、両面 に擦痕。
17	29	46	2	E-16	Ⅲ	—	8383	—	A種	不明	底部	石灰岩の碎片、石英・ チャート・粘板岩の粗粒 を混入。	—	—	7.8	—	平底。
17	29	47	2	E-17	Ⅲ	—	—	6541	A種	不明	底部	石英・チャート・粘板岩 の細粒・微粒を混入。	—	—	4.4	—	平底。
17	29	48	3	K-36	Ⅲ	—	104	142	A種	不明	底部	石英・チャート・泥岩・ 粘板岩の碎片や粗粒を混 入。	—	—	3.0	—	
17	29	49	2	E-17	Ⅲ	—	3290	—	A種	不明	底部	石英・チャート・石灰岩・ 粘板岩の粗粒を混入。	—	—	6.8	—	平底。
17	29	50	2	F-25	Ⅲ	—	9355	—	A種	不明	底部	石英・チャート・粘板岩 の細粒を混入。	—	—	7.0	—	平底。内面、わずかに擦痕有 り。
17	29	51	2	G-25	Ⅲ	—	5602 5608	—	A種	不明	底部	石英・チャート・石灰岩・ 泥岩・粘板岩・貝殻の粗 粒を混入。	—	—	6.0	—	平底。底部外面、胴部の立ち 上がり部に擦痕。
17	29	52	3	J-37	Ⅳ	—	1786	1940	B種	不明	底部	石灰岩質の碎片と、石英・ 粘板岩の粗粒・微粒を混入。	—	—	6.6	—	指圧痕あり。
17	29	53	3	J-43	Ⅲ	—	2822	3153	B種	不明	底部	石英・泥岩の微粒を混入。	—	—	4.0	—	
17	29	54	2	F-26	Ⅲ	—	9353	—	B種	不明	底部	石英・チャート・泥岩・ 粘板岩の細粒を混入。	—	—	7.0	—	平底。胴部への立ち上がりが、 ややくびれている？
17	29	55	2	E-16	Ⅲ	—	—	8585	B種	不明	底部	石英・粘板岩の粗粒をわ ずかに混入。	—	—	6.4	—	後期土器。平底。
17	29	56	3	J-38	Ⅲ	—	881	957	C種	不明	底部	石英・粘板岩の砂粒と、 金雲母の微粒混入。	—	—	5.8	—	
17	29	57	2	G-24	Ⅲ	—	6097	—	C種	不明	底部	石英・チャート・泥岩・粘 板岩・貝殻の粗粒を混入。	—	—	10.2	—	平底。



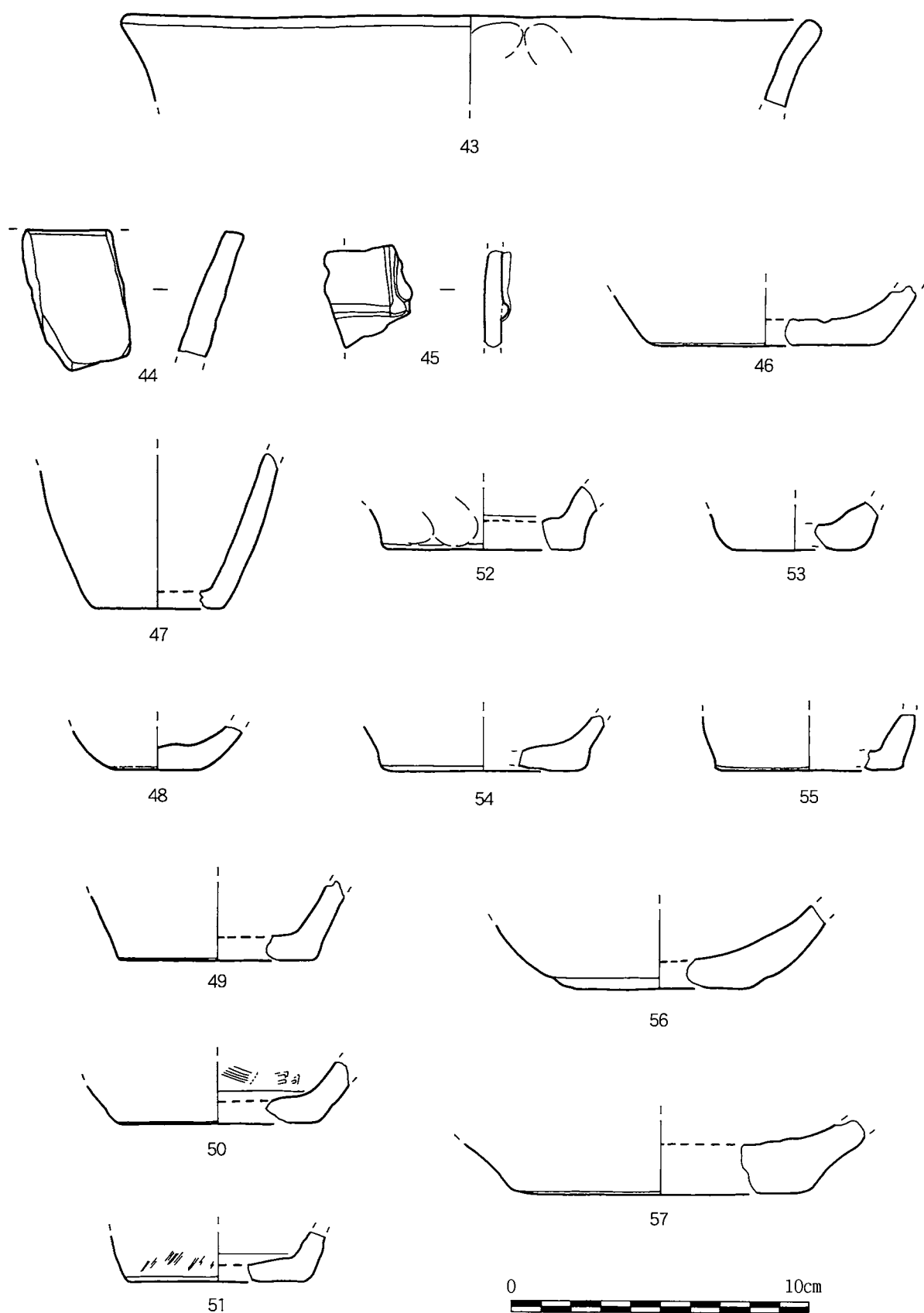
第14図 土器 (1)



第15図 土器 (2)



第16図 土器 (3)



第17図 土器 (4)

2) 石器

石斧や磨石など主に縄文時代に使用される石器を本節で紹介する。

石斧（第18図 1～4）

1は厚味があり重量感のある体部からやや狭い刃が付く刃部の資料で、基部は欠損する。2も全体の半分ほどを失う破損品で斧全面が丁寧に研磨される。定形化した小型の片刃石斧と推定される。3・4はいずれも刃部を失う基部の資料でいわゆる平面鰭バチ形の資料と推測される。村内の調査で石斧が多出した長根原遺跡では当該資料の類品としてA類とした小型バチ形の資料がある。長根原遺跡では当該資料が2／3と主体的に出土している（宮城ほか2002）。

磨石・敲石（第18図 5～7、第19図 8～12）

磨石は形状や打痕の箇所、大きさ等にバリエーションが多い。これは磨石が自然礫の形状をそのまま利用し、使用過程で形状を変化させていると考えられる点に起因する。また製粉等の「磨る」作業だけでなく敲石としての「敲打」具としても利用されるため本報告では磨石と敲石を一括して報告する。

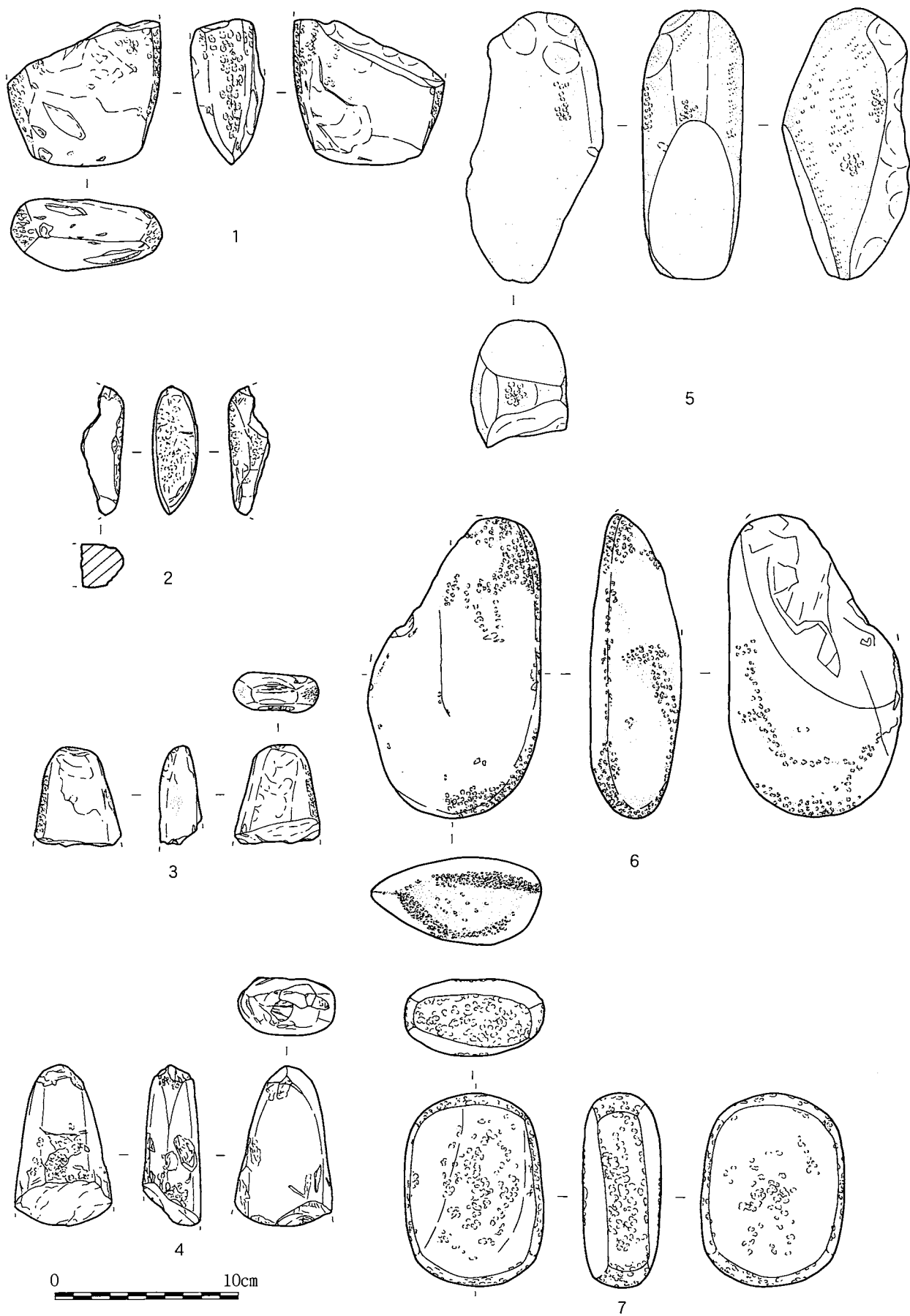
A類（5～8） 形状から平面形がいわゆる石鱗状の楕円形となる資料である。大きさと形状から長軸が15cm以上になりやや扁平な5・6、長軸は10cm前後となり厚みのある7・8に分けることもできる。前者は磨石としての機能が主となり、後者は磨石と敲石の機能が具備されており、周縁部の敲打痕の凹凸が顕著である。

B類（9～11） 拳大で、作業面である平滑な面があまり徹底して磨られておらず、不定形の形状から自然石に近い。断面略三角形でいわゆるミカン房状となる。10・11はいわゆるクガニイシ（白木原1978）の形状に近い。

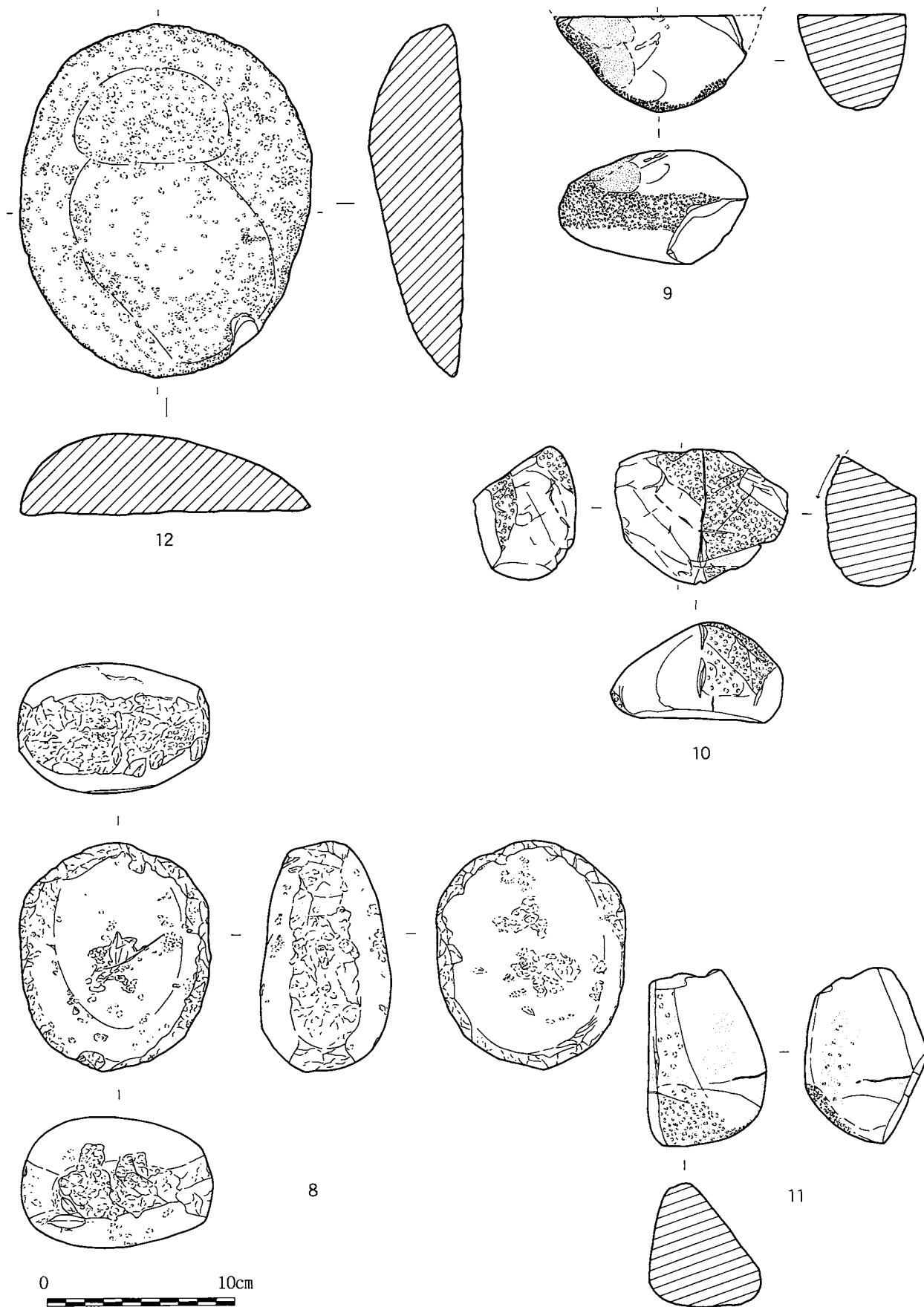
C類（12） 円礫が欠損した資料と目されるが、割れた面が平坦であることからこのまま製品として使用されたと考えられる。破損面は加工が認められない。湾曲する資料上面の外周に敲打痕が多く残り、上面の平坦面が作業面となる。

第6表 出土石器観察表

図番号	図版番号	枝番号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	器種	分類	石質	計測値 (cm/g)				観 察
											長さ	幅	厚み	重量	
18	30	1	2	F-26	Ⅲ	—	9410	石斧		変輝緑岩	(8.0)	(8.3)	(4.0)	350	刃部、両刃。刃部のみ研磨。わずかに使用痕。
18	30	2	2	H-25	Ⅲ	—	7884	石斧		緑色岩	(7.1)	2.3	(2.4)	48.05	縦方向に割れ、大部分を欠損。両平面、光沢を有する程研磨。刃部の稜線は明瞭。
18	30	3	2	G-25	Ⅲ	—	4322	石斧		緑色変岩	(5.4)	(4.7)	(2.1)	84.7	刃部欠損。成形のみで、殆ど研磨しない。
18	30	4	2	H-24	Ⅲ	—	7783	石斧		緑色岩	(9.0)	(5.3)	(3.2)	207.72	刃部欠損。全体的に研磨され、磨痕も残る。
18	30	5	2	G-26	Ⅱ	—	8655	磨石	A類	砂 岩	15.0	7.5	5.5	750	約1/2の欠損。全体的に風化している。側縁部に敲打痕を残す。
18	30	6	2	H-24	—	清掃中	8523	磨石	A類	砂 岩	16.6	9.2	5.0	950	一平面は光沢を有する程、研磨。三分の一程欠損？
18	30	7	2	E-15	I	—	no.409	磨石	A類	安山岩	10.7	7.6	4.3	640	ほぼ完形の資料。平坦面は平滑で滑らか。周縁部及び平坦面中央は敲打痕をもつ。
19	31	8	2	G-24	Ⅲ	—	5880	磨石	A類	砂 岩	12.5	10.3	7.0	1,200	両面とも研磨されているが、一平面は全体的に敲打痕。一平面には中央部分に敲打痕が集中して凹んでいる。側縁は全体的に敲打痕。
19	31	9	2	G-25	Ⅲ	—	—	敲石	B類	砂 岩	(10.1)	(6.2)	(5.3)	350	両平面は研磨。側縁に敲打痕。
19	31	10	3	J-37	I	—	—	敲石	B類	砂 岩	(7.4)	(9.3)	(4.9)	433.68	大部分を欠損する資料。自然円礫を利用した石器、端部に敲打痕を残す。
19	31	11	2	E-14,15	Ⅱ	SD-2	8578	敲石	B類	砂 岩	(9.5)	6.3	(6.6)	500	断面は三角形。端部に敲打痕。
19	31	12	2	G,H	—	—	8475	敲石	C類	砂 岩	19.2	15.7	5.1	1,830	扁平楕円形の石材を半分に割る資料。平面中央部に研磨面があるが、敲打痕も残る。側縁部も敲打痕がある。



第18图 石器 (1)



第19図 石器 (2)

3) 貝珠 (第20図)

木下尚子 (熊本大学)

古宇利原A遺跡で出土した貝珠は合計8個で、いずれも遺物包含層(Ⅲ層)で検出された。

貝珠の一覧を第7表に、実測図を第20図に示した。貝珠の形状、加工状況に注目すると、これらはよく研磨されたもの(第20図・第7表の1~5、以下同様)と、ほとんど研磨されていないもの(6~8)の2種類にわけることができる。同様の貝珠は、これまでに種子島の広田遺跡でもっとも多く出土しており、そこで3タイプに分類されている。その分類に基づけば、「よく研磨されたもの」はⅢ類貝珠、「ほとんど研磨されていないもの」はⅠ類貝珠となる⁽¹⁾(木下2003)。

Ⅲ類貝珠は、穿孔済みの巻貝螺塔部を複数個連結し、砥石の上で回転研磨して得られる製品で、貝珠はすべて均一な大きさの端整な低い円筒形状をなしている。グラフ1は貝珠の直径とその最大値と最小値の差、ならびに分類の関係を示したものである。ここでⅢ類貝珠の直径差がいずれも0.5mm以下で、正円形に近い形状であること、またこれらは直径が6mmのもの(1)と10mm前後のもの(2~6)の2タイプに細分されることを、数値の上で確認することができる。後者のうち同様の大きさの4例(2~5)は本来一連のものとして製作された可能性が高い。Ⅰ類貝珠の2例(7と8)は、その直径、直径差ともに大きく、これらが未加工品であることに対応する。

貝珠の素材を見よう。形状から判断すると、第20図の1~5の素材貝は小型のイモガイ類(同図のc、d、e)であり、同じく6~8の素材貝はマガキガイ(同図のb)である。aとbはよく似ているが、イモガイ(a)は巻貝の「巻き」の高低差が小さいのに対し、マガキガイ(b)ではそれがイモガイより明らかに大きく、また貝殻の質も異なるので、両者の区別は比較的容易である。一般にⅢ類貝珠にはイモガイが使用され、マガキガイが用いられることはほとんどない。本遺跡においても、この傾向は顕著である。また出土貝珠は表面に小さな孔をもつものが多く、これらが海浜で採取されたものであることを示している。

第7表 第2次古宇利原A遺跡出土貝珠一覧(第20図に対応)

No※1			出土位置		直径 (mm)		厚さ (mm)		孔径 (mm)		重さ	備考
1	2	3	地点	層位 Dot.No.	1 ※2	2	1	2	1	2	(g)	
1	152	6393	G25	Ⅲ層 6293	6.09	6.04	2.58	1.39	1.45	1.17	0.1	小型イモガイ。打ち上げ貝使用。Ⅲ類貝珠。
2	153	9411	G25	Ⅲ層 9167	9.63	9.61	1.03	0.81	4.37	4.34	0.1	小型イモガイ。研磨が進んだ製品。一部欠損。Ⅲ類貝珠。
3	154	9358	G25	Ⅲ層 9358	9.51	9.30	1.60	1.22	3.86	3.83	0.2	小型イモガイ。Ⅲ類貝珠。
4	155	8683	H24	清掃中 8524	12.11	11.61	2.87	2.49	5.54	5.34	0.4	小型イモガイ。上下面研磨。側面に研磨あるも、いびつ。Ⅲ類貝珠。
5	156	1096	H25	Ⅲ層 1021	10.46	10.02	3.00	2.84	3.72	3.53	0.4	小型イモガイ。打ち上げ貝使用。貝珠Ⅲ類。体層の一部がのこる。
6	157	6915	G24	Ⅲ層 6815	9.57	9.33	4.35	2.15	4.91	4.70	0.3	マガキガイ。側面に粗い研磨。打ち上げ貝。Ⅰ類貝珠。
7	158	1766	H25	Ⅲ層 1689	17.18	15.82	4.23	3.11	6.39	6.09	1.4	マガキガイ。研磨面認められず。自然のものか。Ⅰ類貝珠。
8	159	5631	G25	Ⅲ層 5535	14.82	13.37	6.00	5.20	5.12	5.07	1.4	マガキガイ。上下面研磨。側面の研磨なし。打ち上げ貝。Ⅰ類貝珠。

※1 1:表番号、2:登録番号、3:整理番号

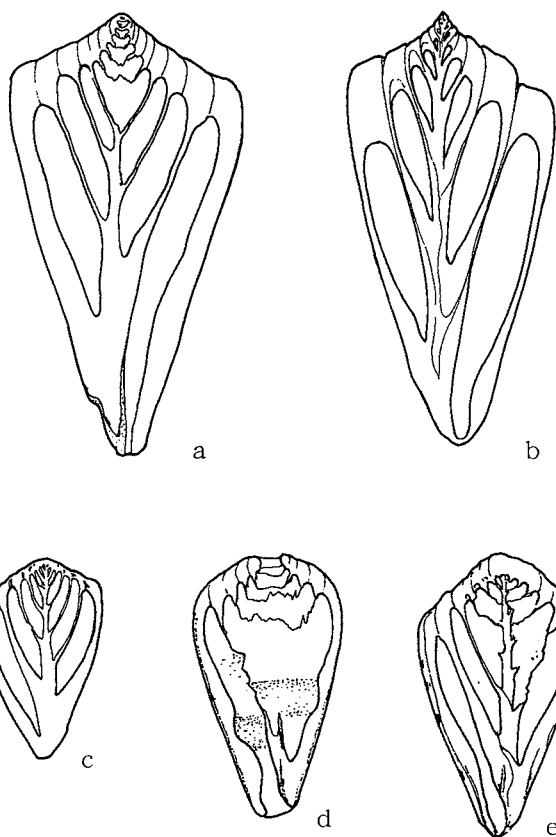
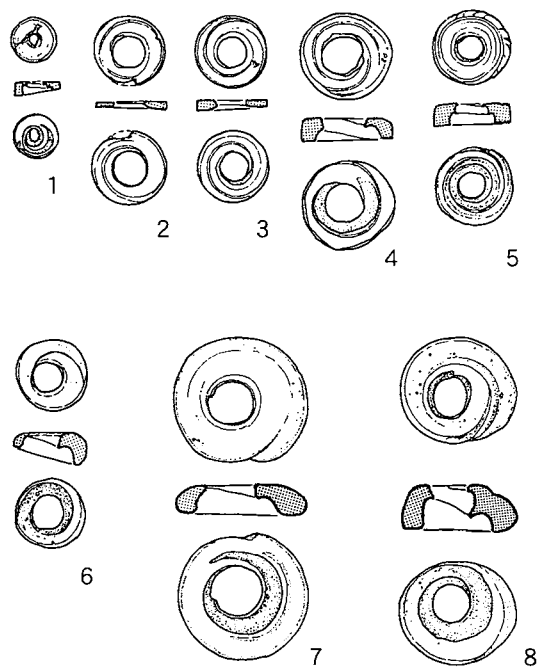
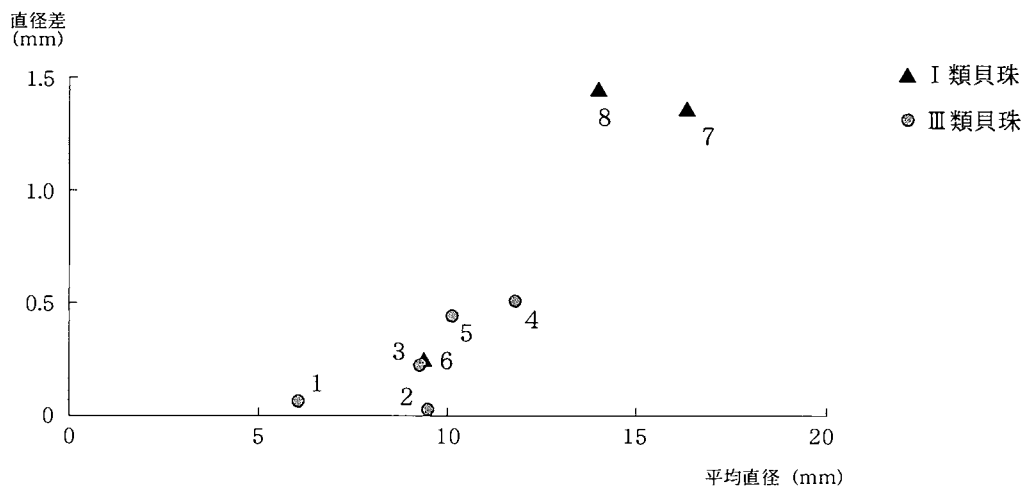
※2 1:最大値、2:最小値(厚さ、孔径も同様)

今回の貝珠は、すべて目視により検出されている。発掘者の注意力の賜物であるが、一方で本来かなりの数が遺跡に包蔵されていた可能性をも示唆する。ことに第20図の1の類例が存在していた可能性は高いといえよう。

(1) II類貝珠は、螺塔部を研磨・穿孔した痕跡を残すものである。今回は認められなかった。

木下尚子2003「貝製装身具からみた広田遺跡」『種子島広田遺跡』、鹿児島県立歴史資料センター黎明館、広田遺跡学術調査研究会

グラフ1 古宇利原A出土貝珠の直径と直径差（番号は第7表、第20図に対応）



第20図 貝珠と素材巻貝断面図

1～8：出土貝珠（番号は表1に対応）

a～e：素材巻貝（海浜で採集したもの）

a：オモメイモ、b：マガキガイ、c：サヤガタイモ

d：カバミナシ、e：マダライモ



4) 貝・骨製品

前項で紹介した貝珠以外の貝製品及び、骨製品を本節で紹介する。

貝製品 (第21図 9・10)

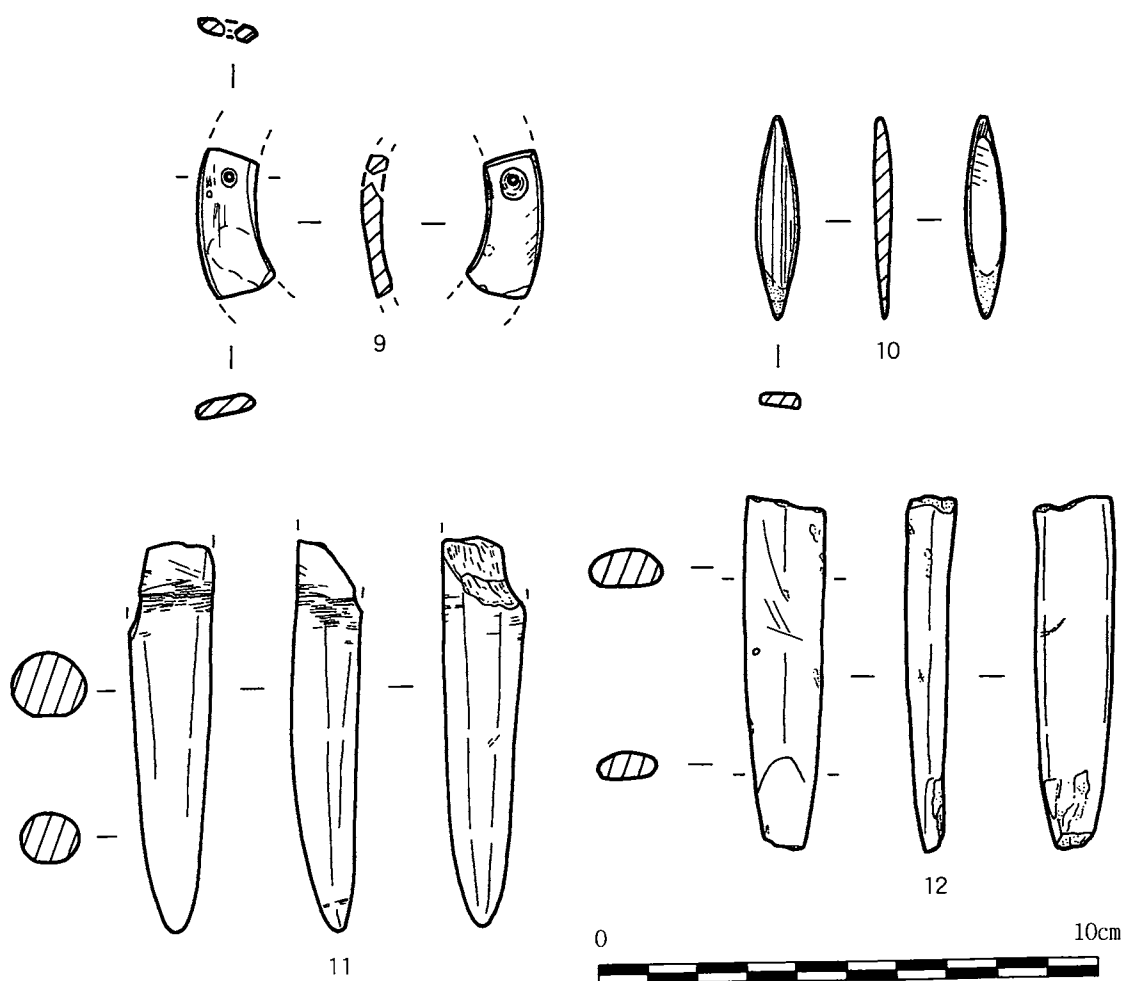
9は貝製品で貝輪の欠損品と考えられる。摩滅が著しく原材料の貝種は不明であるがゴホウライイモガイ等の貝と考えられる。端部に孔を穿つ。

10は貝製品で用途は不明である。菱形に加工された製品。

骨製品 (第21図 11・12)

11は骨製品でジュゴンの肋骨を利用する。頭部が欠損するがほぼ完形品である。肋骨を素材とするためゆるやかに湾曲する。残存部の上端には溝を彫るが断続的となる。同様に断続的な溝を施した資料の類例として地荒原貝塚(70p第39図1)の資料が知られる(島袋ほか1986)。この資料の頭部には孔を穿ち孔の下側に浅い溝を彫っている。地荒原貝塚では当該資料を錐として報告する。当該資料も同用の資料であるが先端は鋭利に尖らせずに丸みがあることから、簪の様な装飾品としての用途も想定できるのではないかと考える。

12も同様の骨製品でジュゴンの肋骨を利用する。頭部が欠損するため、先端部に近い資料である。



第21図 貝製品・骨製品

5) 小結

以上、これまで黒色土層を中心に出土した先史時代の遺物について報告してきた。

遺構としては先の調査のような明確な住居跡などは検出することはできなかったが、前回調査の住居跡周辺に残存する遺物包含層より多くの遺物を回収することとなった。土器は伊波式、荻堂式が多く出土し、これよりも古式の要素を持つ嘉徳ⅠA式や仲泊式、逆に新しい型式として知られる大山式や室川式土器などが若干得られている。このことから縄文時代後期並行期を中心とした時期の遺跡であることが再確認された。これは前回調査では80%が室川式土器であった点からすると若干古い遺物が多く得られていることとなる。

他の出土品として石斧や敲石などが出土、骨製品や貝製品なども得られている。特筆されるのは、前回の調査では出土しなかった貝珠が8点得られている点である。貝製の玉は大変小さく今回の作業員さんが現場で手上げして回収することができた。また、貝珠については木下尚子先生より詳細なコメントをいただき本報告を充実することができた。木下先生によれば、貝珠はマキガイ製と小型のイモガイ製であり、中でも直径が同様の大きさの4例は、一連のものとして製作された可能性が高いとされる。

2 グスク時代以降の遺物

1) 土器

第22図1はグスク時代の土器。丸みをもって胴部へ至る径の広い底部資料である。

2) カムイヤキ

第22図2～4はカムイヤキの胴部資料で2は内外面に格子状の平行線当て具を残す。いずれの資料も器壁が比較的薄手となる資料である。

3) 中国陶磁

白磁（第22図5・6）

碗（第22図5・6） 5は口禿碗の底部資料で腰部以下露胎となり、見込みは凹む。淡緑白色の釉を施釉。6は見込みを露胎とする粗製の碗で、森田分類D群（森田1982）に該当する資料と考えられる。

青磁（第22図8～14・第23図）

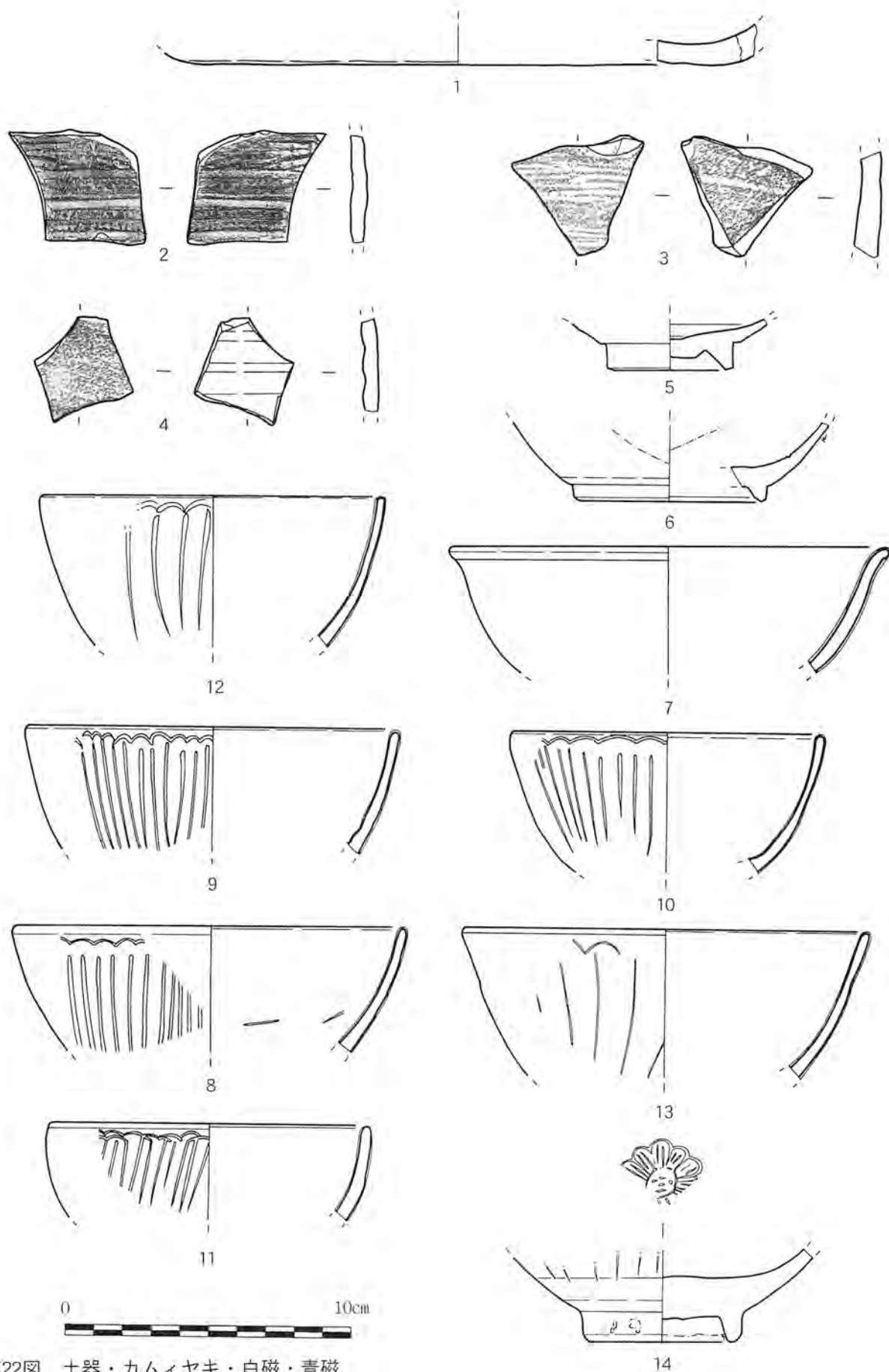
碗（第22図8～14・第23図15～23） 7は無文碗の口縁部資料で、青緑色の釉を厚く施釉する。8～14は細蓮弁文碗の口縁部、底部資料である。今帰仁城跡の発掘調査報告では線刻蓮弁文碗として3類に細別している（金武ほか1991，以下今帰仁分類）。8～10は厚い釉を施釉する比較的均整の取れた蓮弁を描くa類に該当する資料。12～14は弁尻が高台際まで延びず弁先も比較的雑に描かれる幅広の蓮弁を描くb類に該当する資料。10・11は口径が比較的小振りになる資料で、釉は薄く施釉、蓮弁が崩れ細く短い蓮弁を統一性無く描かれるc類に該当する資料である。15は今帰仁分類で、波濤文碗とした資料に該当する。16は口縁部外面に雷文を施す資料で型押しによるスタンプと、内面には人物図を描いている。17は直口大振り碗とした資料で、直口する口縁が逆ハの字形に外開きする器形。外体面には轆轤痕を明瞭に残す。18・19は無文の直口口縁の碗で今帰仁分類の無文直口碗、上田分類のE類（上田1982）に該当する。20～21は碗の底部資料である。体部の大半を欠くため分類は不詳であるが底径がいずれも小さくなることから細蓮弁文碗もしくは雷文帯碗・無文直口碗等が想定される。20は摩滅の著しい資料、見込みには印花文が施される。21・22は比較的厚く施釉し、高台内から見込みまでの厚みがある資料で両者とも見込みに型押しして文様が描かれる。

皿（第23図24～29） 26は口縁部を逆し字状に折曲げる今帰仁分類口折皿Ⅱ群の資料で、浅い片切彫りで弁先の尖らない蓮弁文を描く資料である。25～27は腰折れ外反皿で、25は内外面に文様は描かれず無文となる。26・27はいずれも口縁部を刻み稜花とするとともに、内体面には浅い刻文によって施文される。28・29は口縁の直口する資料で、前者は内面に細い蓮弁文を密に配し、後者は内外面無文となる。

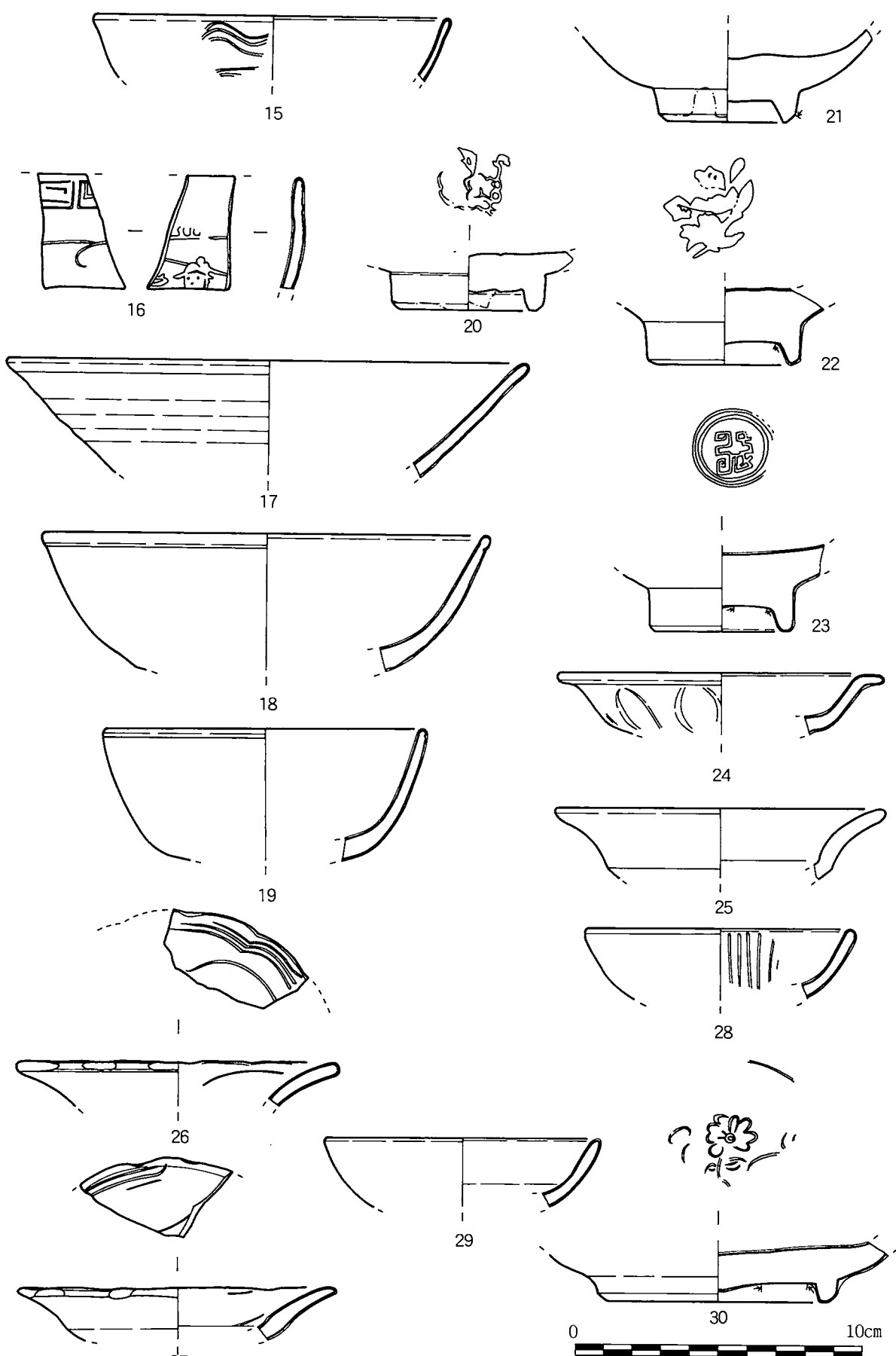
盤（第23図30） 30は径の広い底部資料で盤になると判断される。高台は面取りされた角高台で、施釉は厚くなる。見込みに花文が押印される。

第8表 出土陶磁器観察表（土器・カムイヤキ・白磁・青磁）

図 番号	図版 番号	枝 番号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	遺物 No	分類	器種	部位	口径	器高	底径	釉調・絵付	文様・装飾	備 考
22	33	1	2	E-11, 12,13	Ⅱ	—	—	28	グスク土器	不明	底部	—	—	17.8	—	なし	グスク土器。 内面に器面調 整の痕が残る。
22	33	2	2	D-14	攪乱	—	9835	—	カムイヤキ	不明	胴部	—	—	—	焼成良。	格子状の叩き痕が 外面に残る。	薄手
22	33	3	3	J-36	Ⅲ	—	123	—	カムイヤキ	不明	胴部	—	—	—	焼成不良。	横位の平行線叩き 痕が外面に残る。	薄手
22	33	4	3	J-38	Ⅲ	—	969	—	カムイヤキ	不明	胴部	—	—	—	焼成良。	内面は水引きナデ による横方向の条 線が残る。	薄手
22	33	5	2	D-14	攪乱	—	—	9825	白磁	碗	底部	—	—	3.8	腰部まで施釉。	内底に片切彫り による圏線。	口禿碗
22	33	6	2	E-15	Ⅱ	SS4	8595	—	白磁	碗	底部	—	—	6.4	外面は腰部まで施釉。 見込は露胎となる。	内底に圏線、重ね 焼きの目痕有り。	内底無釉碗
22	33	7	2	E-14	I	—	—	12	青磁	碗	口縁部	15.4	—	—	釉は、やや厚く施 釉。貫入なし。	無文。	無文外反碗
22	33	8	2	D-12	Ⅱ	—	—	9700	青磁	碗	口縁部	13.8	—	—	全体的に均一な厚 さで施釉。	外面に細連弁文。 内底にも文様あり。	線刻連弁文 碗a類
22	33	9	2	D-15	攪乱	—	—	10155	青磁	碗	口縁部	13.2	—	—	貫入あり。	細連弁文。	線刻連弁文 碗a類
22	33	10	2	D-12	Ⅱ	—	—	9823	青磁	碗	口縁部	11.0	—	—	貫入あり。	細連弁文。	線刻連弁文 碗b類
22	33	11	2	D-15	攪乱	—	—	10026	青磁	碗	口縁部	12.4	—	—	貫入あり。	外面に細連弁文。 内底にも文様あり。	線刻連弁文 碗b類
22	33	12	2	D-15	攪乱	—	—	10026	青磁	碗	口縁部	12.2	—	—	貫入あり。	細連弁文。	線刻連弁文 碗c類
22	33	13	2	D-13	Ⅱ	—	—	9771	青磁	碗	口縁部	14.2	—	—	貫入あり。	細連弁文。	線刻連弁文 碗c類
22	33	14	2	D-14	畦	—	—	10190	青磁	碗	底部	—	—	4.2	粗い貫入あり。 高台内側は無釉。	外面に細連弁文。 見込みに印花文。	線刻連弁文 碗c類
23	34	15	2	D-12	攪乱	—	—	9822	青磁	碗	口縁部	12.4	—	—	薄い緑黄色の釉を 施釉。	外面口縁部に波濤 文。	波濤文碗
23	34	16	2	G-25	Ⅱ	—	9236	—	青磁	碗	口縁部	—	—	—	明緑色の釉を施釉。	口縁部に雷文帯押 印、胴下半は片切 彫りによる文様。 内面に人物図。	雷文帯碗b
23	34	17	2	D-15	Ⅱ	シャコ 貝集積	—	10157	青磁	碗	口縁部	18.4	—	—	貫入あり。	無文。	直口大振り 碗
23	34	18	2	D-15	Ⅱ	シャコ 貝集積	9674	—	青磁	碗	口縁部	15.8	—	—	粗い貫入あり。	無文。	無文直口碗
23	34	19	2	D-15	Ⅱ	—	—	9740	青磁	碗	口縁部	11.4	—	—	貫入あり。	無文。	無文直口碗
23	34	20	3	I-43	Ⅱ	—	—	—	青磁	碗	底部	—	—	5.0	摩滅が激しく、割 れも角を減らし丸 くなる。	見込みに印花文。	無文直口も しくは雷文 帯等
23	34	21	2	E-14	I	—	—	88	青磁	碗	底部	—	—	4.6	高台外面まで薄う 釉を施釉。	焼成不良のため文 様については不明。	線刻連弁文 碗?
23	34	22	2	E-15	Ⅱ	—	8424	—	青磁	碗	底部	—	—	4.8	貫入あり。全体的 に施釉するが、高台 内側は蛇の目状に釉 を掻き取る。	内底に印花文。	無文直口も しくは雷文 帯等
23	34	23	2	D-15	Ⅱ	シャコ 貝集積	9678	—	青磁	碗	底部	—	—	—	貫入あり。高台内 側は蛇の目状に釉 を掻き取る。	内底に幾何学文を 押印する。	無文直口も しくは雷文 帯等
23	34	24	2	D-14	畦	—	—	10190	青磁	皿	口縁部	11.4	—	—	貫入あり。	外面に連弁文。	口折皿Ⅱ群
23	34	25	2	D-14	畦	—	—	10156	青磁	皿	口縁部	11.6	—	—	貫入あり。	無文。	腰折外反皿
23	34	26	2	D-13	Ⅱ	—	—	9681	青磁	皿	口縁部	11.4	—	—	粗い貫入あり。	内面に片切彫り による刻花文。稜花皿。	腰折外反皿
23	34	27	2	D-15	Ⅱ	—	—	9819	青磁	皿	口縁部	11.2	—	—	粗い貫入あり。	内面に片切彫り による刻花文。稜花皿。	腰折外反皿
23	34	28	2	E-24	Ⅱ	—	—	9705	青磁	皿	口縁部	9.3	—	—	粗い貫入あり。	内面に連弁文。	直口口縁皿
23	34	29	2	D-14	Ⅱ	pit.76	9718	—	青磁	皿	口縁部	9.7	—	—	粗い貫入あり。	無文。	直口口縁 無文皿
23	34	30	2	D-12	Ⅱ	—	—	9432	青磁	盤	底部	—	—	7.8	高台内は、蛇の目 状に釉を掻き取る。	見込みに印花文。	



第22図 土器・カムイヤキ・白磁・青磁



第23图 青磁

青花（第24図）

碗（第24図 1～9） 1は今帰仁分類のⅢ類c、小野分類C群（小野1982）に該当する資料で、口縁部は内湾しながら外に開き、外対面には目の荒い豹皮文を描く。呉須のは色は淡い。2・3は底部資料で今帰仁分類Ⅲb、小野分類C群に該当する。腰部には芭蕉文を見込みには蓮花文を描く。4・5は今帰仁分類Ⅴ類、小野分類D群に該当する。4は口縁部資料で口縁外面に崩れた波濤文を描き体部の文様は不詳。5は広い見込みに十字文を描く底部資料で、外面にはアラベスク文が描かれる。6は今帰仁分類Ⅵ類、小野分類E群に属する資料であると目される。見込みの盛り上がりは明瞭ではないので判然としないが当該分類に属すると判断される。見込みの模様は不明だがダミ技法によって花文等の文様が描かれていると考えられる。

皿（第24図 7～9） 7は外反させる口縁部を外反させる資料で外反皿と考えられる。外面は唐草文？を描く。8は外反する口縁部の小片で外面に唐草文を描き、内面見込みには波濤のような半円を繰り返したような文様が見られる。今帰仁分類Ⅰ類に該当する。9は碁笥底の皿で、今帰仁分類Ⅲ類に該当する。外面腰部には芭蕉文を、口縁には波濤文を描き、見込みにはねじ花文を描く。

第9表 出土陶磁器観察表（青花）

図 番号	図版 番号	枝 番号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	遺物 No	分類	器種	部位	口径	器高	底径	釉調・絵付	文様・装飾	備 考
24		1	2	E-15	Ⅱ	—	—	8581	青花	碗	口縁部	14.3	—	—	淡青白色の釉を薄く施釉。	外面胴部に豹皮状の文様。内面腰部に線刻による圏線。	Ⅲ類C、 小野C群
24		2	2	E-11, 12,13	Ⅱ	—	—	28	青花	碗	底部	—	—	推定 5.4	畳付から高台内側途中までは露胎。	外面胴部に芭蕉文、高台脇に界線。内底は二条の界線内に蓮花文。	高台下部欠損。Ⅲ類、 小野C群。
24		3	2	G-26	Ⅱ	—	—	8864	青花	碗	底部	—	—	5.2	白黄色の薄い釉を施釉。	外面胴部に芭蕉文、高台脇に二条の界線、内底は二条の界線内に蓮花文。	Ⅲ類、 小野C群。
24		4	2	D-14	畦	—	—	10156	青花	碗	口縁部	11.6	—	—	淡青白色の釉を薄く施釉。	口唇部外面に二重の連点文。胴部に草花文？	Ⅴ類、 小野D群。
24		5	2	E-14	Ⅱ	—	—	8538	青花	碗	底部	—	—	5.3	淡青白色の釉を薄く施釉。	外面腰部にアラベスク文。見込みには十字花文。	Ⅴ類、 小野D群。
24		6	2	D-14	畦	—	—	10156	青花	碗	底部	—	—	6.6	淡青白色の釉を薄く施釉。畳付は露胎。	見込みと胴外面には文様が描かれるようだが、図柄は不明。	Ⅶ類。
24		7	2	D-14	畦	—	—	10156	青花	皿	口縁部	12.5	—	—	淡青白色の釉を薄く施釉。	口縁部内面に鋸歯状の文様。外面胴部に宝相華唐草文。	Ⅰ類、 小野B群。
24		8	2	D-12	Ⅱ	—	—	9769	青花	皿	口縁部	8.4	—	—	淡青白色の釉を薄く施釉。	外面に宝相華唐草文、内面に波濤文状の文様。	Ⅰ類、 小野B群。
24		9	2	D-15	Ⅱ —	シャコ 貝集中	—	9940 10028	青花	皿	完形	9.4	2.7	2.4	淡青白色の釉を薄く施釉。畳付は露胎。	外面には口縁に波濤文、腰部に芭蕉文。見込みには菊花文が描かれる。	Ⅱ類、 小野C群。

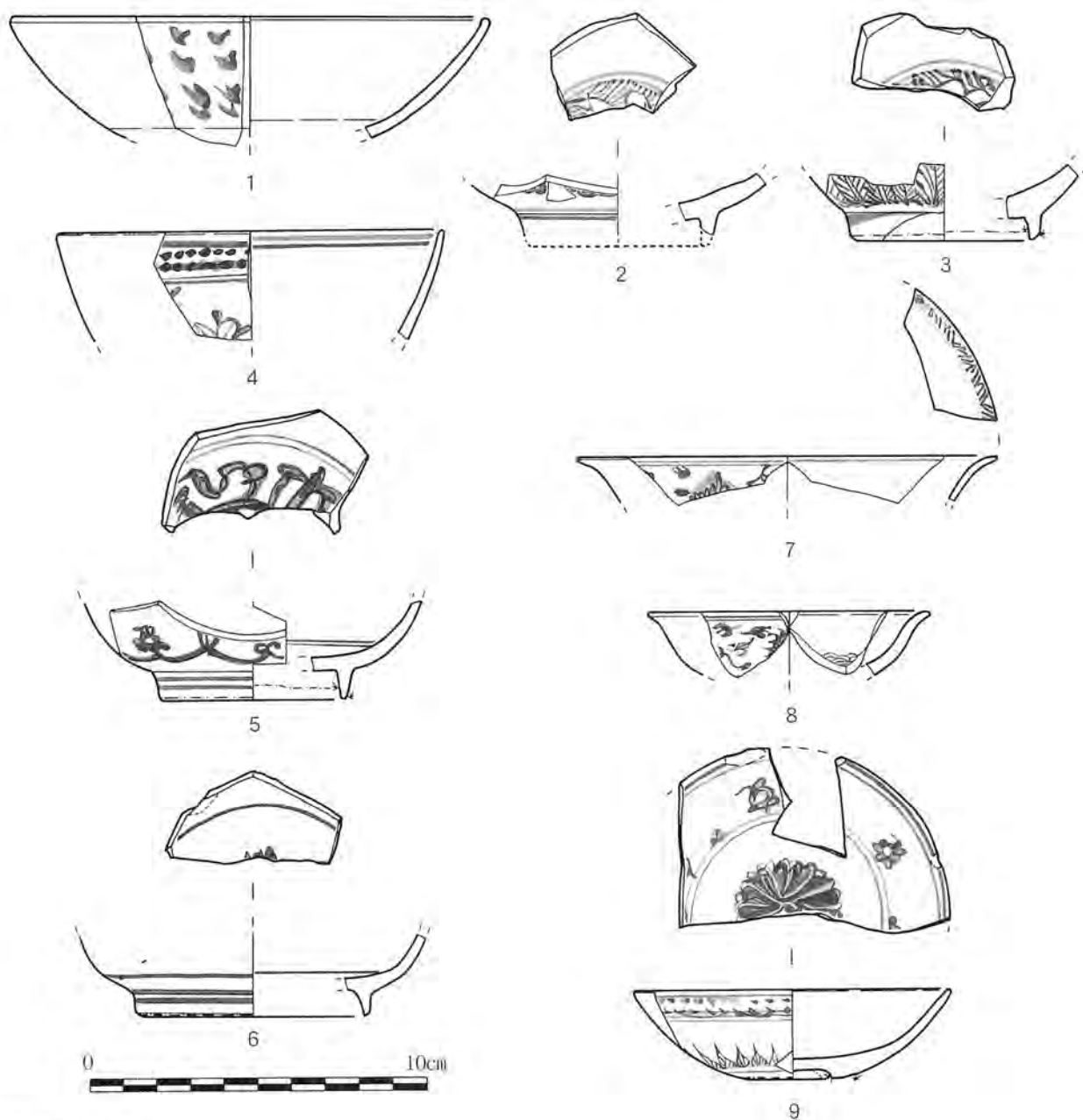
褐釉陶器（第25図 1）

壺 1は褐釉陶器の壺で今帰仁城跡出土品にも類例を見ることのできる資料である。口縁部上端は重ね焼きの為に露胎している。肩部には横耳が取り付け。破片資料のため全形は不明である。

4) タイ陶磁

褐釉陶器（第25図 2～5）

壺 2～4はタイ産の褐釉陶器でいずれも壺形の資料である。2は頸部資料で3・4は口縁部資料である。口縁部資料の形態からいずれもノイ川窯系の資料と目される。復元径は小破片の為曖昧であるが、2は容量2～3斗の大型壺、3は1斗以下の中型の長胴壺と考えられる。



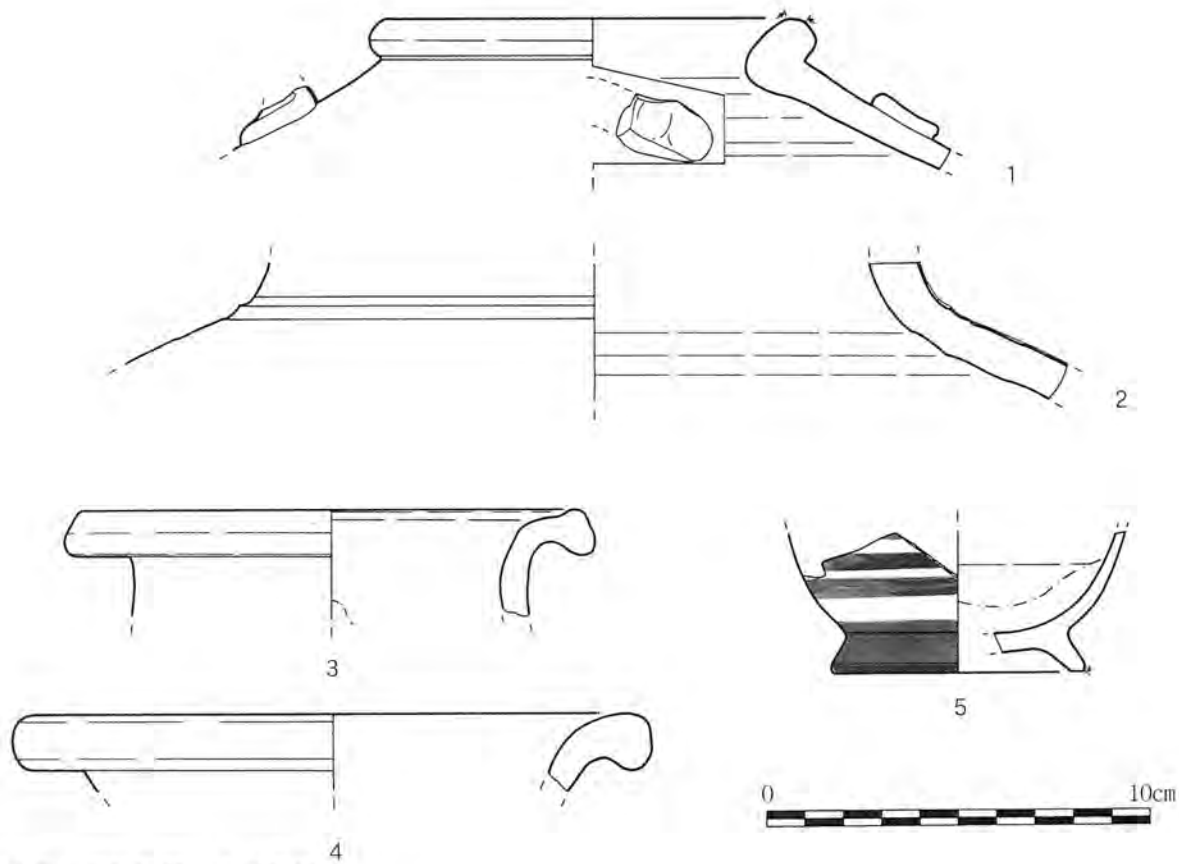
第24図 青花

鉄絵（第25図5）

合子 5は合子の身で同形の資料が今帰仁城跡からも出土している。高台はハの字形に開き、鉄絵による太線によって文様が廻る。見込みは施釉されるが、上方は露胎しているようである。

第10表 出土陶磁器観察表（褐釉陶器・タイ陶磁）

図 番号	図版 番号	枝 番号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	遺物 No	分類	器種	部位	口径	器高	底径	釉調・絵付	文様・装飾	備 考
25	36	1	2	D-12	Ⅱ	—	—	9699	褐釉	壺	口縁部	11.0	—	—	口唇部の釉はと れている。	横耳が付く。	中国
25	36	2	2	D-15	攪乱	—	—	10085	褐釉	壺	頸 部	—	—	—	内面は無釉。		タイ（ノイ 川窯系）
25	36	3	2	D-12	Ⅱ	—	—	9700	褐釉	壺	口縁部	17.0	—	—	内・外面とも施 釉。		タイ（ノイ 川窯系）
25	36	4	2	D-14	攪乱	—	—	9838	褐釉	壺	口縁部	13.4	—	—	内・外面とも施 釉。		タイ（ノイ 川窯系）
25	36	5	2	D-14 D-15	能 攪乱 シャコ貝 集中	—	—	10190 9838 10192	鉄絵	合子身	底 部	—	—	5.5	内底は施釉。 外面腰部、畳付 から内側は無釉。	外面腰部に 鉄釉で界線。 その上から 白色釉を施 釉。	タイ



第25図 褐釉陶器・タイ陶磁

5) 中国陶磁（清朝磁器）

中国陶磁の中で清代に製造されたと考えられる資料を以下に報告する。

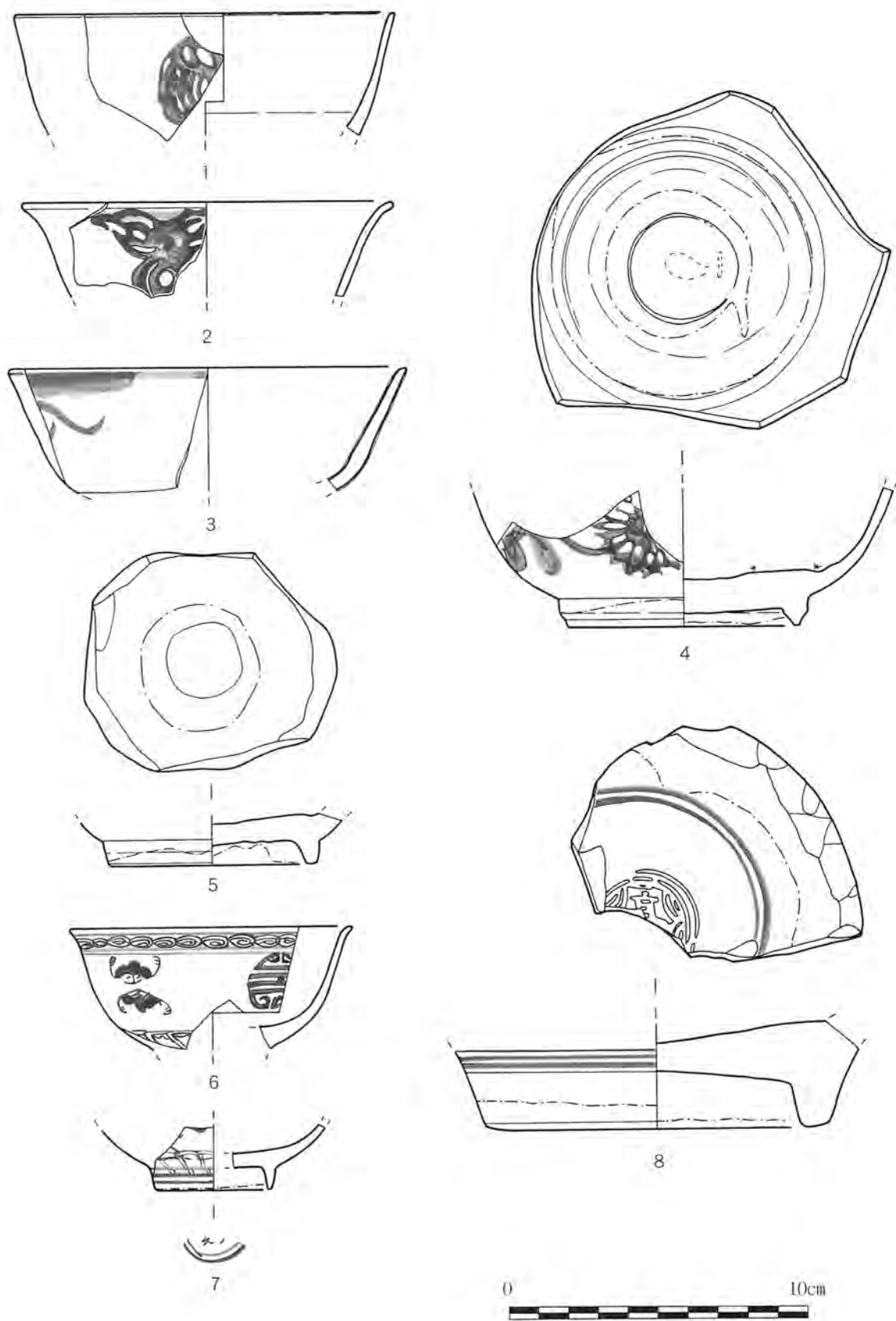
青花（第26・27図）

碗（第26・27図） 1～5は粗製の碗で直口する口縁で端反りのものと、直口のものがある。呉須の発色も淡い。4は底部資料で蛇の目状に露胎し外面には大振りの花文が描かれている。6・7は端反りの小型碗でほぼ同形の資料で、前者が口縁、後者は底部資料である。外面には口縁部に渦巻きを連続して描き、胴部には吉祥文字と花文（蝙蝠？）が描かれる。腰部にはラマ式蓮弁文を配し、底裏銘が書かれるが判読不明である。

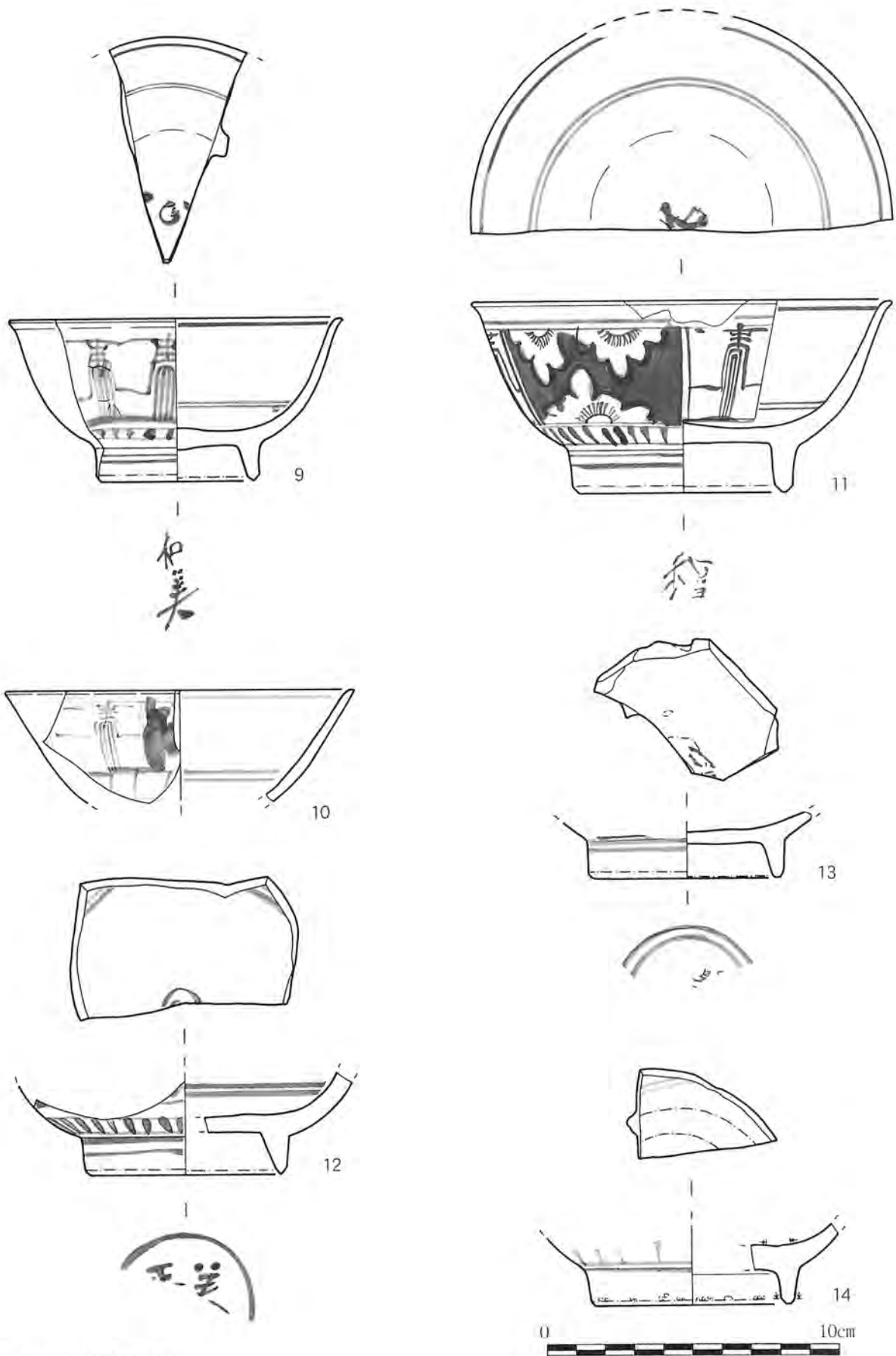
8は大振りの碗で、あるいは鉢とするべき資料である。高台の破片資料のため全形は不明であるが、見込み中央の「高」の字が円内に施された部分のみ施釉し、見込み周縁は露胎となる。9～14は高台は高く端部を三角形に削り露胎させる。底裏面には「和美」の銘が施される。外面の文様には簡略化した蓮弁を腰部に配し、主文様は「寿」字を連続的に配置し、大振りの花（梅？）が描かれる。13・14は小片のため分類しかねるが同形の資料と考える。後者14は見込みが露胎する。6・7・9～14は徳化窯系の製品と考えられる。

第11表 出土陶磁器観察表（清朝磁器）

図 番号	図版 番号	枝 番号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	遺物 No	分類	器種	部位	口径	器高	底径	観 察 所 見
26	37	1	2	D-13	II	—	—	9702	染付	碗	口縁部	12.8	—	—	灰白色の釉を施釉。両面に粗い貫入。外面の文様は簡略化された模様を描く。
26	37	2	2	E-16	I	—	—	30	染付	碗	口縁部	12.6	—	7.8	両面に貫入あり。白化粧の上に淡い呉須による絵付。
26	37	3	2	D-13	II	—	9436	—	染付	碗	口縁部	13.4	—	—	光沢のある淡青白色の釉を施釉。口縁部は薄く鉄錆び色に施釉される。外面は淡い青色の染付による模様を施す。
26	37	4	2	E-11	II	—	8570	—	染付	碗	底部	—	—	7.2	灰白色の釉を薄く施釉。両面に貫入あり。見込みの釉は蛇の目状に掻き取る。高台は無釉。外面に描く文様は不明、花文か？
26	37	5	3	I-43	II	—	—	—	染付	碗	底部	—	—	6.8	高台脇から畳付までは無釉。見込みは蛇の目状に釉が施釉されている。染付としたが、胴部を欠き呉須による絵付けは認められないため、白磁とも考えられる。
26	37	6	2	D-13	II 攪乱	—	—	9707 9721	染付	小碗	口縁部	9.6	—	4.0	淡青白色の釉を施釉。外面口縁に渦巻き文帯、腰部に蓮弁文、胴部には寿字文と梅花もしくは蝙蝠のようなモチーフの文様を描く。
26	37	7	2	D-13	攪乱	—	—	9701	染付	小碗	底部	—	—	1.9	淡青白色の釉を施釉。腰部に蓮弁文を描く。6の資料と同一個体の可能性がある。
26	37	8	3	I-43	II	—	—	—	染付	碗 (鉢)	底部	—	—	11.6	淡灰白色の釉を施釉。畳付は露胎。見込みも蛇の目状に釉がかかる。高台脇に淡い呉須による線文が廻り、見込みにも同様の圈線が施される。見込み中央には「高」の文字が押印される。
27	38	9	2	D-14	II	—	9473	—	染付	碗	完形	11.6	5.7	6.6	淡青色による釉を施釉。外面胴部には寿字文が書かれる。腰部には簡略化した蓮弁を配す。高台内に「和美」字が書かれる。
27	38	10	3	I-42	II	—	—	—	染付	碗	口縁部	12.2	—	—	淡青色による釉を施釉。外面胴部には寿字文が描かれる。外反碗で前者9よりも外反は弱い。
27	38	11	2	D-14	II	—	9455 9456	—	染付	碗	完形	14.6	6.7	5.4	淡青色による釉を施釉。外面胴部には寿字文と梅花文が描かれ、腰部には簡略化した蓮弁を配す。高台内に「和美」字が書かれる。
27	38	12	2	D-14	II	—	9454	—	染付	碗	底部	—	—	—	淡青色による釉を施釉。外面腰部には簡略化した蓮弁を配す。高台内に「和美」字が書かれる。
27	38	13	3	I-43	II	—	—	—	染付	碗	底部	—	—	6.4	黄灰白色の釉を施釉。畳付けは露胎。高台内と見込みに銘と文様が施されるが不明。
27	38	14	3	J-43	II	—	—	—	染付	碗	底部	—	—	6.8	淡青色による釉を施釉。外面腰部には簡略化した蓮弁を配す。見込みは蛇の目状に釉剥ぎされる。



第26图 清朝磁器 (1)



第27图 清朝磁器 (2)

6) 本土産近世陶磁 (第28図)

本土産の陶磁は近世～近代のものがあるが、概して近世期に生産されたと考えられる資料と、近代（から現代）に生産されたと考えられる資料を図示する。

染付

碗 (第28図 1～5) 1～5は伊万里や波佐見地方で生産されたと考える肥前磁器の染付碗である。いわゆる丸碗といわれる張りのある腰部で口縁がやや外開きとなる資料が多い。1は体部に簡略化した山水図？を描く口縁部資料。2は雲竜文？を描いた口縁部資料である。3は胴部資料で、山水図を描いたものとする。4・5は底部資料で、前者は器壁が厚く、後者は薄手のつくりとなる。4は高台脇に圈線が廻り見込みは簡単な文様が描かれる。5は畳付に砂が付着する。

瓶 (第28図 6) 6は本土産の染付瓶の底部資料と考えられる。内体面と畳付は露胎となる。また、高台脇に圈線が描かれる。

白磁 (第28図 7)

瓶 (第28図 7) 7は本土産の白磁瓶の底部資料と考えられる。但し、資料の上方に文様が描かれるとも考えられる。内体面と畳付は露胎となる。

陶器 (第28図 8～11)

碗 (第28図 8・9) 8は外面に銅緑釉を施すが腰部は露胎となる小碗。9は素地はやや精製され、淡黄灰色の釉を全面施釉する。高台の小さな小碗である。

皿 (第28図 10・11) 10は内面に銅緑釉を施し蛇の目釉剥ぎとする小皿と目される。11は見込みが広く胴部から屈曲し口縁部が内抱え状になったもので、見込みは蛇の目釉剥ぎとなる。見込みの施釉は銅緑釉と鉄釉を掛け分け、外面は腰部以下露胎となる。

7) 本土産近・現代陶磁 (第29図)

猪口 (第29図 12) 12は型成形による内面白色、外面瑠璃色の釉によって掛け分ける。

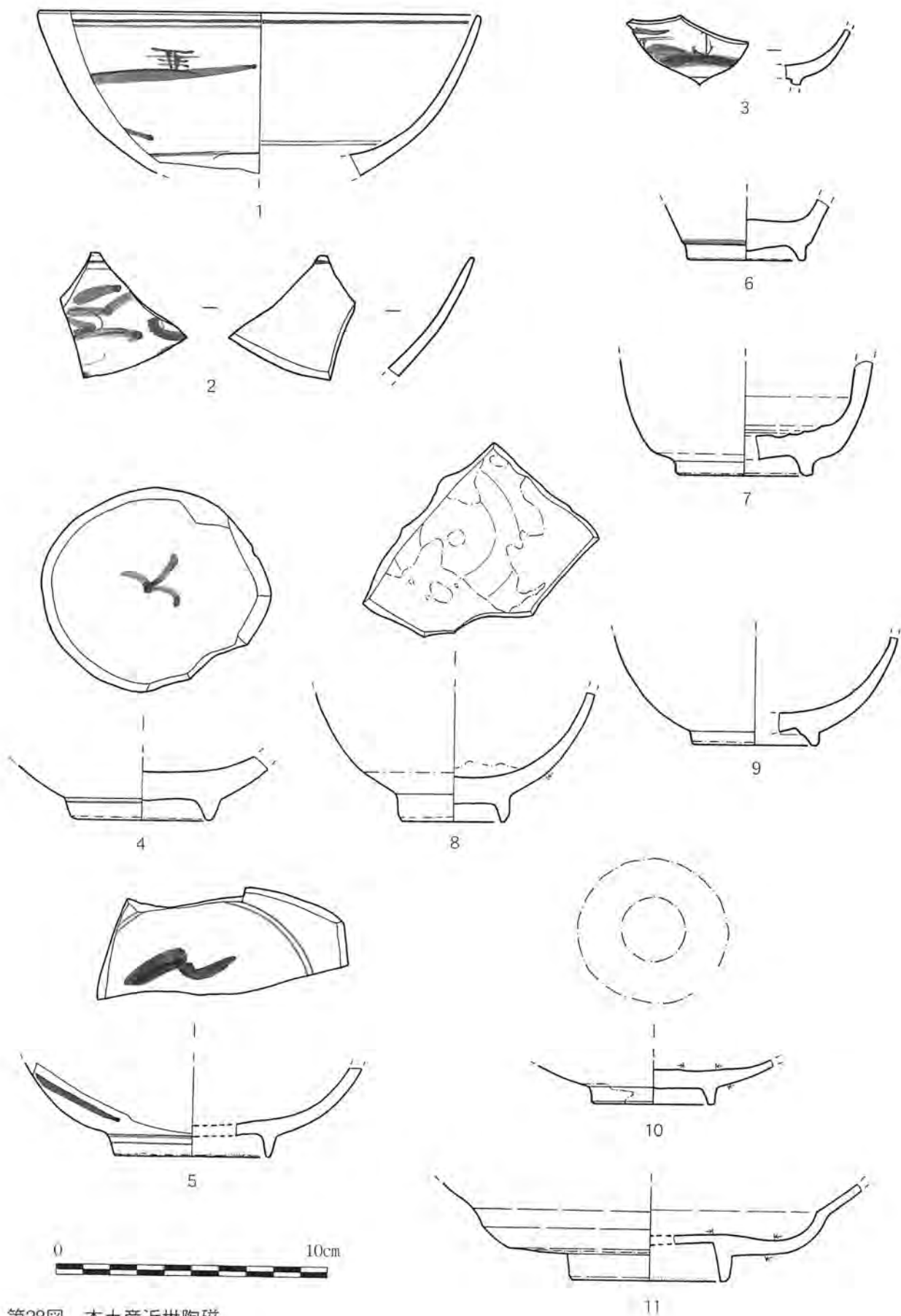
碗 (第29図 13) 13は畳付けを除き総釉。口縁部外面に緑色の圈線を2条施文。戦時中の統制経済下の陶磁器に近似する。14も同様の器形で外面に染付によって文様を描くが文様部分の大部分を欠くため不明。15は銅板刷りの小碗で腰は豊かに張り直口口縁となる。緑色と茶色で文様を描く。16はクロム青磁の小碗。腰部からやや外側に開き直口口縁となる。外面にはトビガンナによる文様を施す。17は白磁器の碗。18は型紙刷りの外反碗で、19は直口碗。愛媛県砥部産の資料と考える。

皿 (第29図 20) 20は染付による風景図を見込みに描いた皿で、畳付けを除き総釉。

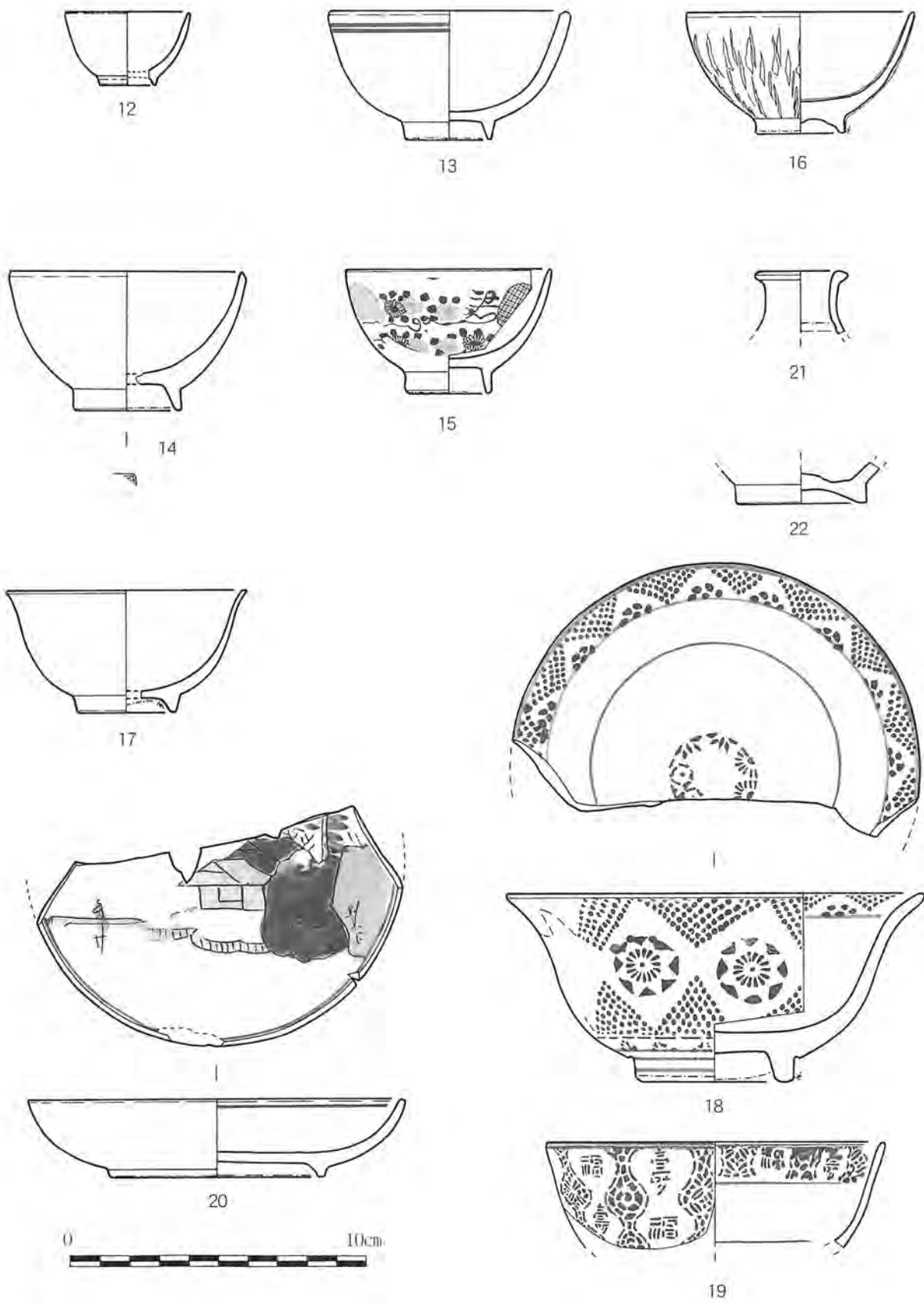
瓶 (第29図 21・22) 21は褐色釉を施釉した陶器瓶の口縁部資料。22は底部資料である。

第12表 出土陶磁観察表（本土産陶磁）

図 番号	図版 番号	枝 番号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	遺物 No	分類	器種	部位	口径	器高	底径	釉 調 ・ 絵 付
28	39	1	2	D-15	攪乱	—	—	9826	染付	碗	口縁部	16.4	—	—	淡灰白色の釉を施釉。直口口縁の口径の広い碗。胴部外面に簡略化した山水図を描く。肥前磁器Ⅲ期（1640～1650年代）資料か？
28	39	2	2	E-15	Ⅱ	—	—	8660	染付	碗	口縁部	—	—	—	淡灰白色の釉を施釉。直口口縁の口径の広い碗。胴部外面に簡略化した竜文？を描く。肥前磁器Ⅲ期（1640～1650年代）資料か？
28	39	3	2	D-13	—	石除去後	—	9998	染付	小碗	胴部	—	—	—	淡青白色の釉を施釉。腰部の屈曲部の資料で外面に簡略化した山水図を描く。
28	39	4	2	E-11	Ⅱ	—	8569	—	染付	碗	底部	—	—	4.6	淡青白色の釉を施釉。厚みのある底部資料で、見込みに簡略化した文様を施文モチーフは不明。畳付けに砂粒が付着。
28	39	5	2	D-14	Ⅱ	SX-9	—	9821	染付	碗	底部	—	—	—	淡青白色の釉を施釉。薄手の底部資料で、見込みと外面胴部に簡略化した文様を施文モチーフは不明。畳付けに砂粒が付着。肥前磁器Ⅲ期（1640～1650年代）資料か？
28	39	6	2	E-16	Ⅰ	—	—	2030	染付	瓶	底部	—	—	4.2	淡灰白色の釉を施釉。発色の悪い黒褐色の呉須で高台脇に線を廻らせる。器内は無釉。
28	39	7	2	E-14	Ⅰ	—	—	414	白磁もしくは染付	瓶	底部	—	—	4.4	淡青白色の釉を施釉。低い高台からやや丸みをもって上部へ立ち上がる。器内は無釉。施文は不明。
28	39	8	2	E-13	Ⅰ	—	—	3	施釉陶器	碗	底部	—	—	4.8	外面は銅緑釉による施釉。内面は灰釉が流し掛けされるため見込みは露胎。高台脇から底部は露胎。
28	39	9	2	D-14	Ⅱ	—	9465	—	施釉陶器	碗	底部	—	—	3.8	黄灰白色の釉を施釉した陶器の丸碗。素地は黄白色。文様等は大半を欠くため不明。
28	39	10	3	I-43	Ⅱ	—	—	—	施釉陶器	皿	底部	—	—	4.4	内面は銅緑釉による施釉で、見込みが蛇の目状に釉剥ぎされる。外面は灰釉、高台脇から底部は露胎。高台脇、高台内にトビガンナ痕あり。
28	39	11	3	I-43	Ⅱ	—	—	—	施釉陶器	皿	底部	—	—	5.8	銅緑釉と鉄釉による掛け分け。見込みは蛇の目状に釉剥ぎされる。口縁部を折る口折れの皿。内野山窯Ⅳ期資料か？
29	40	12	2	D-15	Ⅱ	—	—	9940	瑠璃釉	小杯	完形	4.2	2.6	0.9	内面は透明釉を、外面は瑠璃釉を掛け分ける。畳付けに砂粒が付着する。
29	40	13	2	D-12	—	攪乱	—	9711	近代磁器	碗	完形	8.0	4.5	4.6	畳付けを除いて透明釉が薄く施釉される。素地は白色。口縁に2条の線が緑色で施される。
29	40	14	3	I-42	Ⅱ	—	—	—	近代磁器	碗	完形	8.0	4.8	3.6	畳付けを除いて透明釉が薄く施釉される。素地は白色。体部にコバルトで絵付けされるがモチーフは不明。高台内には銘が書かれる。
29	40	15	2	D-14	—	攪乱	—	9731	銅板刷り	碗	完形	7.0	4.4	3.0	銅板刷りの碗で、絵付けは緑と茶褐色で、モチーフは緑が菊唐草と文字、茶褐色が菊花を描く。
29	40	16	2	D-14	—	攪乱	—	9772	コバルト青磁	碗	完形	7.8	4.3	2.8	体部に縦位のトビガンナが施される。
29	40	17	2	D-13	Ⅱ	—	—	9960	白磁	碗	完形	8.2	4.2	3.2	白磁の外碗で型造りによる製品。産地は不詳。
29	40	18	2	D-12	Ⅱ	—	9581	—	型紙刷り	碗	完形	13.8	6.5	3.0	型紙染付の外反碗で、いわゆるスncanマカイと沖繩で呼称される磁器碗。産地は砥部と推測される。
29	40	19	2	E-14	Ⅰ	—	—	12	型紙刷り	碗	口縁部	11.4	—	—	型紙染付の直口碗で、いわゆるスncanマカイと沖繩で呼称される磁器碗。産地は砥部と推測される。
29	40	20	2	G-25	Ⅰ	—	—	8827	近代磁器	皿	完形	13.0	2.7	3.0	畳付けを除いて透明釉が薄く施釉される。素地は白色。体部にコバルトで山水図が絵付けされる。
29	40	21	3	I-43	Ⅱ	—	—	—	施釉陶器	瓶	口縁部	2.8	—	—	褐色釉の陶器の壺口縁部。内面は口縁部上部のみ施釉され器内は無釉。
29	40	22	3	J-43	Ⅱ	—	—	—	施釉陶器	瓶	底部	—	—	4.4	褐色釉の陶器の高台資料と推測される。小片のため一部釉垂れが高台脇に残る。内面は無釉。



第28図 本土産近世陶磁



第29図 本土産近・現代陶磁

8) 沖縄産陶器 (第30図)

沖縄産陶器は大別して焼締陶器の「荒焼」と施釉陶器の「上焼」そして素焼きの「アカムヌー」などがある。それぞれ様々な器種が生産されている。

焼物の分類毎に以下に紹介する。

荒焼 (第30図 1～6) 1・2は火取り(もしくは火入れ)で直口する口縁部を逆L字形に折り曲げる口造りとなる。口造りは1が上面に凹線がまわるが、2は簡素に仕上げる。耳は方形で1は厚みは無く、2は厚みを持って付けられる。3は甕もしくは壺の底部資料である。4は壺の口縁部資料で端部は方形となる。5・6は播鉢で、前者は口縁部を折り曲げ外面下部がやや肥厚しF字形になる。内面は刷り目が間隔を持って施されている。後者は口縁部を逆L字形に折り曲げる播り鉢で、刷り目は間隔を持って施されるが、その間隔は前者に比べ狭くなる。

上焼 (第30図・第31図・第32図7～30) 7は油壺の口縁から胴部上半の資料である。口縁部上面が露胎し外面にはやや厚い飴釉を施釉する。逆L字に肥厚する。胴上部に耳が付される。8は鍋と推測される口縁部資料で、直口する口縁部に屈曲する蓋受部をつくる。蓋受け部は露胎し全体に褐色釉を薄く施釉する。

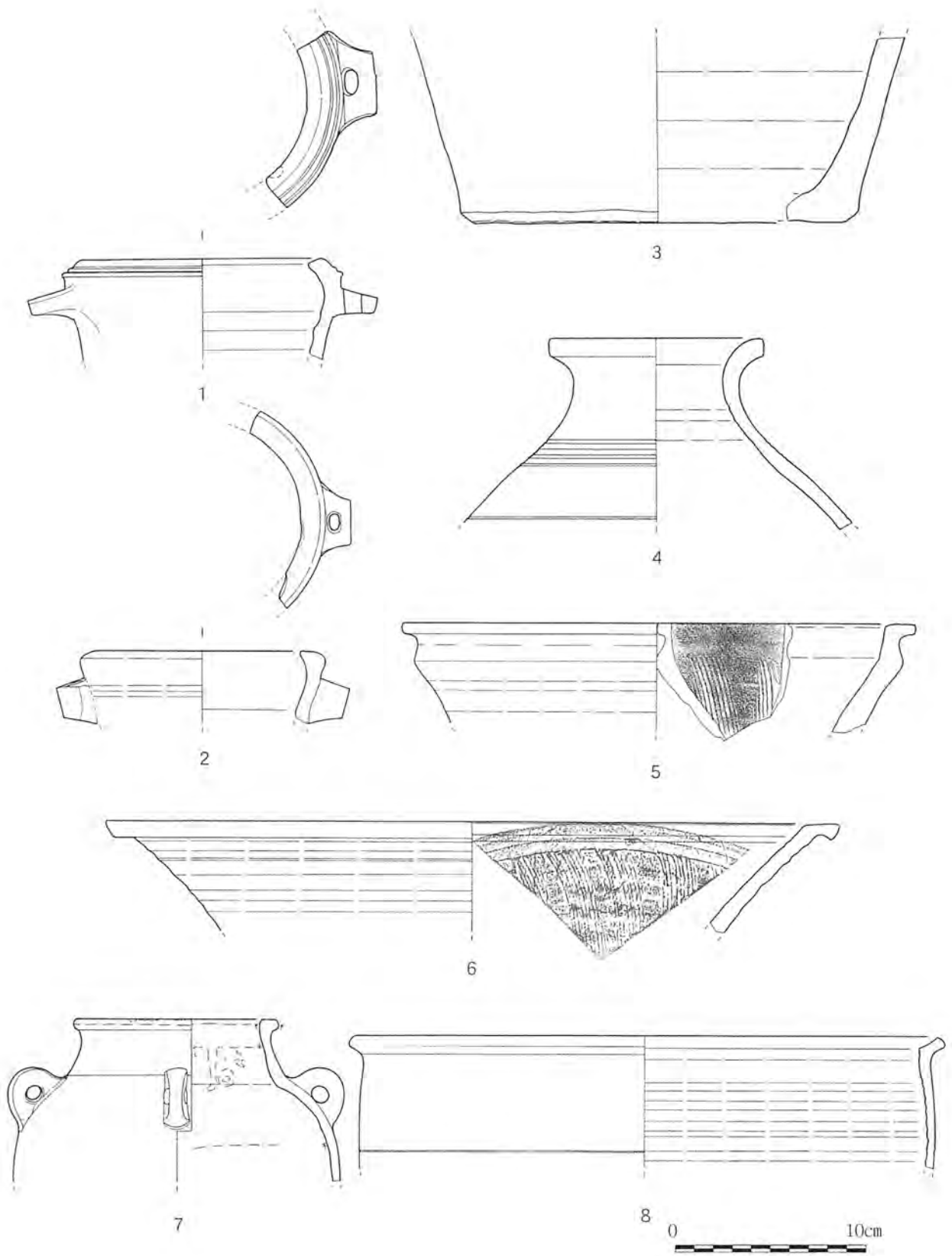
9～20は碗で施釉によって、灰釉の単掛け(9～12)、灰釉に白色の絵付け(13)、黒色釉の単掛け(14)、内面は白化粧後に透明釉、外面黒色釉を掛け分け(15)、白化粧に透明釉(16～18)、白化粧にコバルトの絵付け(19)、褐色釉と白化粧に透明釉の掛け分け(20)などがある。9～12は高台脇から口縁にかけて直線的に開く器形で全体的な器形で、口縁部を僅かに外反させる資料(9)と直口し口唇が舌状になる資料(10・11)がある。いずれも内外面の上半部のみ施釉し下半部が露胎する「フィガキー」の手法による。19は小碗で白化粧後に透明釉を施釉、コバルトによる円形の文様を大振りの点描によって描く。21は体部を面取する角杯で白化粧後透明釉を施釉、内面や蛇の目状に釉剥ぎする。22は大形の鉢で、いわゆる「ワンブー」と呼称される資料である。外面を飴釉、外面を白化粧を施し透明釉で掛け分ける。高台が露胎となり、見込みは蛇の目釉剥ぎし露胎とする。23はいわゆるチューカーの蓋と推測される資料である。白化粧に透明釉、上面には孔が穿たれ、鋸歯状の線彫りに鉄釉と呉須によって装飾される。

24はチューカー(もしくはカラカラ等)の注ぎ口部分の破片資料である。内面は露胎、外面は白化粧に透明釉が掛けられ、注ぎ口の継ぎ部分には緑釉が流し掛けされ、上部に呉須による装飾が見られるがモチーフは不明である。25は器種は不明だが蓋の破片資料。内面は露胎し、蓋上部に褐色釉が掛けられる。素地は第30図7の油壺に似ている。26・27は火取り。前者は文様は施文されない、口縁上面は露胎全面に飴釉が施釉される。後者は腰部から口縁、口縁内面の上部まで飴釉が施釉される。体部には線彫りで笹文が描かれる。28は飴釉の壺(徳利?)でゆるやかに張りのある胴部から短い頸となり口唇部を肥厚させる。29は袋物の底部資料で、豊かに張りのある胴部から油壺や徳利、チューカーなどが想定される。外面腰部まで厚い黒釉が掛けられ、内面は露胎となる。

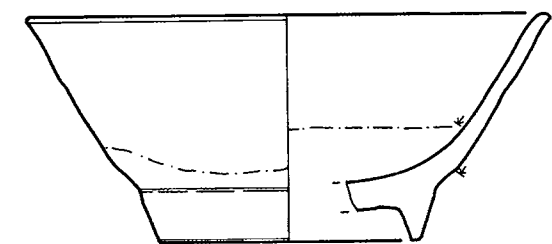
アカムヌー (第32図31・32) 陶質土器で方言ではアカムヌーと呼ばれている。31は蓋で如意頭形の摘みがつく。32は器種不明の口縁部資料で口唇部を小さく肥厚させる。

第13表 出土陶器観察表（沖縄産陶器）

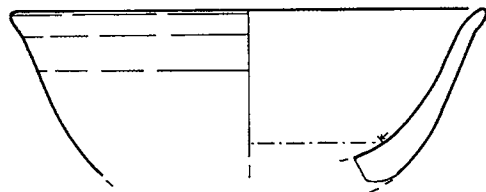
図 番号	図版 番号	枝 番号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	遺物 No	分類	器種	部位	口径	器高	底径	観 察 所 見	
30	41	1	3	I-43	Ⅱ	—	—	—	荒焼	双耳 火取	口縁部	12.8	—	—	逆し字状の口縁部、上面に2条の凹線、灰褐色の素地の 焼き締め陶器。横方向の耳に縦方向に穴が穿たれる。	
30	41	2	2	E-15 E-16	Ⅲ 攪乱	—	—	26 8585	荒焼	双耳 火取	口縁部	11.4	—	6.2	逆し字状の口縁部、口唇部は幅が狭くなる。焼き締め 陶器、赤褐色の素地で自然釉による光沢をもつ。 横方向の耳に縦方向に穴が穿たれる。	
30	41	3	3	I-42	Ⅱ	—	—	—	荒焼	壺もし くは甕	底部	—	—	19.8	焼き締め陶器。赤褐色の素地で底部立ち上がり部分 が面取される。	
30	41	4	2	D-14	Ⅱ	—	—	9963	荒焼	壺	口縁部	11.2	—	—	肩部に多条凹線が廻る。口唇部端を方形に成形。 赤褐色の素地の焼き締め陶器。	
30	41	5	2	E-13	I	—	—	9963	荒焼	播鉢	口縁部	27.2	—	—	口縁部を逆F字に成形する播り鉢。口縁下に段を持つ。 赤褐色の素地、焼き締め陶器。10本の磨り目を持つ。	
30	41	6	3	I-42	Ⅱ	—	—	—	荒焼	播鉢	口縁部	39.2	—	—	口縁部を逆し字に成形する口径の広い播り鉢。肩 部に多条凹線が廻る。口唇部端を方形に成形。赤 褐色の素地の焼き締め陶器。11本の磨り目を持つ。	
30	41	7	2	D-14	Ⅱ	—	—	9831	上焼	壺	口縁部	10.6	—	—	口唇部は露胎。外面と、口縁部内面の一部に褐釉を 施釉。縦方向の耳が付される。	
30	41	8	3	I-43	Ⅱ	—	—	—	上焼	甕もし くは鉢	口縁部	31.0	—	—	口縁部を除き褐色釉を施釉。内面はロク口痕が残り 凹凸がある。	
31	42	9	2	D-13	攪乱	—	—	9721	上焼	碗	完形	13.8	6.0	6.6	内外面とも灰褐色の釉を施釉。両面に貫入あり。底部・見込みは露 胎とする。口縁部が僅かに外反するタイプで口唇は舌状となる。	
31	42	10	2	D-12、 13	I	—	—	9440	上焼	碗	完形	13.6	6.5	7.2	内外面とも黄灰褐色の釉を施釉。底部・見込みは露胎 とする。口縁部が直口するタイプで口唇は丸みを持つ。	
31	42	11	2	D-13	Ⅱ	—	—	9439	上焼	碗	完形	13.6	6.2	—	内外面とも淡灰緑色の釉を施釉腰部まで施釉。底部・見込み は露胎とする。口縁部が直口するタイプで口唇は丸みを持つ。	
31	42	12	2	D-14	Ⅱ	—	—	9725	上焼	碗	口縁部	13.2	—	5.8	内外面とも黒褐色の釉を施釉。内面の腰部が露胎するの が確認されるが、外面は不明。口縁部を僅かに外反させ るタイプで口唇は舌状となる。	
31	42	13	2	D-12	Ⅱ	—	—	9700	上焼	碗	口縁部	15.2	—	10.2	白化粧の後透明釉を施釉。細かい貫入が認められ る。見込みは蛇の目状に釉を剥ぎ取る。口縁部を 僅かに外反させるタイプで口唇はやや肥厚する。	
31	42	14	2	D-13	Ⅱ	—	—	9881	上焼	碗	口縁部	9.2	—	—	白化粧の後透明釉を施釉。口縁部を僅かに外反させるタイプ。 外面胴部に呉須による絵付けがある。口径の小さな小碗。	
31	42	15	2	D-12	攪乱	—	—	9822	上焼	碗	底部	—	—	—	白化粧後、内面を透明釉、外面に黒褐色の釉を施釉。見込みが 蛇の目状に釉剥ぎされる。底部は畳付けのみ露胎となる資料。	
31	42	16	3	I-43	Ⅱ	—	—	—	上焼	碗	底部	—	—	6.2	内外面とも黄褐色の釉を施釉する灰碗。胴上半を欠くため 全形は不明だが、腰部に白色の釉垂れがみられ、文様と思われ る。	
31	42	17	2	D-14	攪乱	—	—	9525	上焼	碗	底部	—	—	6.2	白化粧の後透明釉を施釉。見込みを蛇の目状に釉 剥ぎする底部資料。見込みはやや凹む。	
31	42	18	2	D-12	攪乱	—	—	9822	上焼	碗	底部	—	—	5.8	内面は白化粧の後透明釉を、外面は褐色釉を施釉。畳 付けの部分と、見込みを釉剥ぎする底部資料。	
31	42	19	2	D-13	Ⅱ	—	—	9881	上焼	碗	口縁部	9.2	—	—	白化粧の後透明釉を施釉。口縁部を僅かに外反させるタイプ。 外面胴部に呉須による絵付けがある。口径の小さな小碗。	
31	42	20		E-13	I	—	—	—	上焼	小碗	底部	—	—	3.5	内面は白化粧後透明釉を、外面には褐色の釉を厚く施釉。見 込みは蛇の目状に釉剥ぎされ、畳付けも釉を掻き取り露胎とする。	
31	42	21		E-16	I	—	—	1090	上焼	角杯	底部	—	—	3.5	内外面とも白化粧後透明釉を施釉、見込みは蛇の目 状に釉剥ぎし露胎となる。体部が面取される器形。	
31	42	22	2	D-14	攪乱	—	—	9731	上焼	鉢	底部	—	—	10.0	白化粧後、内面を透明釉、外面に黒色の厚い釉を施釉。見込み が蛇の目状に釉剥ぎされる。底部内、畳付けは露胎となる資料。	
32	43	23	2	H-27	I	—	—	8794	上焼	チュ ーカ ー	蓋	蓋受け口径4.4			外面は白化粧後、線彫によって施文する。鋸歯状の 文様を鉄絵と呉須による加色。	
32	43	24	2	E-15	I	—	—	24	上焼	チュ ーカ ー	注口部	—	—	6.8	外面は白化粧後注口端部を銅緑釉によって加色。	
32	43	25	3	I-43	Ⅱ	—	—	—	上焼	不明	蓋	蓋受け口径8.8			蓋上面に褐色釉を施釉、内面は露胎となる。	
32	43	26	3	I-43	Ⅱ	—	—	—	上焼	不明	口縁部	16.6	—	—	内外面とも褐色釉を施釉、口縁上端は露胎となる。 直口する器形で、口唇部が肥厚。	
32	43	27	2	D-14	攪乱	—	—	9731 9825 9745	上焼	火入れ	完形	11.4	8.8	6.8	筒型の器形に高台が付く火入れ。外面腰部から内 面口縁直下に褐色釉を施釉。腰部には草文を線刻 施文する。	
32	43	28	2	D-12	攪乱	—	—	9669	上焼	瓶	口縁部	2.6	—	5.0	壺の口縁部から肩部にかけての資料で、口唇をやや肥厚さ せる器形。外面と口縁部下に褐色釉を施釉。器内面は無釉。	
32	43	29	2	D-14	攪乱	—	—	9703	上焼	瓶	底部	—	—	—	張りがあり丸みのある体部に高台がつく油壺で、腰 部まで褐色釉が施釉される。器内面は無釉。	
32	43	30	3	I-43	Ⅱ	—	—	—	上焼	瓶	底部	—	—	3.8	張りがあり丸みのある体部に高台がつく油壺で、腰 部まで厚い黒褐色釉が施釉される。器内面は無釉。	
32	43	31	2	D-12	Ⅱ	—	—	9582	—	アカム ヌー	蓋	完形	蓋受 け：9	3.1	—	赤色の素地で、素焼きの製品。傘状の形で、掴みが 付されている。
32	43	32	2	D-13	Ⅱ	—	—	9581	—	アカム ヌー	壺	口縁部	7.8	—	7.4	赤色の素地で、素焼きの製品。口縁部から張りの ある体部となる。口唇部が小さく肥厚する。



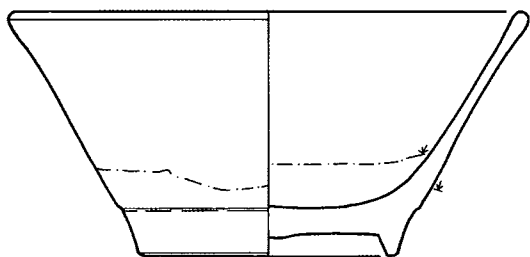
第30図 沖縄産陶器 (1)



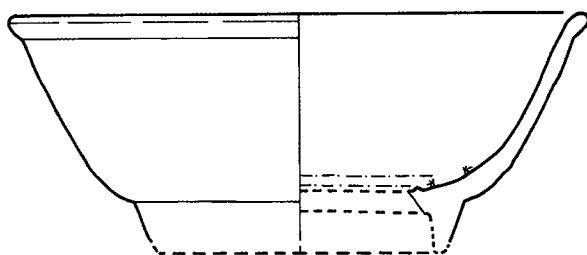
9



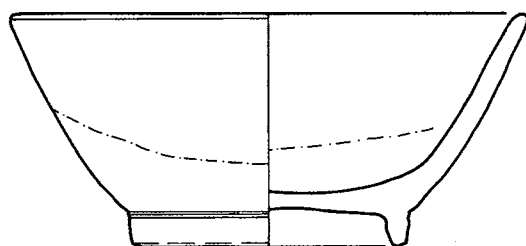
15



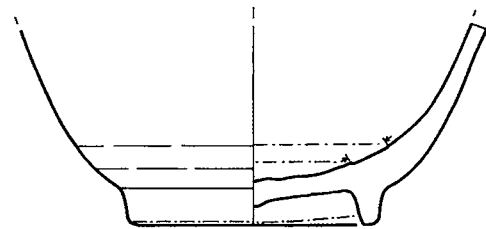
10



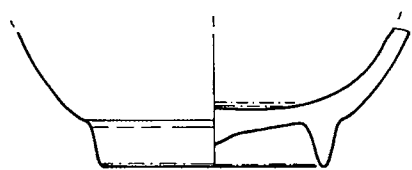
16



11



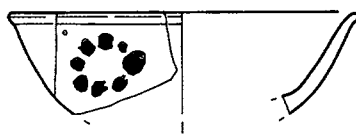
17



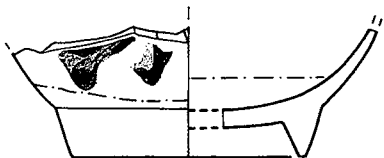
18



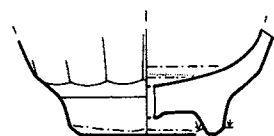
12



19



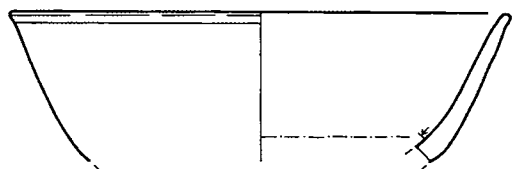
13



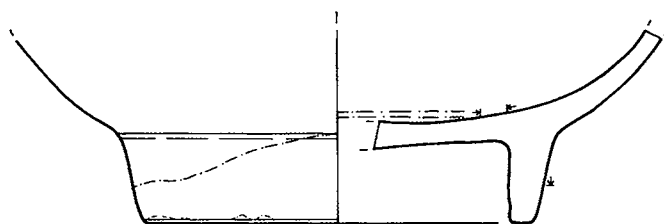
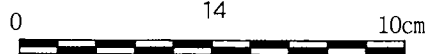
21



20

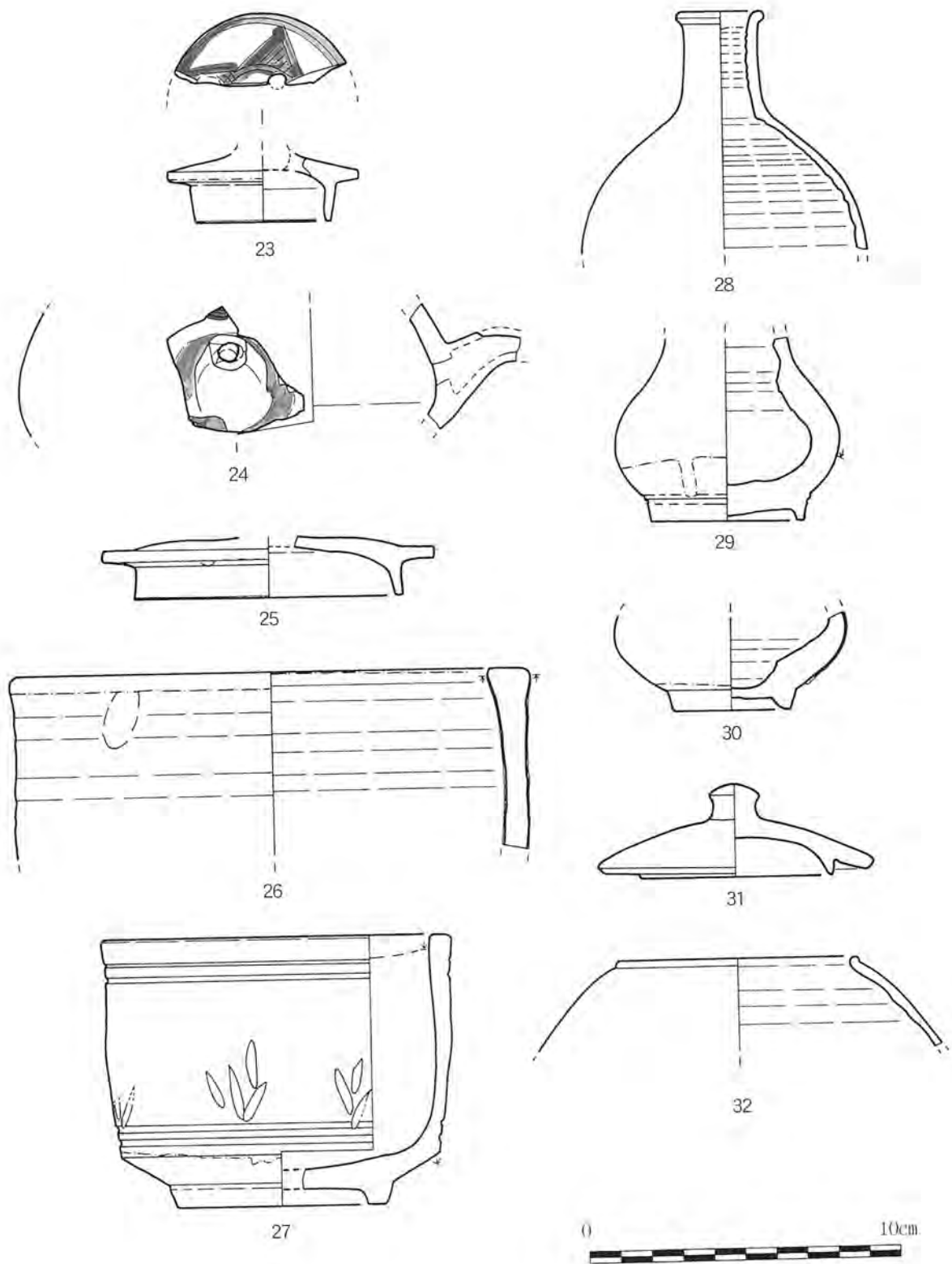


14



22

第31図 沖縄産陶器 (2)



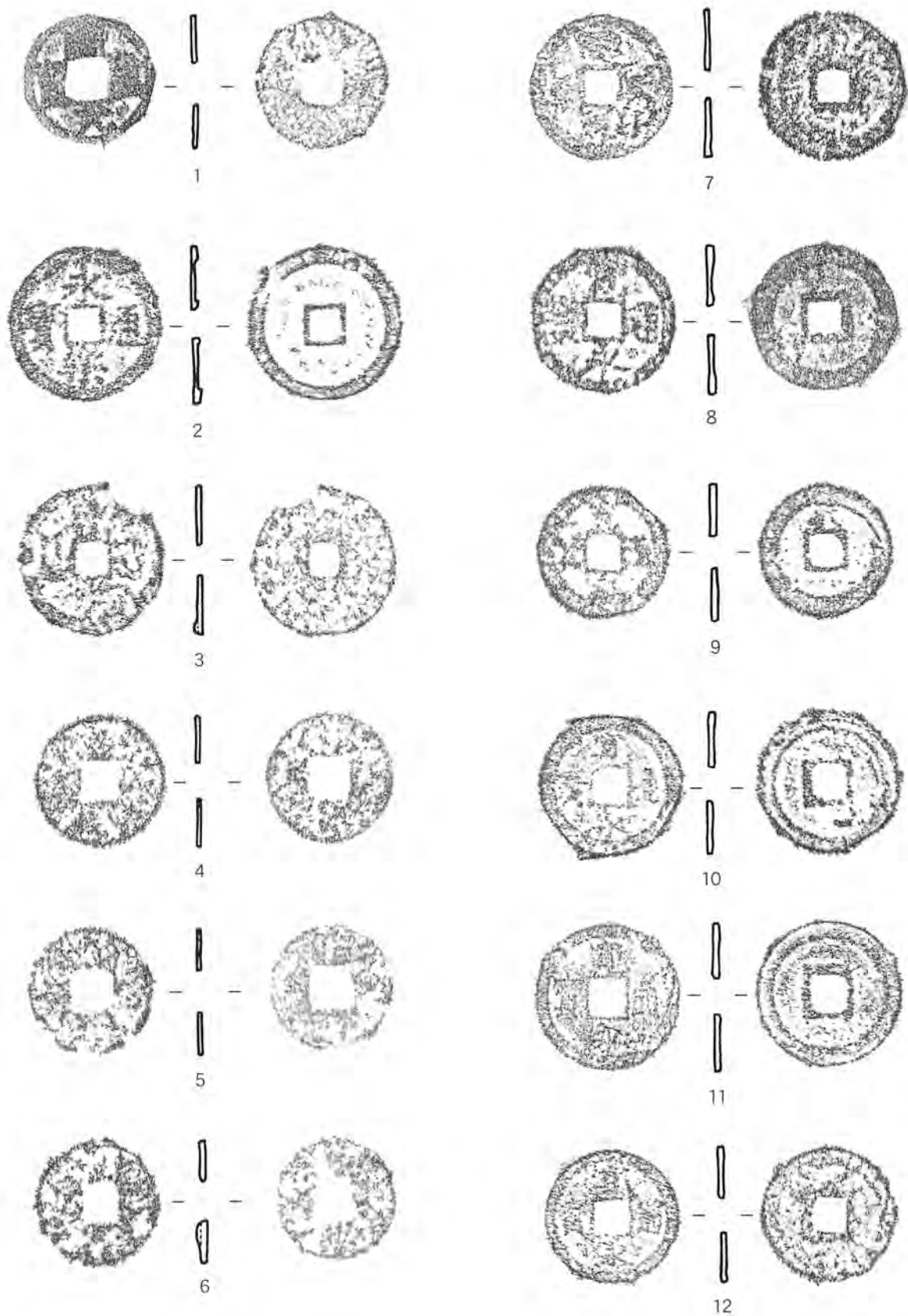
第32図 沖縄産陶器 (3)

9) 銭貨 (第33図)

銭貨は総数16枚出土している。1は文字が摩滅し判読は困難だが、開元通寶と考えられる本遺跡から得られた唯一の唐銭である。2・3は永樂通寶で寛永通寶とともに出土していることから近世になって流通していたものと考えられてる。4～6は判読不能。いずれも銭文が読めないだけでなく径も小さく腐食が著しい。7～12は寛永通寶である。出土状況は2・3が重なった状態で出土、9～12も重なった状態で出土している。

第14表 出土銭貨観察表

図 番 号	図 版 番 号	枝 番 号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	遺物 No	銭貨名	鑄造 時代	西 暦	計 測 値 (mm, g)						備 考
												外径	内径	孔 径		銭厚	重量	
														縦	横			
33	44	1	2	D-15	Ⅱ	シャコ 貝集中	9662	10056	開元通寶	南唐	960	22.32	18.38	7.03	7.21	1.43	2.37	裏面は縁の凹凸 が摩滅。表面も やや摩滅しており、 文字が鮮明。
33	44	2	2	D-14	－	－	－	10193	永樂通寶	明	1408	26.04	21.16	5.33	5.23	1.77	3.73	第33図3と 一 括 出土。
33	44	3	2	D-14	－	－	－	10193	永樂通寶	明	1408	25.54	22.53	5.36	5.18	1.56	2.39	第33図2と 一 括 出土。
33	44	4	2	E-14, 15	Ⅱ	SD-2	8586	8759	不明	－	－	21.85	－	6.78	6.77	1.41	2.08	摩滅と錆のため 不鮮明。
33	44	5	2	D-14	Ⅱ	－	－	9713	不明	－	－	21.12	－	7.26	7.05	1.30	1.46	歪む。摩滅と錆 びのため不鮮明。
33	44	6	2	D-15	－	シャコ 貝集中	9690	10084	不明	－	－	20.91	－	6.78	6.13	1.78	1.77	
33	44	7	2	D-14	Ⅱ	－	9468	9839	寛永通寶	江戸	1636	24.82	19.56	5.01	5.21	1.67	4.03	摩滅。
33	44	8	2	D-14	Ⅱ	－	9503		寛永通寶	江戸	1636	24.71	19.60	5.24	5.31	1.45	4.23	
33	44	9	2	D-14	Ⅱ	－	9441	9788	寛永通寶	江戸	1636	22.46	18.52	5.53	5.62	1.16	2.28	第33図9～12は 重なった状態で 一括出土。
33	44	10	2	D-14	Ⅱ	－	9441	9788	寛永通寶	江戸	1636	24.32	18.58	5.84	5.90	1.23	2.87	第33図9～12は 重なった状態で 一括出土。
33	44	11	2	D-14	Ⅱ	－	9441	9788	寛永通寶	江戸	1636	24.91	20.19	6.07	5.98	1.50	3.54	第33図9～12は 重なった状態で 一括出土。
33	44	12	2	D-14	Ⅱ	－	9441	9788	寛永通寶	江戸	1636	23.05	18.73	5.79	5.89	1.14	2.72	第33図9～12は 重なった状態で 一括出土。



第33図 錢貨

10) 円盤状製品 (第34図 1)

1 は荒焼の壺もしくは甕などの胴部を転用した円盤状製品である。直径が6.6cmで重量は79.55gを計る。外面から内面に向け打ち割り、円形に成形する。

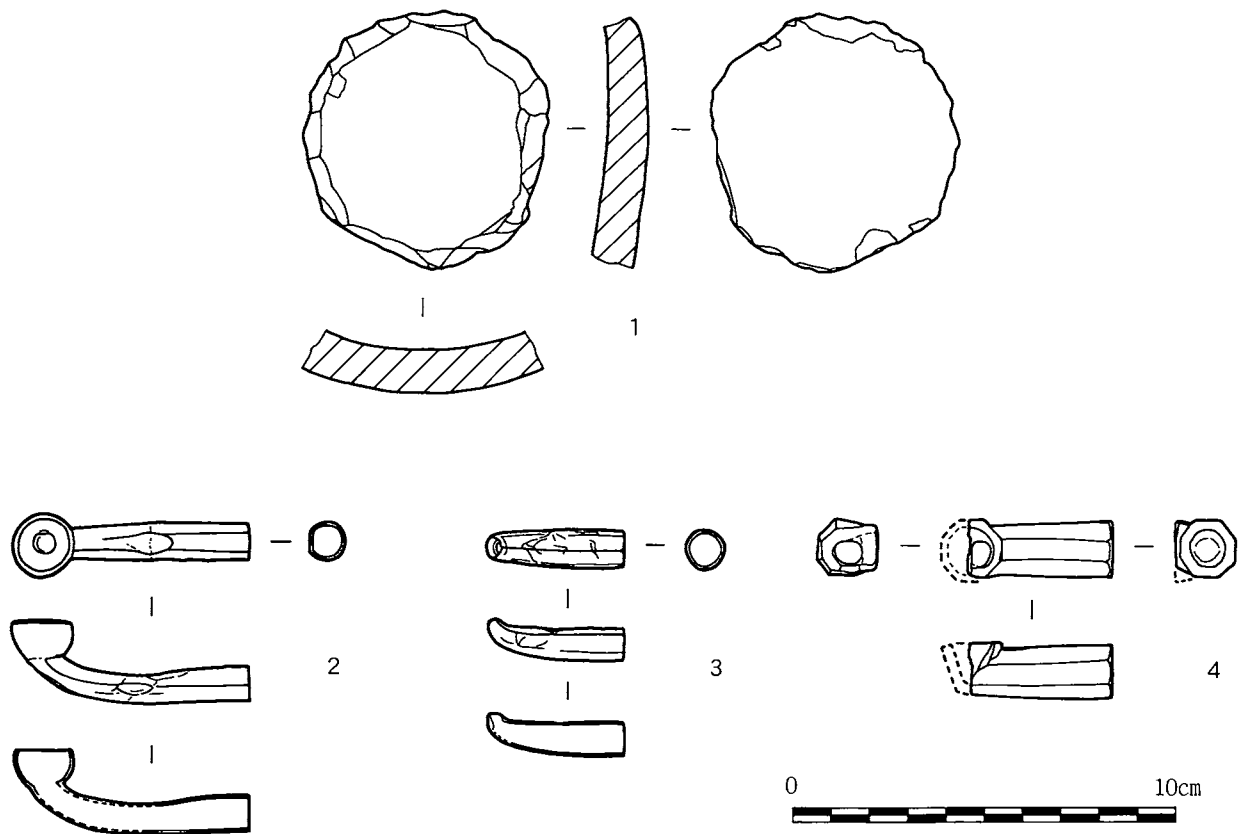
11) 煙管 (第34図 2～4)

2 は煙管の雁首で肩部から頸の部分へのカーブに丸みがあり、火皿部分が深く広い形になる。火皿の径が1.3cm、小口の径が0.8cmとなる。緑色に錆びることから銅もしくは真鍮等の金属製品と考えられる。鍛造でのばした金属を繋いだ継ぎ目が横に目地として残る。3 も金属製の雁首で肩部から頸の部分へのカーブはやや直線的となり、火皿部分は欠損するため不明。小口の径が0.8cmとなる。製作方法は2と同様であるが、のばした金属を繋いだ継ぎ目が上面に目地として残る。

4 は陶製の雁首で小口の内縁は円形になるのに対して、外縁を八角形にして肩部全体が八角形に面取されている。火皿部分が欠損しているため全体的な形は不明である。小口部分の径は0.9cmになる。

第15表 円盤状製品・煙管観察表

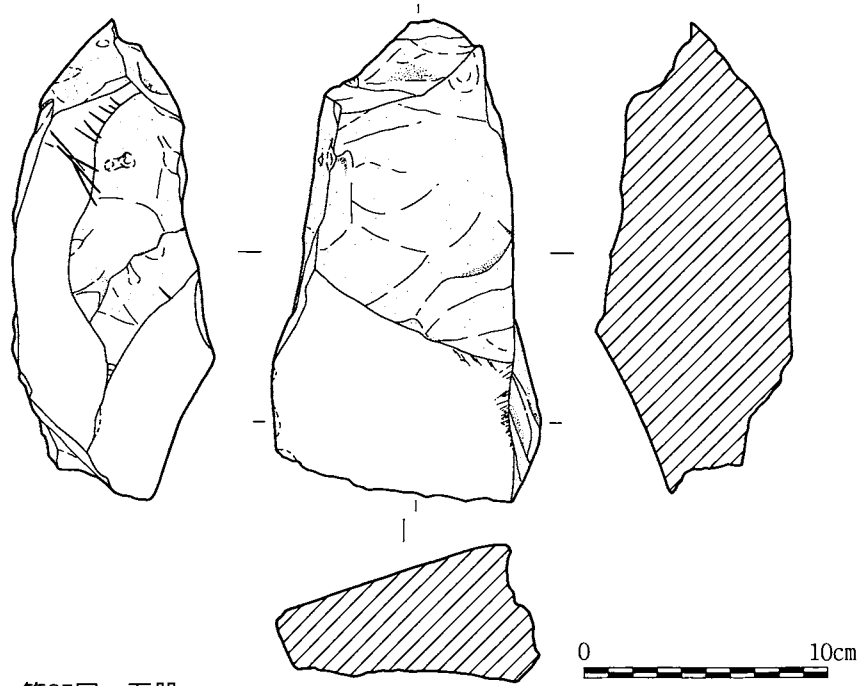
図 番号	図版 番号	枝 番号	次	グリッド	層位	遺構 名	dot	遺物 No	材 質	分 類	計 測 値
34	45	1	2	I-42	II	—	—	404	沖縄産陶器	円盤状製品	長さ：6.6～6.3cm／厚さ：1.1cm／重量：79.55g
34	45	2	3	I-43	II	—	—	2297	金属製	雁首	長さ：6.3cm／火皿口径：1.3cm／小口径：0.8cm
34	45	3	2	E-14	I	—	—	404	金属製	雁首	長さ：(残)3.7cm／火皿口径：不明／小口径：0.8cm
34	45	4	2	E-16	II	—	4164	4260	陶 製	雁首	長さ：(残)3.8cm／火皿口径：(推算)1.1cm／小口径：0.9cm



第34図 円盤状製品・煙管

12) 石器 (第35図)

石器・石製品は砥石 1 点である。その他にも不正形な窪みを持った石があるが作業面の敲打、摩滅などが明確でないので報告を留保した。第35図はD-15 II層から出土した砥石である(石質・玢岩)。



第35図 石器

13) 金属製品
(第36図 1～15)

鉄製品の中には明らかに戦後に製作されたと考えられる遺物も多く含まれるが、錆びや形状等からこれらを

省き報告する。報告資料はいずれも角釘や楔、棒状の鉄製品でここでは一括して鉄釘等として報告する。1は長さが10.5cmを計る資料で最も長い鉄釘である。皆折り釘で逆L字状に頭部を折る。2は楔状の製品で断面形は平たい。3～11は棒状の鉄製品で鉄釘等の破損品と推量される。

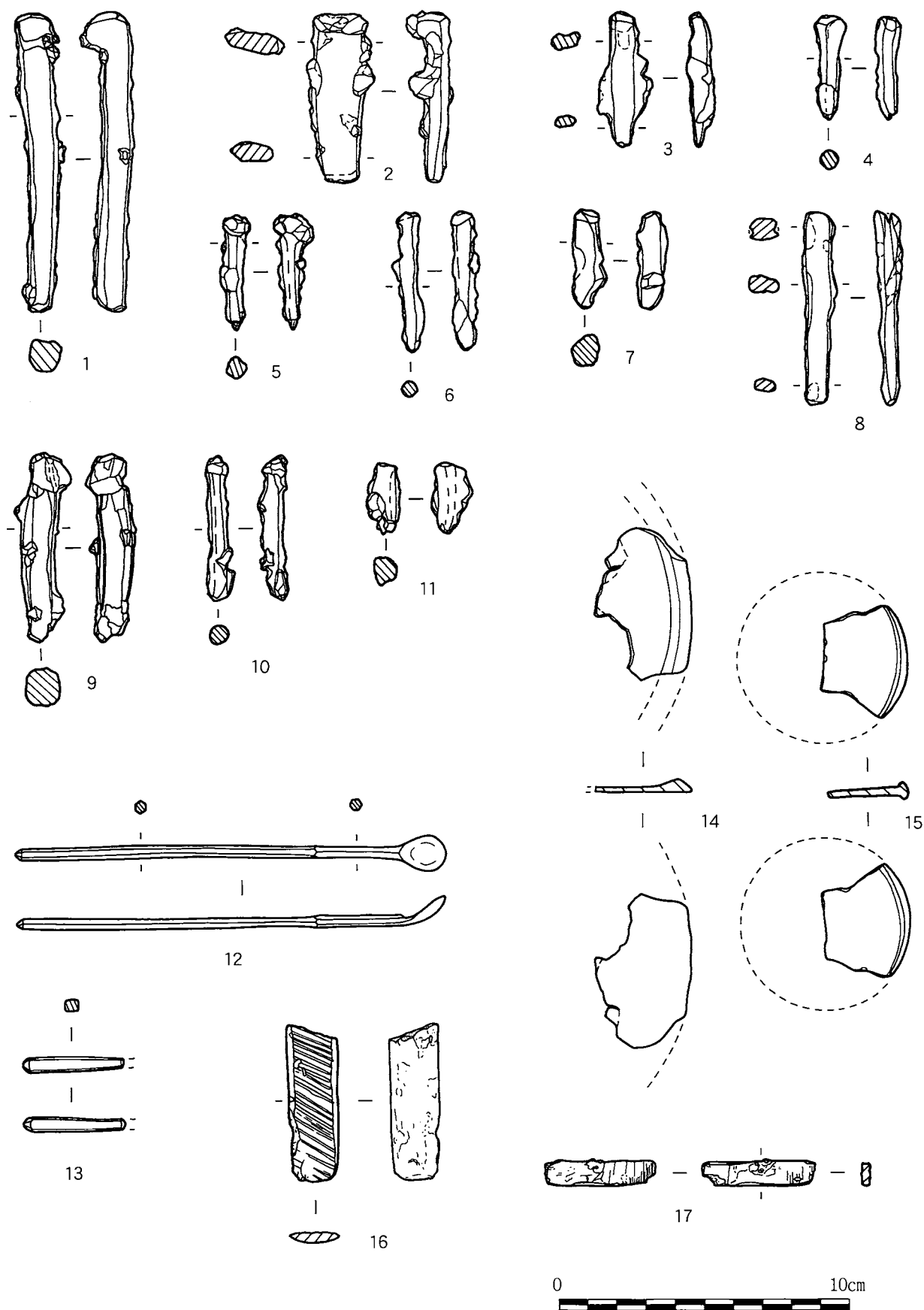
銅製品は簪と鏡状の製品が得られている。12は簪で、長さ15cmを計る。13は簪の破損品と推測される棒状の銅製品である。14は表面無文の鏡破片と考えられる資料である。15は円形の銅製品で鏡として報告するが腐食が著しく判然としない。

第16表 金属製品観察表

図 番号	図版 番号	枝 番号	次	グリッド	層位	遺構名	dot	遺物 No	材 質	分 類	計 測 値
36	46	1	2	D-13	攪乱	—	—	9729	鉄	釘	完形。10.5cm。
36	46	2	3	J-38	I	—	—	—	鉄	釘	完形。6cm。
36	46	3	2	E-10	II	—	—	8496	鉄	楔?	完形。4.7cm。
36	46	4	2	G-26	II	—	8628	8835	鉄	釘	完形。3.6cm。
36	46	5	2	F-24	II	攪乱	—	8927	鉄	釘	頭部。残存4cm。
36	46	6	2	G-25	II	—	—	8861	鉄	釘	完形。4.9cm。
36	46	7	2	F-24	II	攪乱	—	8927	鉄	釘	完形。3.5cm。
36	46	8	3	J-38	表土層	—	—	—	鉄	釘	完形。6.7cm。
36	46	9	2	G-25	II	—	8869	9099	鉄	釘	胴部。残存6.6cm。
36	46	10	2	G-25	II	—	—	8895	鉄	釘	完形。5cm。
36	46	11	2	F-24	II	攪乱	—	8927	鉄	釘	頭部。残存2.5cm。
36	46	12	3	I-43	II	—	—	2182	銅?	ジューパー	完形。15cm。
36	46	13	2	D-14	—	畦	9744	10153	銅?	ジューパー	残存3.54cm。
36	46	14	2	D-13	II	—	—	9722	銅?	鏡	重量24.07g
36	46	15	2	E-13	I	—	—	83	銅?	鏡?	推算約6.0cm。重量17.54g

14) 骨製品 (第36図16～17)

骨製品は前節で報告した縄文時代以外のものをここで扱った。いずれもウシもしくはウマの骨を利用したと考えられる製品で、16は斜め方向に溝が刻まれるヘラ状の製品で、17はヘラで、中央に3本鉄釘が穿たれている。前者はD-14 II層出土。後者はD-15攪乱層出土。



第36図 金属製品・骨製品

15) 小結

グスク時代以降の遺物をまとめる。Ⅱ層（黒褐色土層）からはカムイヤキや白磁口禿碗などの13世紀頃に遡るものから、スンカンマカイ等の戦前まで使用されていた多種の遺物が出土する。また、その上層の攪乱層からは現代の空き缶などを含むことからⅡ層の年代を特定すると近・現代以前グスク時代以降と理解できる。

主な出土遺物を時代毎に見ていくと、グスク時代に相当する遺物として青磁や青花がある。これは中国で焼成されたもので、器種としては碗、皿を中心に出土し、盤や壺はほとんど見られない。特筆されるものとしてタイ陶磁の鉄絵合子が出土した。村内の遺跡では今帰仁城跡では比較的多く出土するものの、他の遺跡では今のところ例が少ない希有な例であると考ええる。

次に近世期の遺物として清朝磁器や本土産の陶磁があげられる。沖縄産陶器もこの時期に生産されたものと考えるが、編年観など未整備な点もあることから近世から近代のいずれかの資料に分類されるかについては言及を避ける。中国磁器、本土産陶磁ともに碗皿が主体となっている。

最後に近代以降の遺物として本土産陶磁と沖縄産陶器があげられる。先に述べたように沖縄産陶器の年代的な所見は控える。沖縄産陶器はバリエーションに富んだ資料が得られている。具体的には碗・壺・鉢類・瓶・火入れなどがある。この他にも近代以降の資料については抜粋し紹介する程度であるため、報告未掲載の表品も少なくない。

陶磁器の他の遺物では銭貨、煙管、鉄釘、ジーファー（簪）、骨製品（ヘラ）などグスク時代以降の生活をうかがい知る多くの出土品を得ている。

調査地域となった第2次調査第Ⅰ区の北側はウンナーヤーとして呼称される旧家があった場所で、遺物や検出された遺構の一部はこれらの近世から近代の北側で生活した人々の痕跡と考えることもできるが、これを積極的に証明できるだけの資料は乏しい。前回の調査同様やはりグスク時代から近代の資料を層位や地区毎に区分できるように遺物を回収することは困難であったが、本調査で得られた資料は古宇利島の歴史を知る考古資料群であり、今後詳細な分析によって生活様相の復元に役立つものと考ええる。

第Ⅵ章

おわりに

以上、古宇利原A遺跡の発掘調査の成果について報告した。最後に若干のまとめをして、結びとしたい。

まず最初に、本調遺跡の年代観について考えてみたい。これまで行われた発掘調査では本調査地点を含む古宇利原一帯は、先史時代の遺物を包蔵する黒色土層と、グスク時代から近・現代の遺物を含む黒褐色土層の2つの層に分けられる。前者の黒色土層については先史時代でも沖縄貝塚時代前期（縄文時代後期並行期）の資料を中心に出土している。具体的には、土器型式として伊波式、荻堂式が多く出土し、これよりも古式の要素を持つ嘉徳ⅠA式や仲泊式、逆に新しい型式として知られる大山式や室川式土器などが若干得られている。このことから縄文時代後期並行期を中心とした時期の遺跡であることが確認された。これは前回調査（上原ほか1983）と同じ結果であり、前回調査を追認する結果となっている。但し、前回調査では80%が室川式土器であった点からすると若干、古い遺物が多く得られていることとなる。

黒褐色土層からは近世～現代の遺物を多く包蔵するとともに、グスク時代の遺物も少なくない。特に小片ながら、土器やカムイヤキ、白磁口禿碗などグスク時代でも13世紀を遡る古手の遺物が散見されることから、13世紀頃には既に古宇利原一帯へ人の居住があったことが伺える。以後14～16世紀の年代で整理できる青磁、白磁、青花、褐釉陶器などが出土していることからグスク時代にも継続的に営みがあったことが想定される。『海東諸国紀』（1471年）の「琉球国之図」では「郡島 有人居」として記録されている。この記録に登場する人がこれらの陶磁器を消費したと想定される。17世紀以降の遺物も豊富で、中国清朝磁器の他、肥前陶磁が出土している。

以上のことから、古宇利原一帯へ最初に人が定住するのは縄文時代後期並行期を中心とした時代で、その後縄文時代晩期並行期から12世紀頃までに比定できる遺物は皆無といっていることを考えると、この間無人島となっていたか、もしくは島の別の地点へ住居を移したのであろう。その後、13世紀前後になって遺物が散見されるが、少量であることから当該地点以外の近傍の場所で生活の痕跡がまとまってあることに期待したい。14～16世紀は、県内の他のグスク期の遺跡と比しても遜色ない豊富な遺物を含んでいる。但し、青磁・白磁・青花といった陶磁器が碗・皿を主体とし、これ以外の盤・壺・瓶といった器を含まない点は一般村落の様相を示していると考えられる。それでもタイ産の陶器などが出土するなど単に一般村落としてだけでない出土品も見られ興味深い。このような出土状況は、運天が重要港湾として利用されていたことと無関係ではないと考える。

遺構としては縄文時代並行期では、先の調査のような明確な住居跡などを検出することができなかった。これは、遺跡の縁辺部であったというだけでなく、既に遺跡の大半が道路工事や水道管の敷設などで破壊されていたことによるのは明らかである。グスク～近世琉球期の遺構も明確に検出することはできなかった。いずれも近代の遺物も含むことから、その帰属年代を確定的に説明できなかったというのが現状である。

遺物は、縄文時代並行期の出土品として石斧や敲石などが出土、骨製品や貝製品なども得られている。特筆されるのは、前回の調査では出土しなかった貝珠が8点得られている点である。貝製の玉は大変小さく今回の各作業員が現場で目視して回収することができたものである。また、貝珠については木下尚子先生より詳細なコメントをいただき本報告を充実することができた。

グスク～近世琉球期の遺物では陶磁器がやはり特筆されるが、その他にも金属製品や銭貨、骨製品など当時の生活をうかがい知る貴重な資料が得られている。

自然遺物については、残念ながら時間的な制約等から、報告を割愛せざるを得なかった。本遺跡から得られた自然遺物は、グスク～近世琉球期の自然遺物を主体にTS-36のコンテナ（プラスチックケース）で約100ケースを数える。また、遺構として確認できたシャコガイ集中遺構や、マガキガイなどの貝廃棄遺構はこれまで報告した遺物を使用した人の生活行動を知ることのできる良好な資料と考えられ、これを含めた自然遺物の整理や遺構の詳細については今後の課題としたい。

以上、発掘調査で確認された遺物を中心に古宇利原A遺跡の生活や歴史的な変遷について考えてきた。古宇利島の発掘調査によって古宇利島に生きた先史時代人の生活や、現古宇利原に通じるグスク時代の生活痕跡を確かめられたことは大きな成果であると考ええる。今後は古宇利島全域の遺跡について詳細を検討、発掘調査を進めるとともに、屋我地島や運天などといった周辺地域との関係や、現古宇利原の集落景観の形成などといった重要な課題点についての解明が期待される。本調査を含めた、古宇利の発掘調査によって島の歴史が解明されるであろう。

参 考 文 献

〈あ〉

上原静ほか 1983年『古宇利原遺跡発掘調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書 第8集
今帰仁村教育委員会

上原静ほか 1984年『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10号 今帰仁村教育
委員会

上田秀夫 1982年「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿
易陶磁研究会

小野正敏 1982年「14～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本
貿易陶磁研究会

〈か〉

金武正紀 1975年「古宇利の先史遺跡の概報」『南島考古』第4号 沖縄考古学会

金武正紀ほか 1991年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集
今帰仁村教育委員会

〈さ〉

坂本磐雄 1989年『沖縄の集落景観』九州大学出版会 p218

新城力・仲地洋 1975年「各部落の屋取」『今帰仁村史』今帰仁村史編纂委員会

白木原和美 1978年「クガニイシ」『法文論叢』第41号 熊本大学法文学部

島袋春美ほか 1986年『地荒原貝塚』具志川市教育委員会

〈た〉

当真嗣一・上原静 1982年「伊武部貝塚発掘調査について」『南島考古だより』第25号 沖
縄考古学会

〈な〉

仲原弘哲 1998年『すくみち』第32号「古宇利の歴史」今帰仁村教育委員会・今帰仁村歴
史文化センター

〈は〉

フォルカード 1993年『幕末日本仏交流記ーフォルカード神父の琉球日記ー』中央文庫p108
～109

〈ま〉

宮城弘樹ほか 2002年『長根原遺跡発掘調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第15集
今帰仁村教育委員会

森田勉 1982年「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁
研究会

写真図版



図版1 空から見た古宇利島



調査箇所位置（着色部分）



図版2 遺跡遠景（南から）



図版3 遺跡近くで行われる祭祀（ウンジャミ）



図版4 第2次調査 第Ⅰ区（前期）全景（西から）



図版5 第3次調査 第Ⅰ区全景（西から）

図版 6
E-16 東壁セクション



図版 7
H-25 南壁セクション



図版 8
J-36 西壁セクション



図版 9
2次調査Ⅰ区作業状況

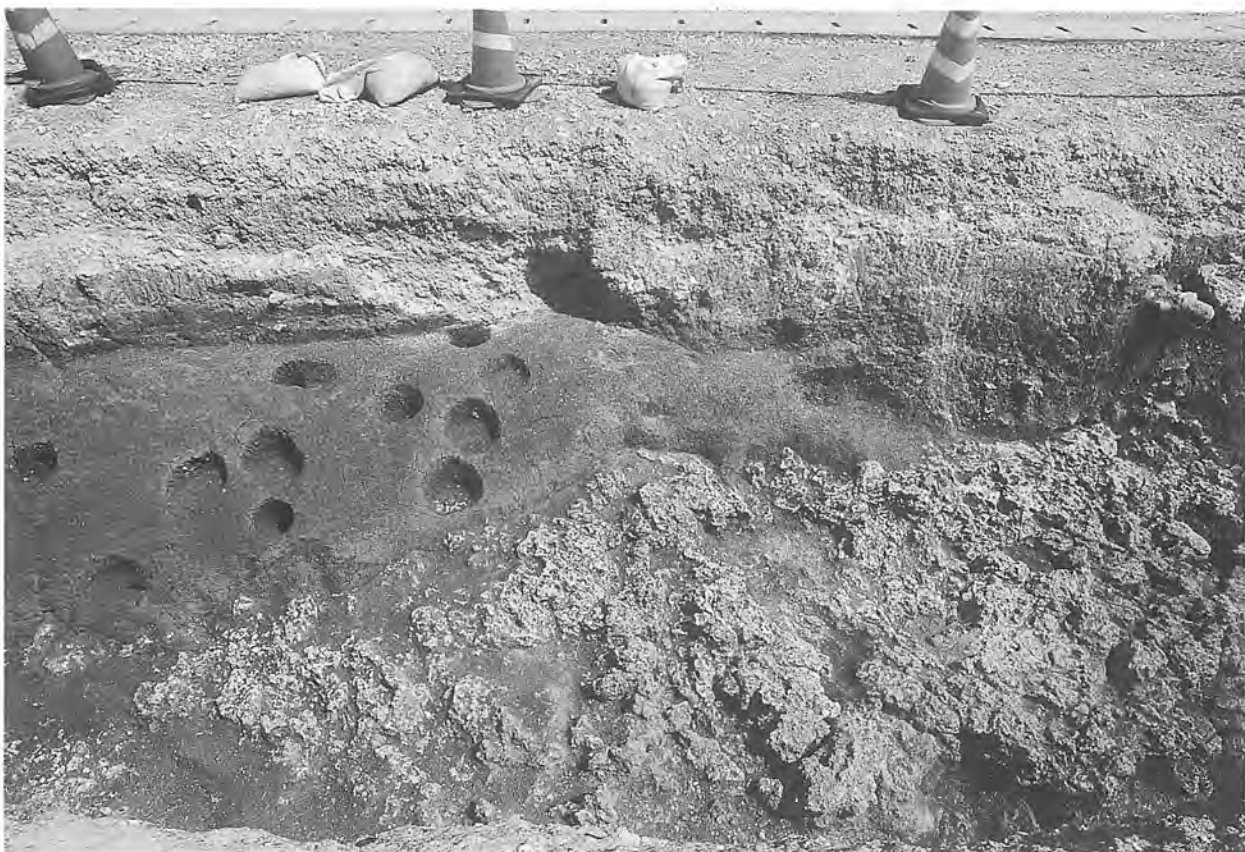


図版 10
3次調査Ⅲ区作業状況



図版 11
現場説明会





図版12 SR2下のピット



図版13 石列遺構 (SR1)

図版14
二枚貝廃棄遺構(SS4)



図版15
マガキガイ廃棄遺構(SS5)



図版16
マガキガイ廃棄遺構(SS6)



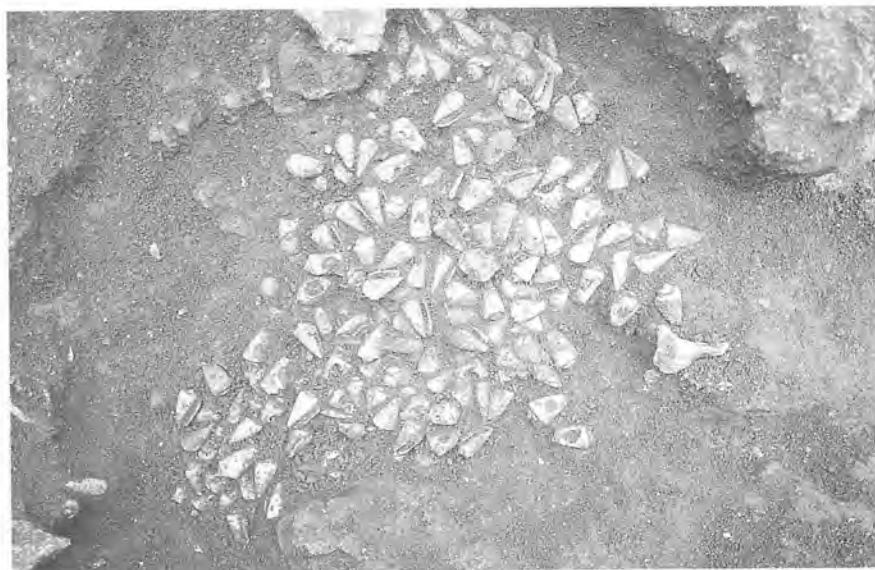
図版17
マガキガイ廃棄(SS7)



図版18
シャコガイ集中遺構(SS8)



図版19
シャコガイ集中遺構(SS8)
下層のマガキガイ



图版20
土器出土状况



图版21
石斧出土状况



图版22
石器出土状况



図版23
石器出土状況

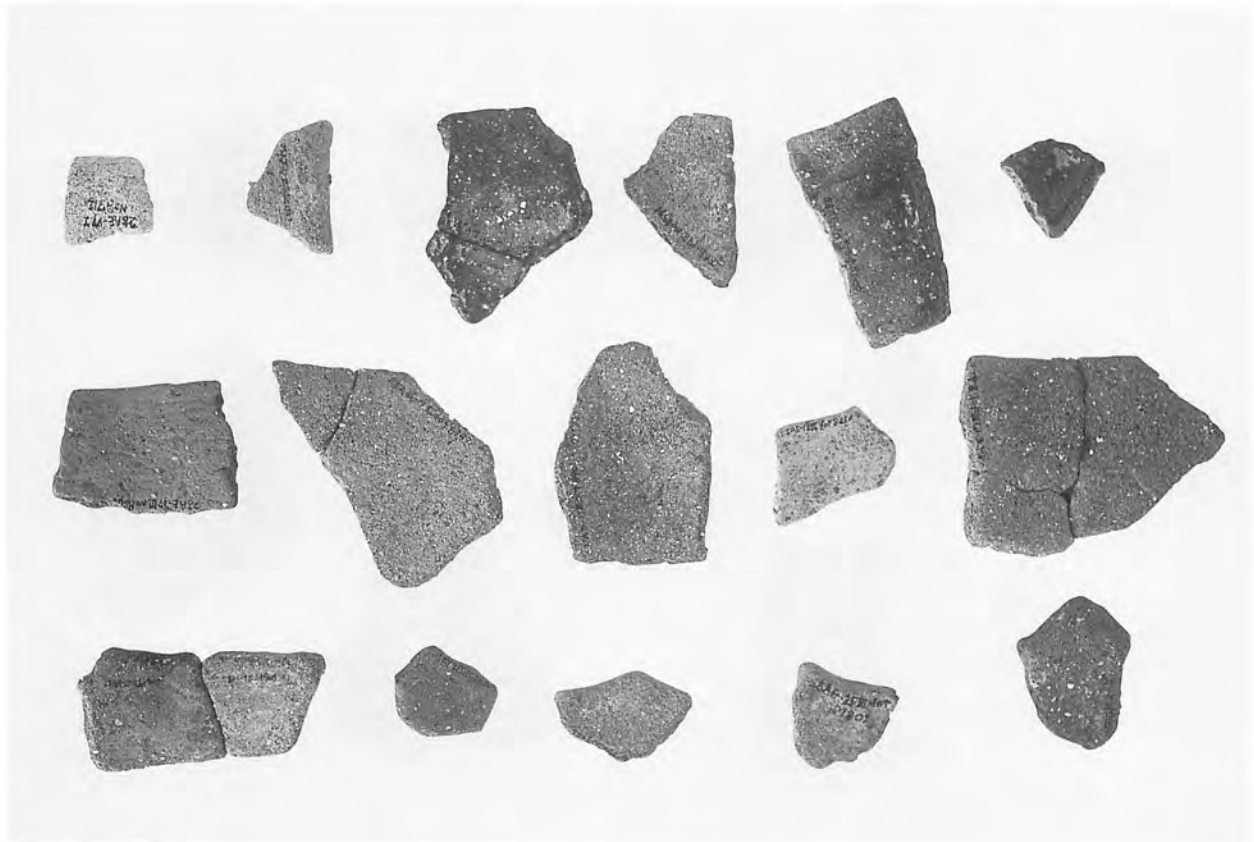
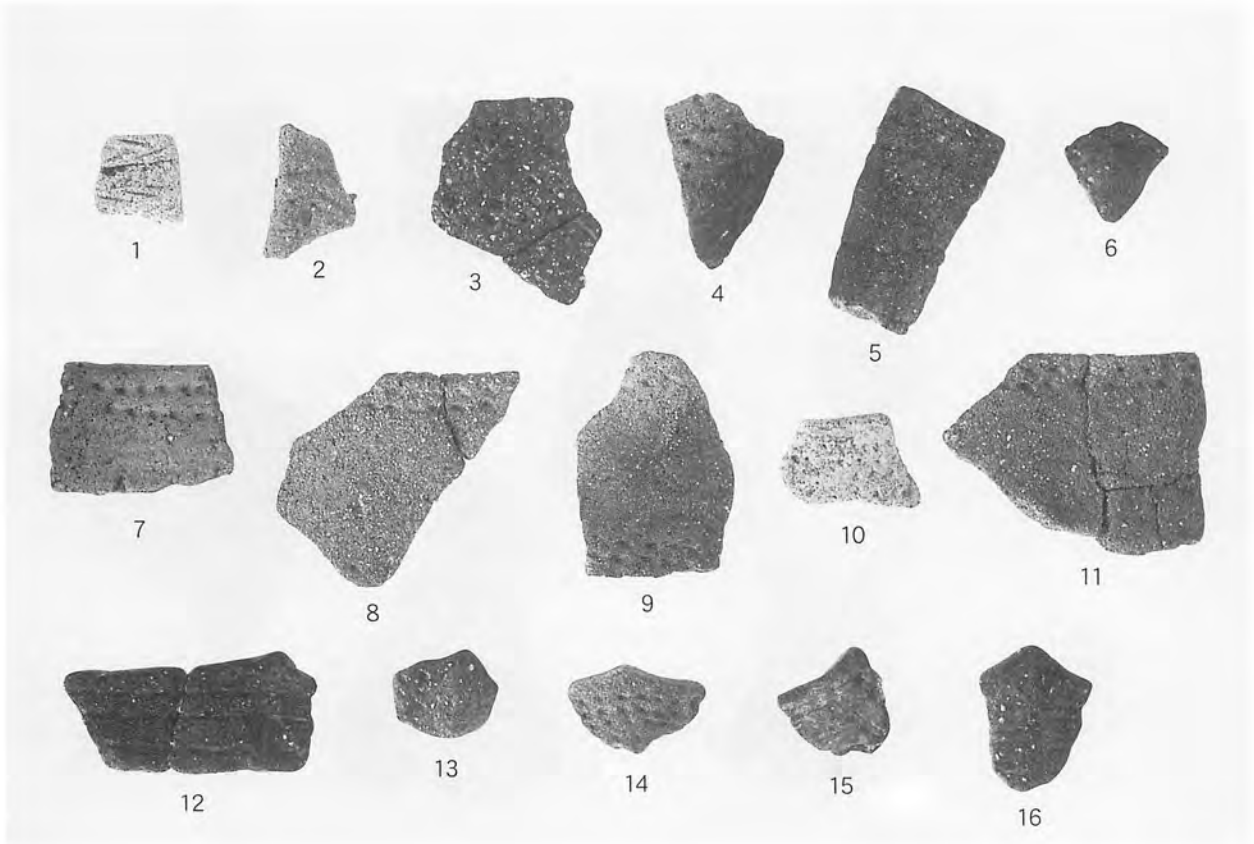


図版24
陶磁器出土状況

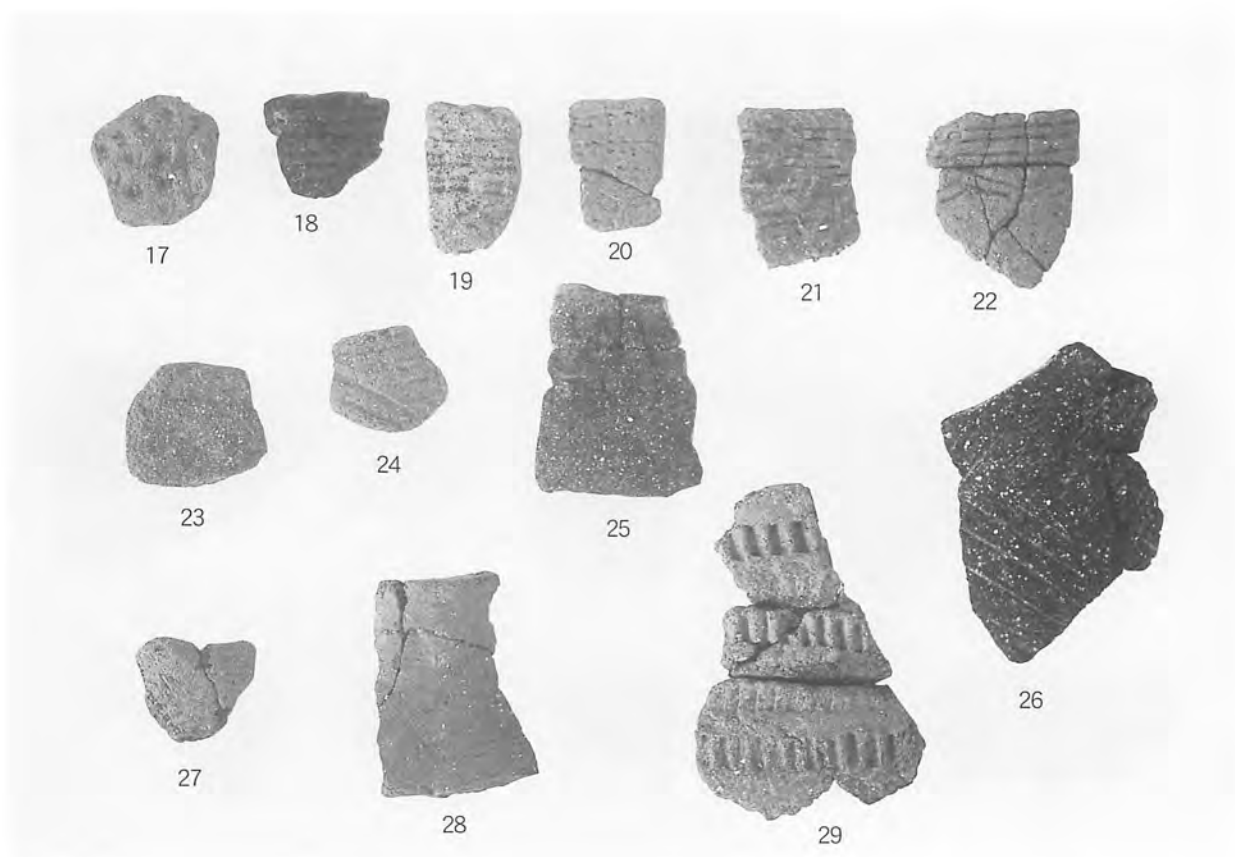


図版25
銭貨出土状況

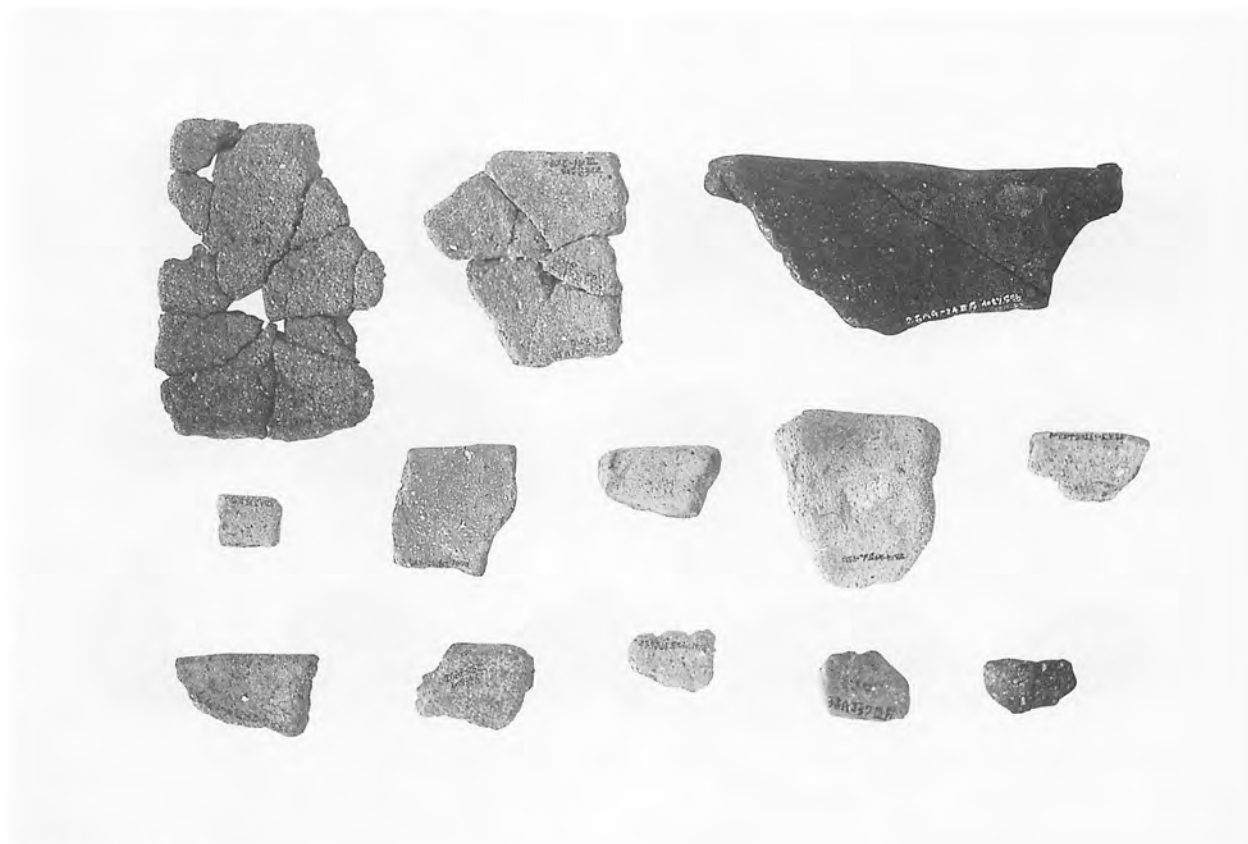
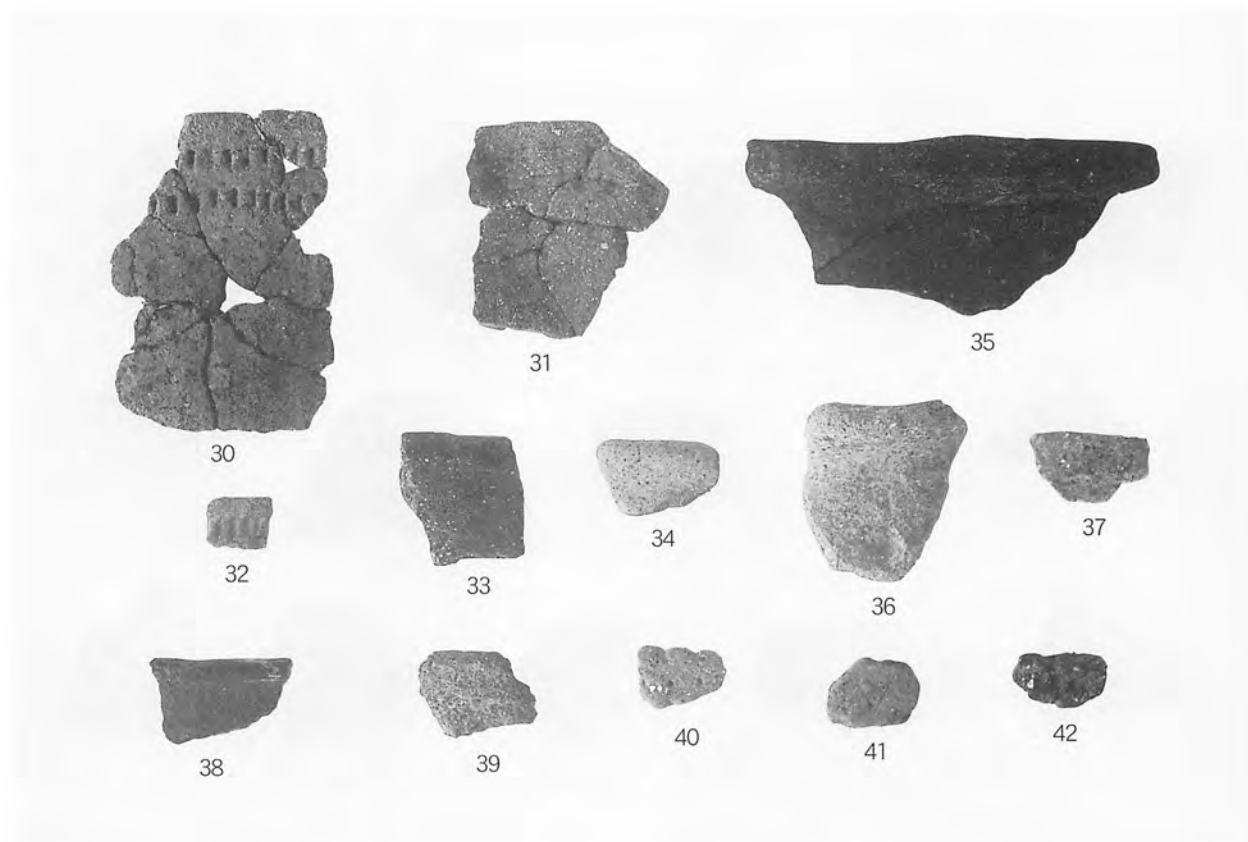




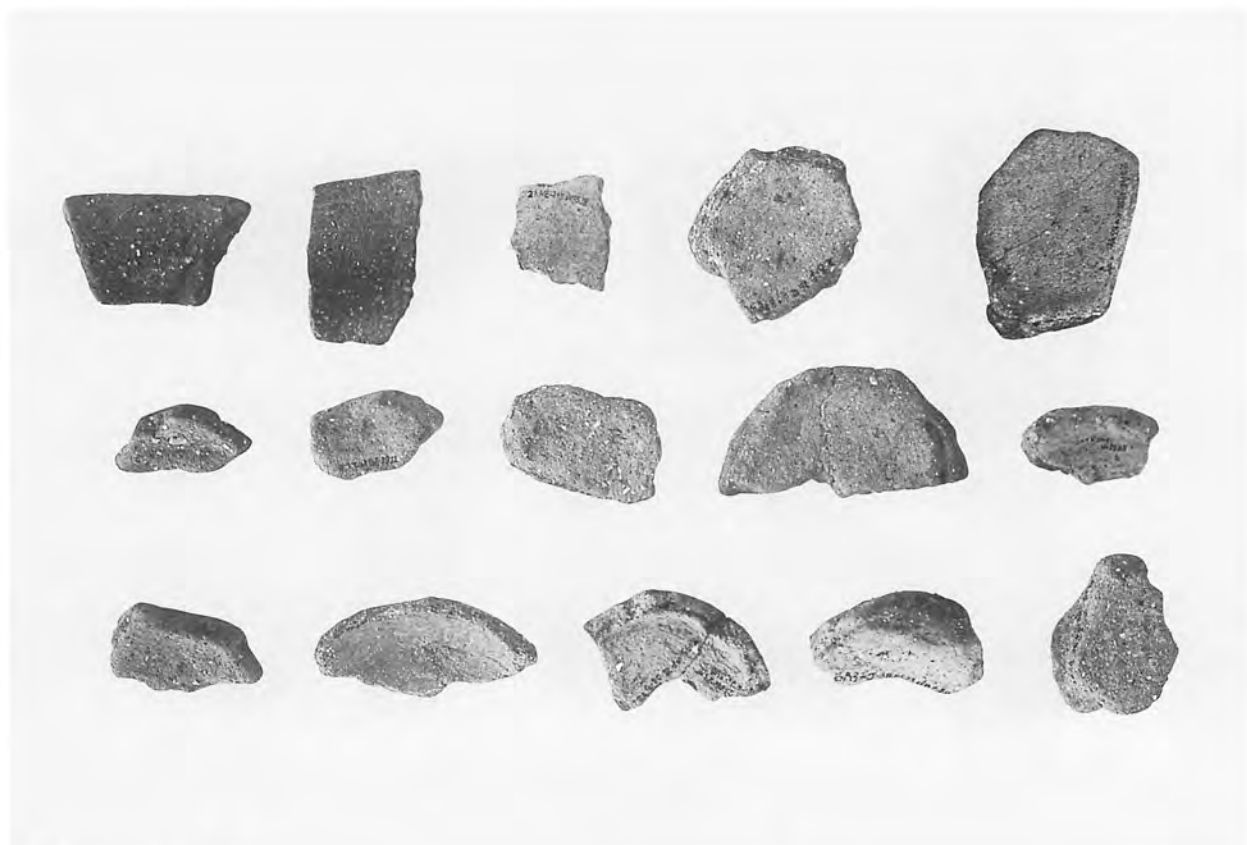
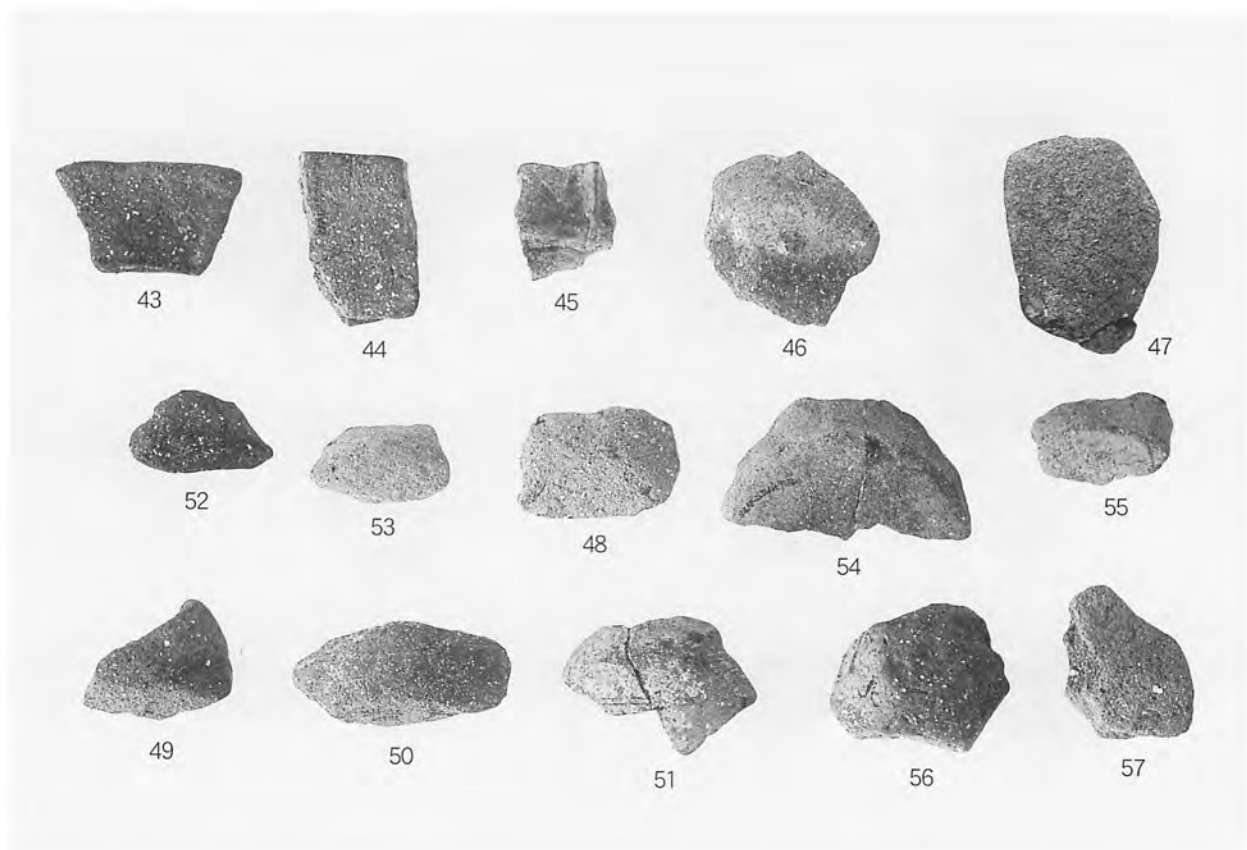
图版26 土器 (1)



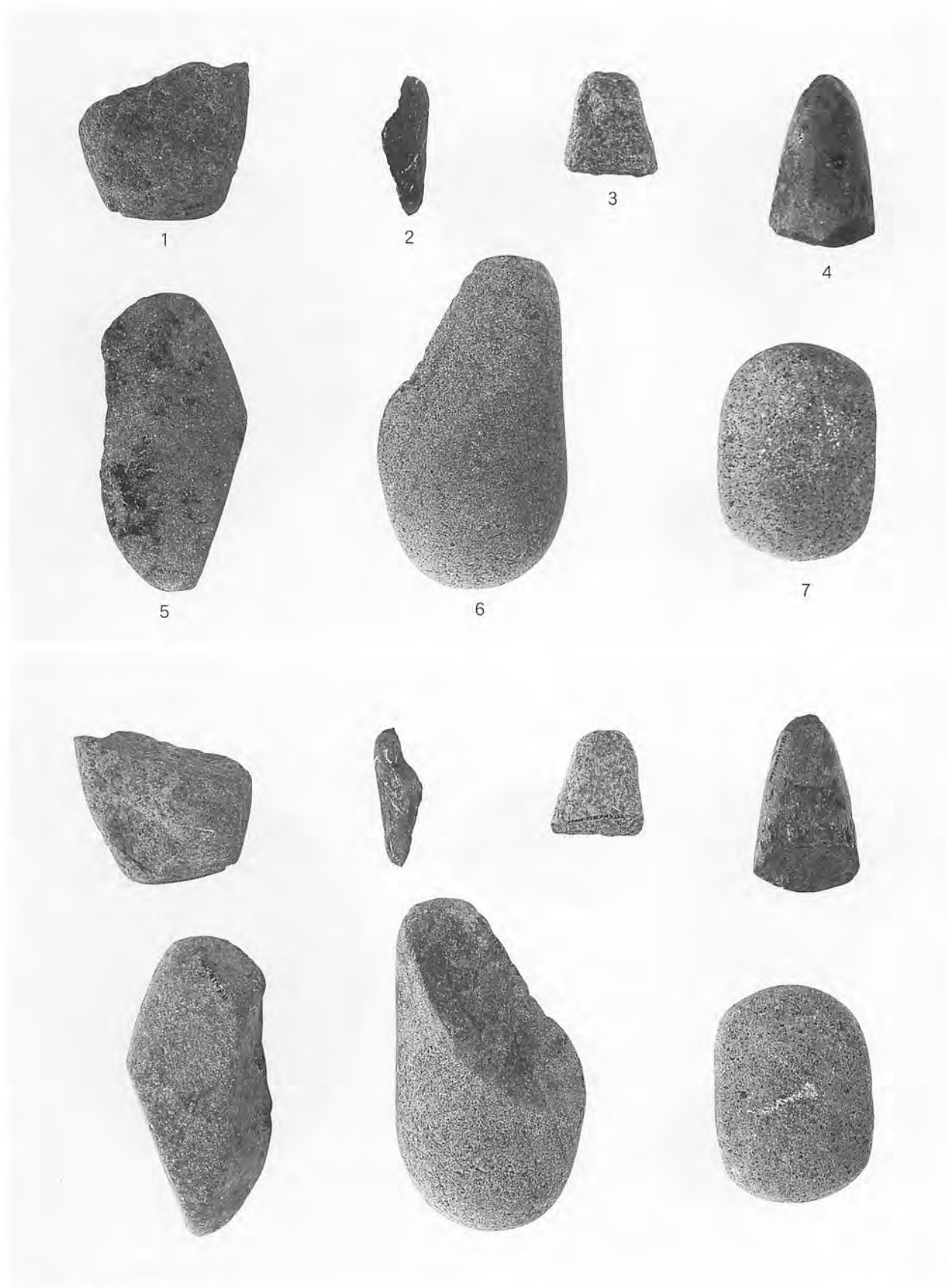
图版27 土器 (2)



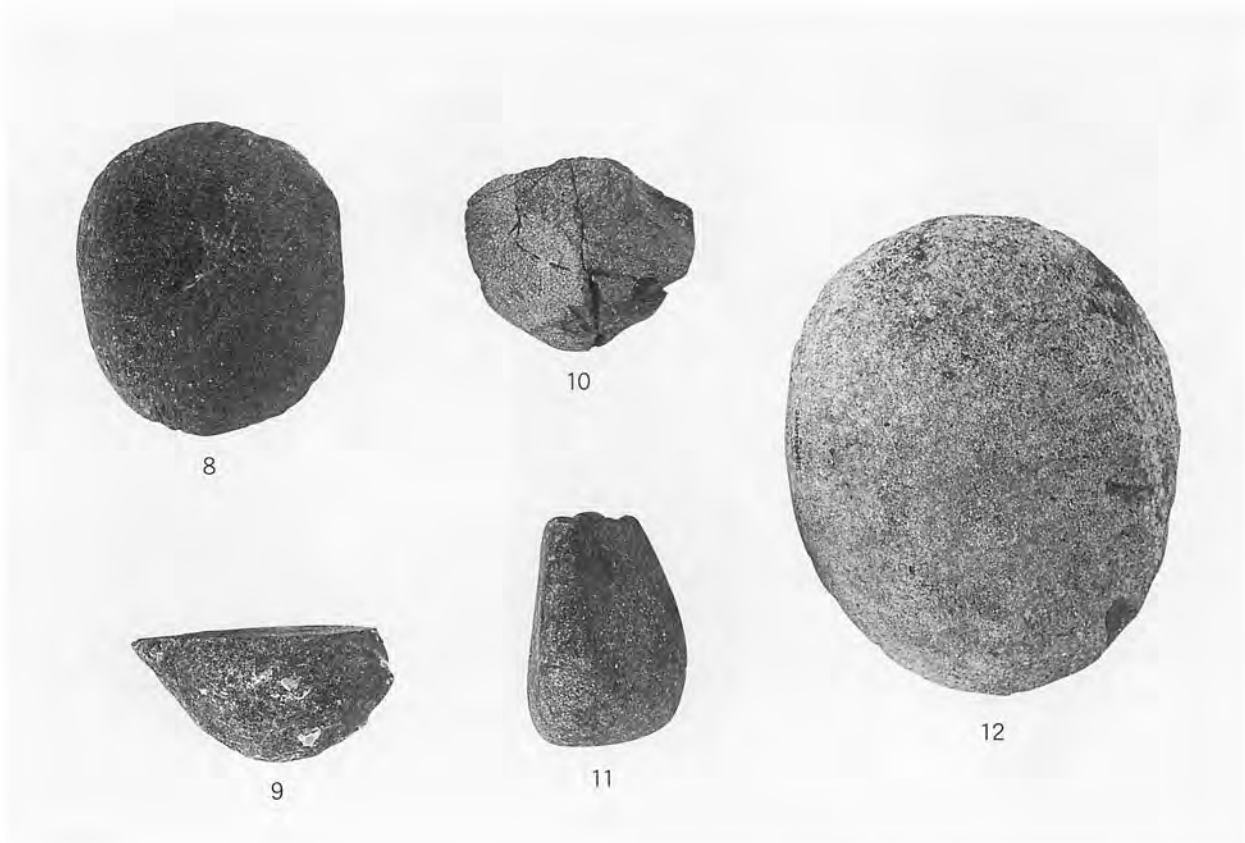
図版28 土器 (3)



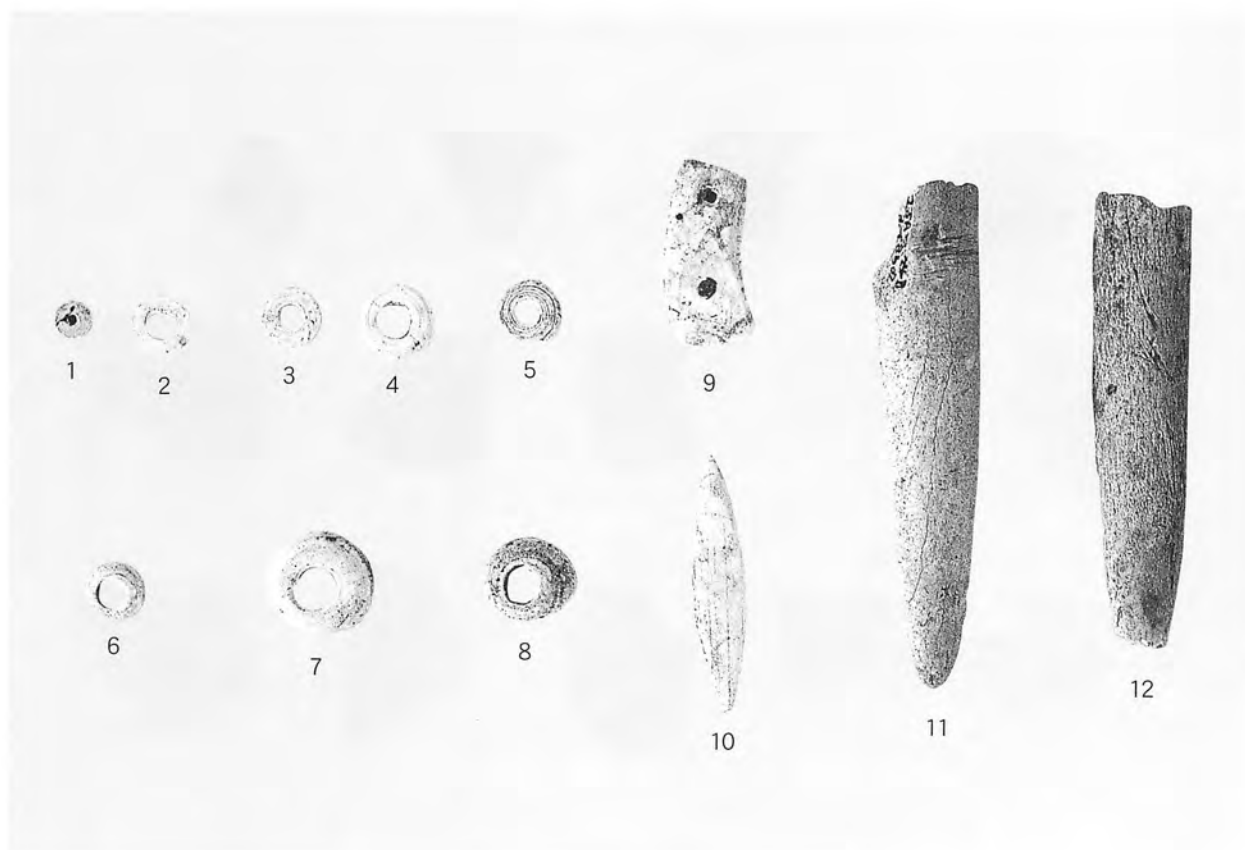
図版29 土器 (4)



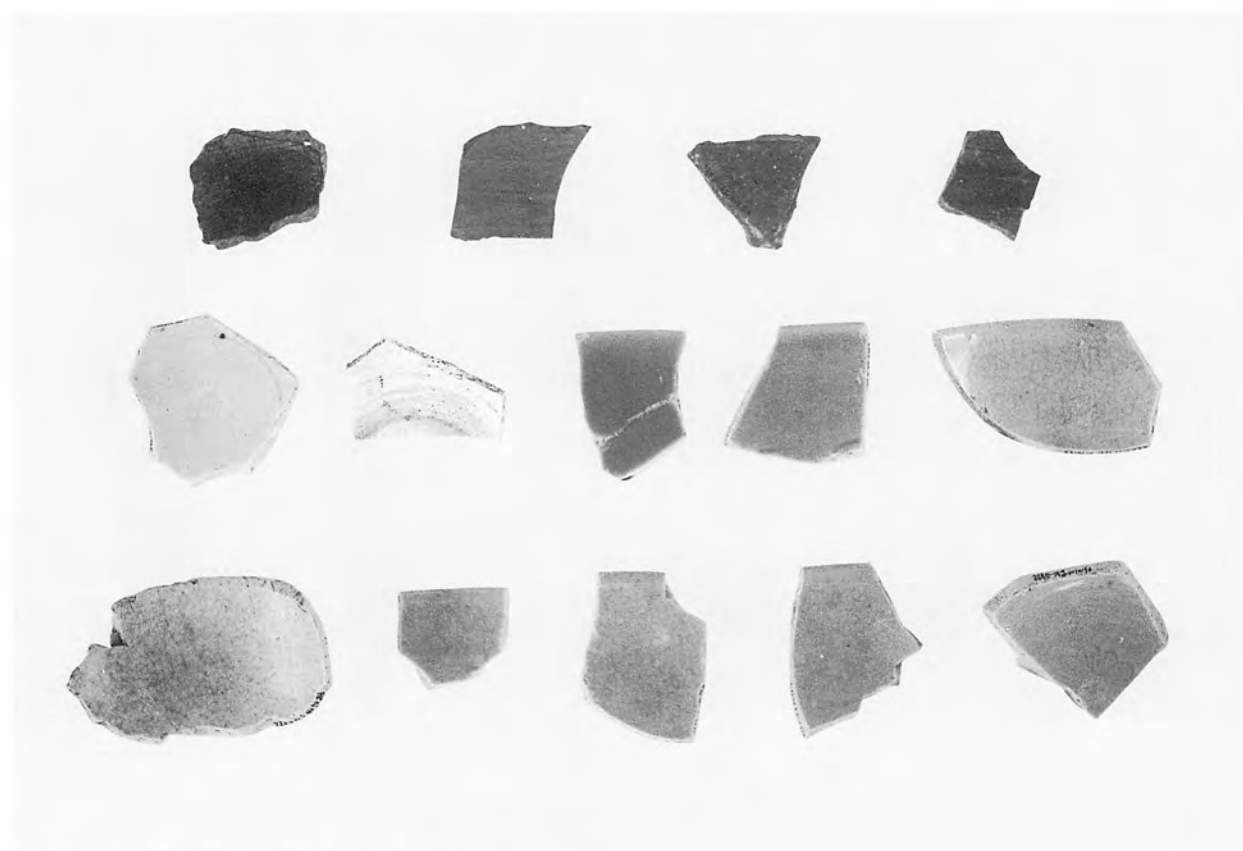
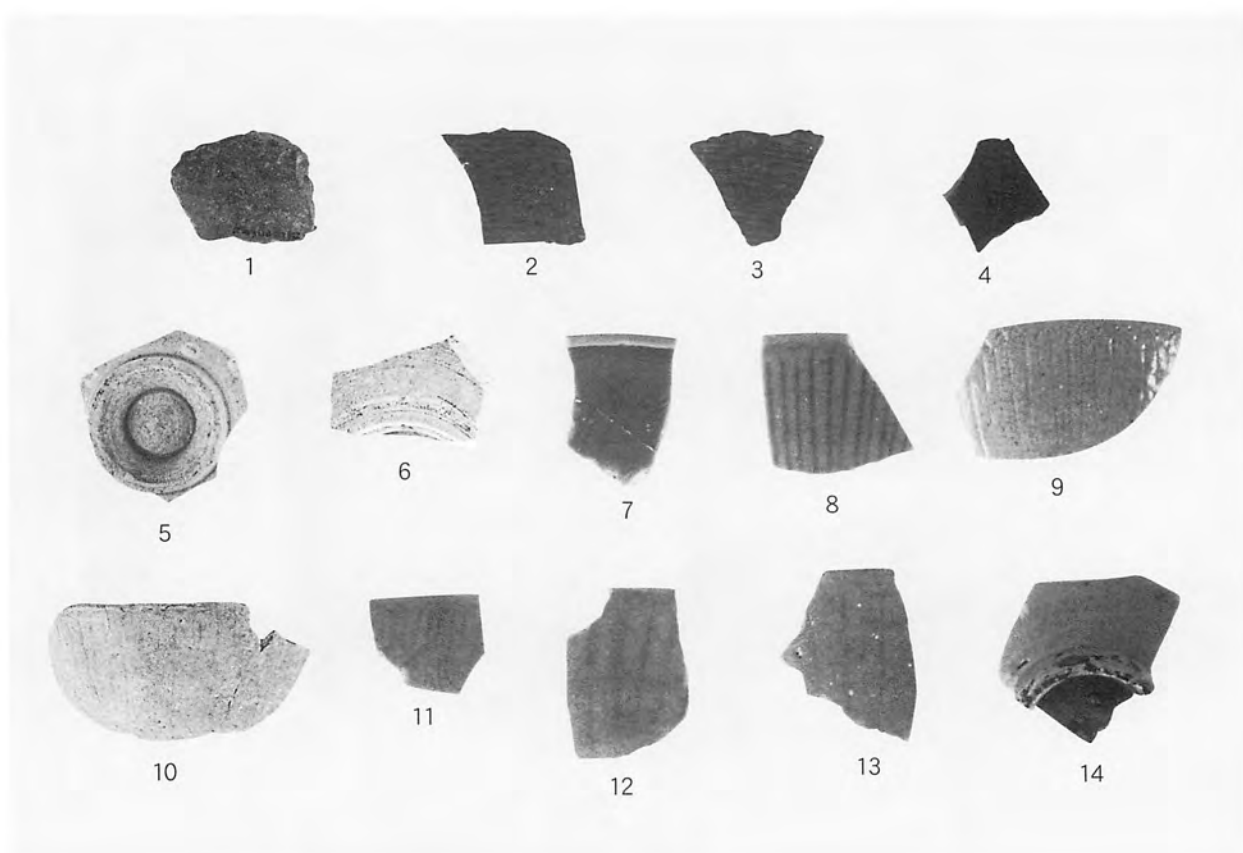
图版30 石器 (1)



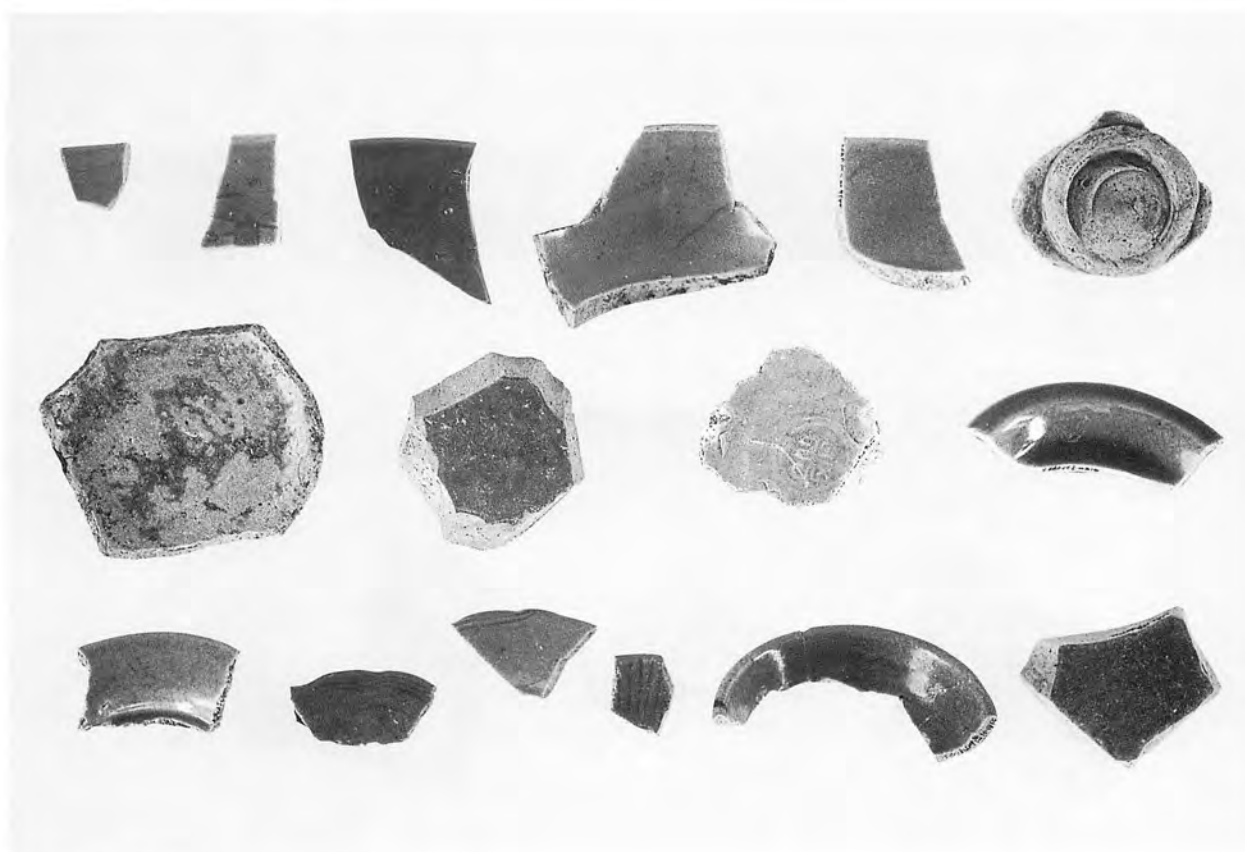
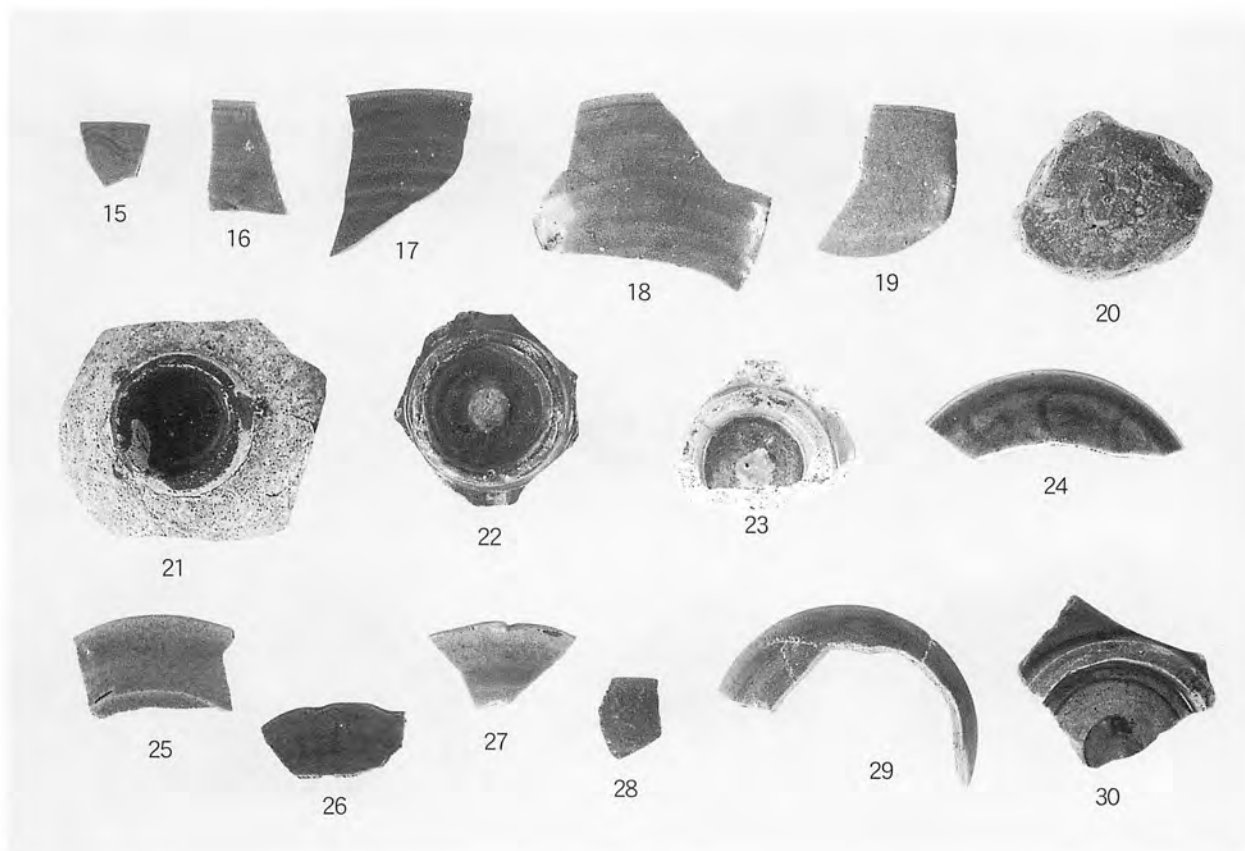
图版31 石器 (2)



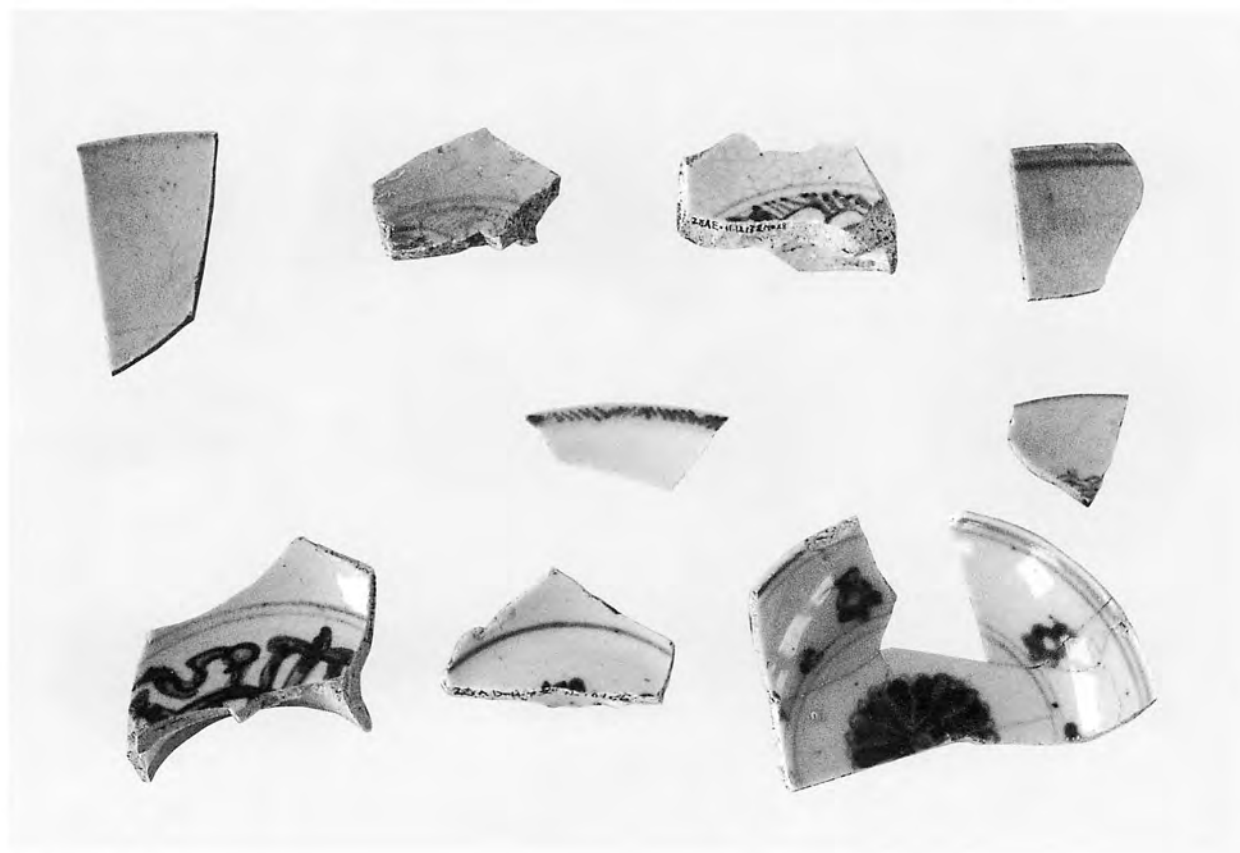
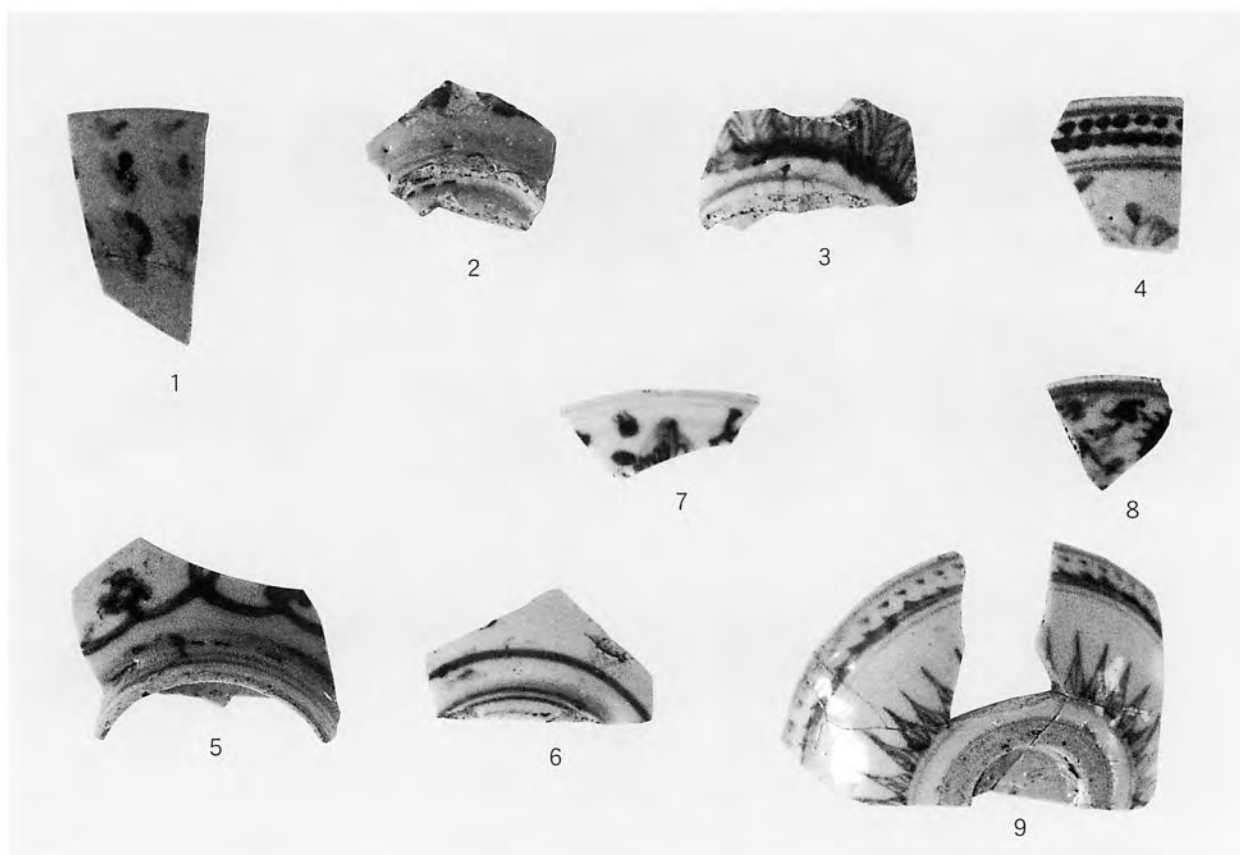
図版32 貝珠、貝・骨製品



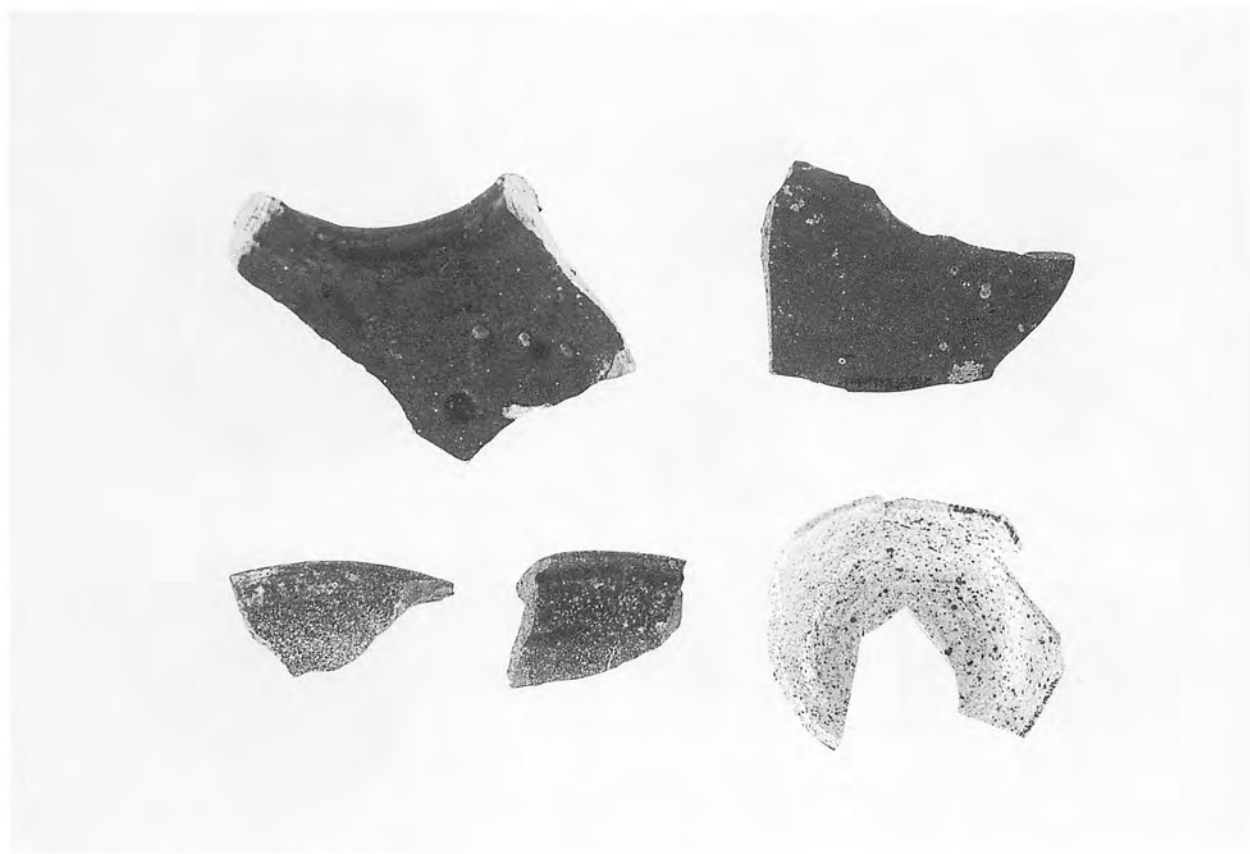
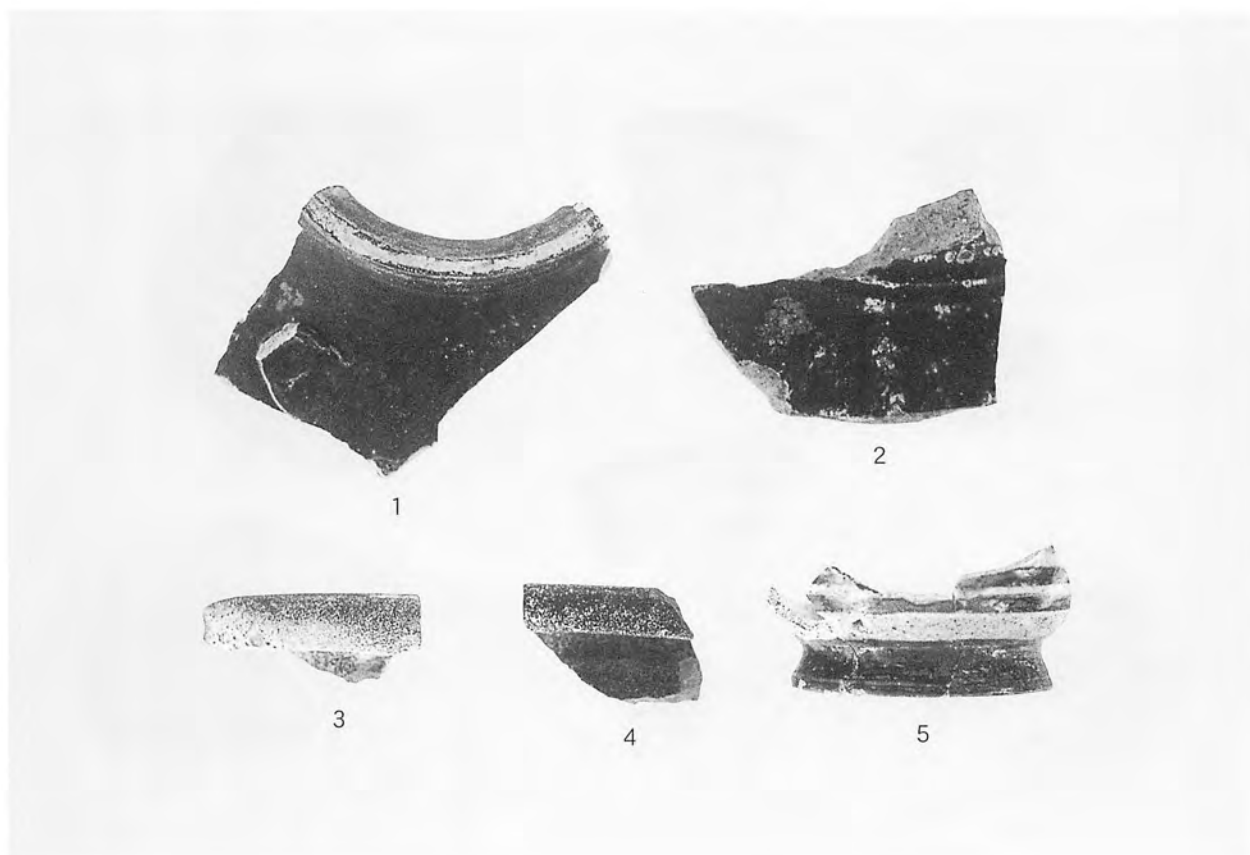
図版33 土器・カムイヤキ・白磁・青磁



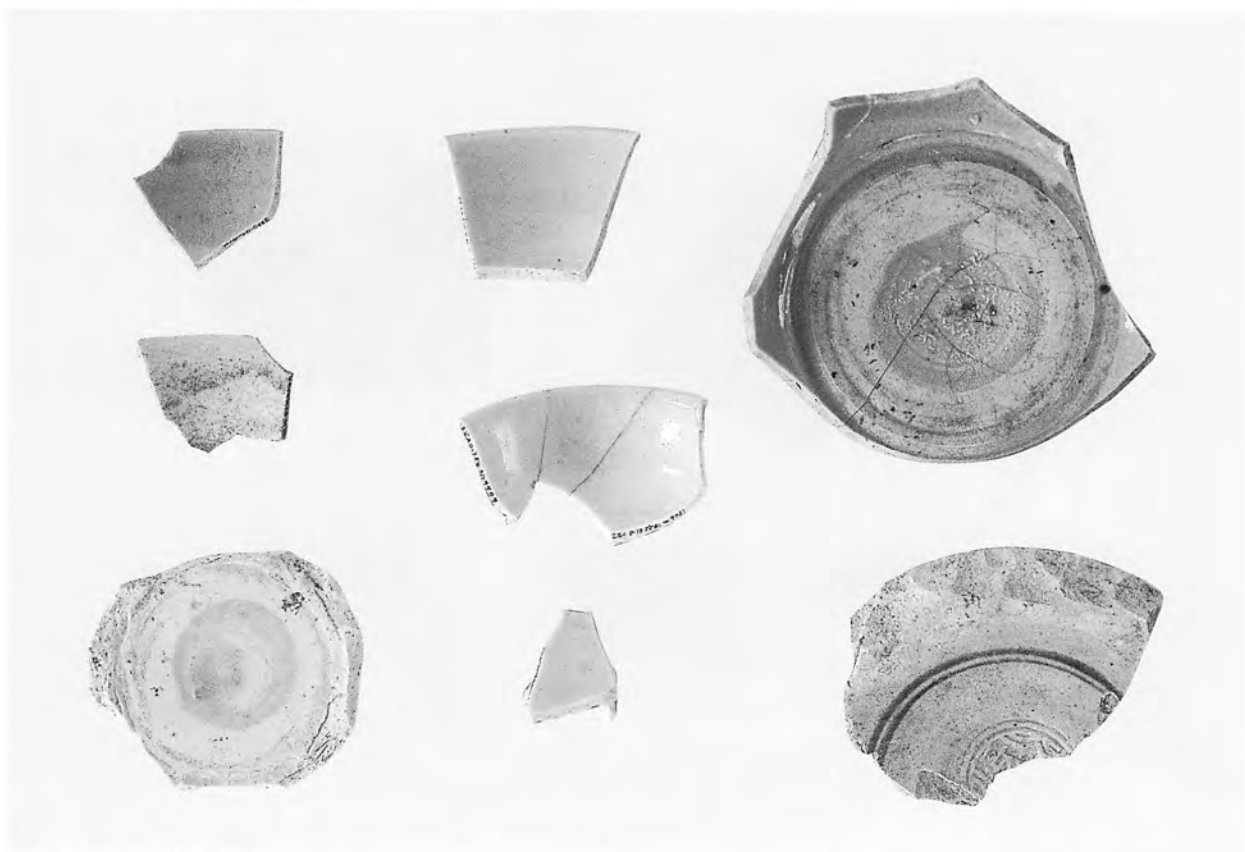
图版34 青磁



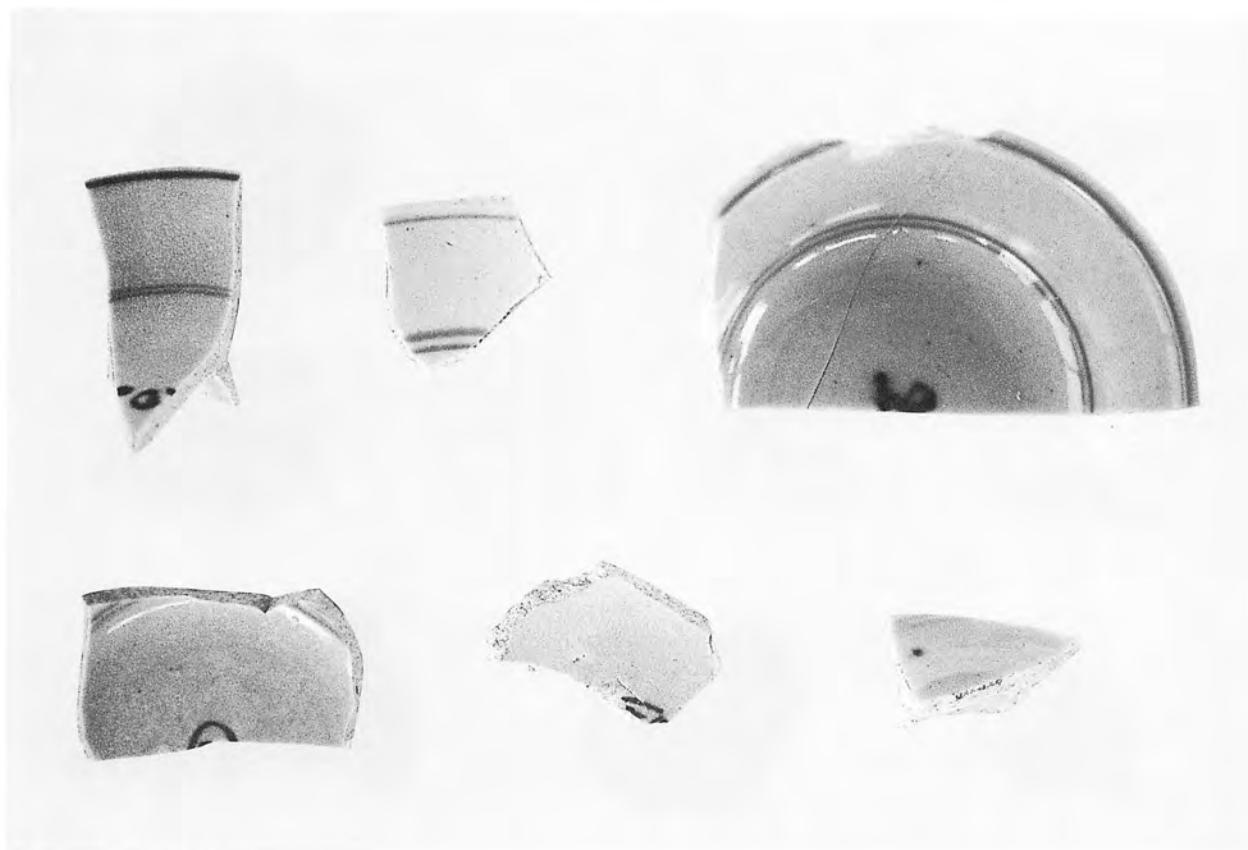
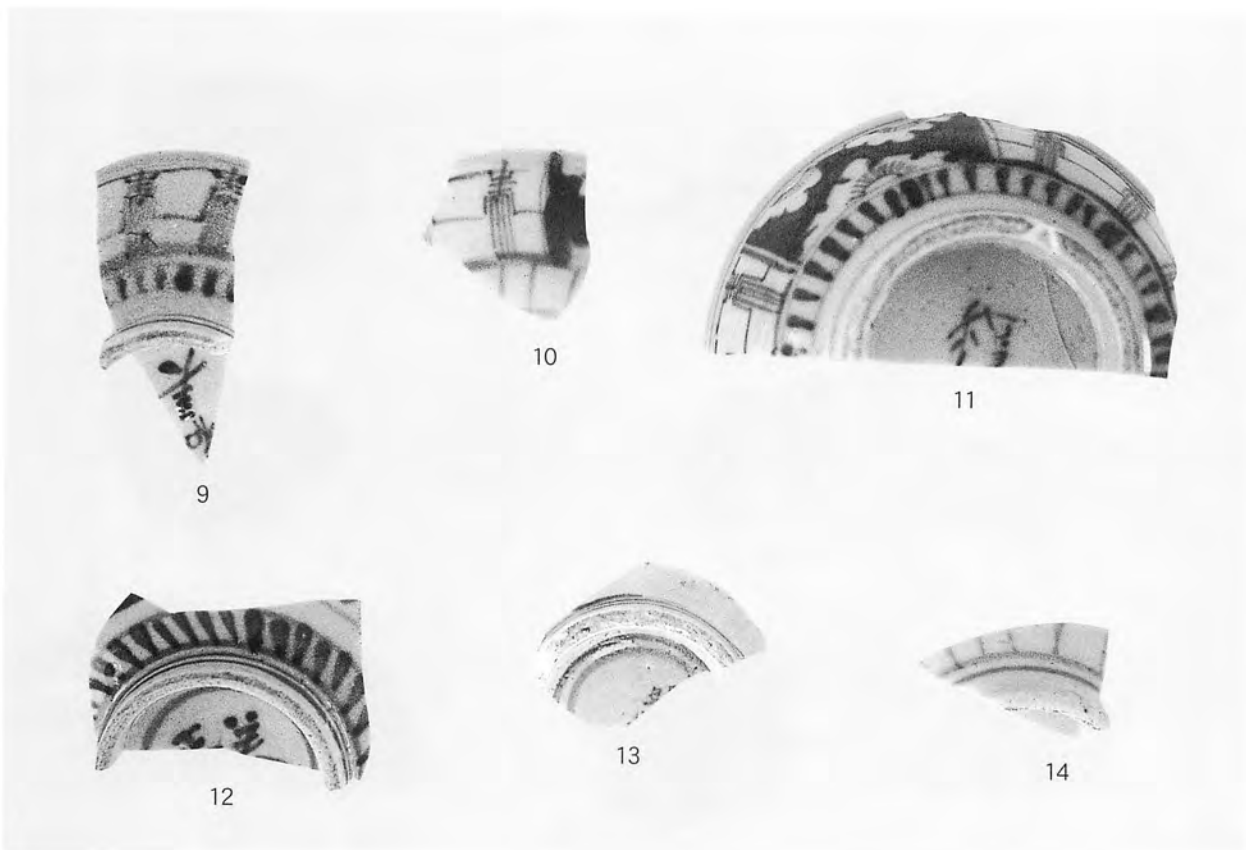
图版35 青花



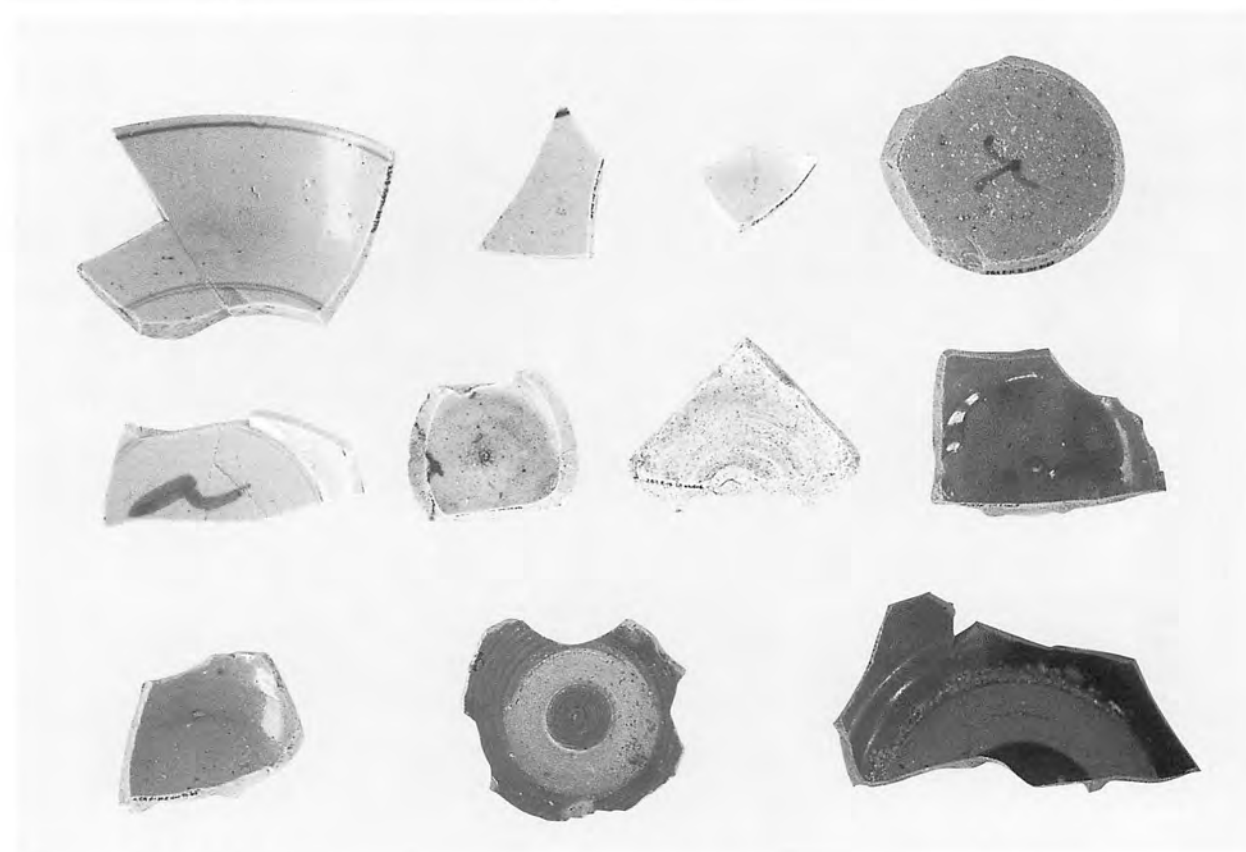
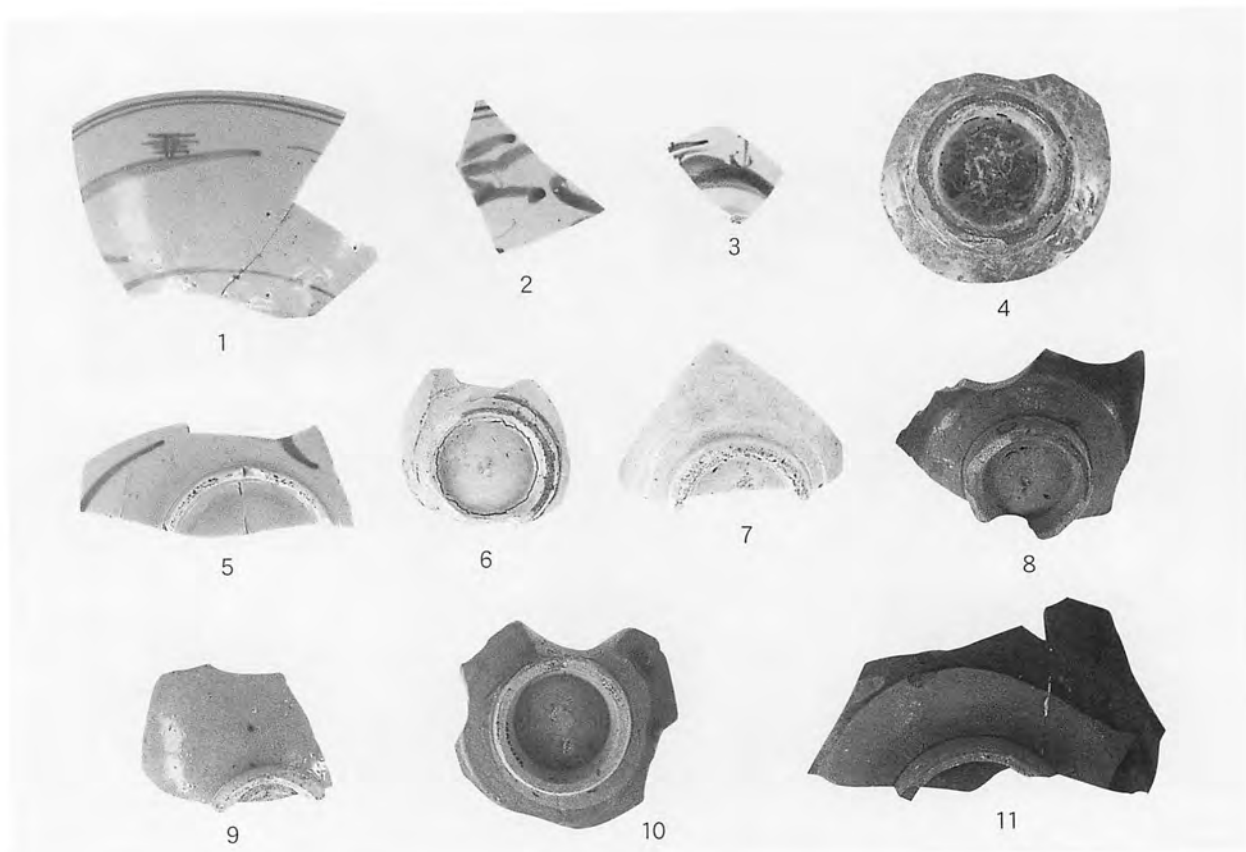
図版36 褐釉陶器、タイ陶磁



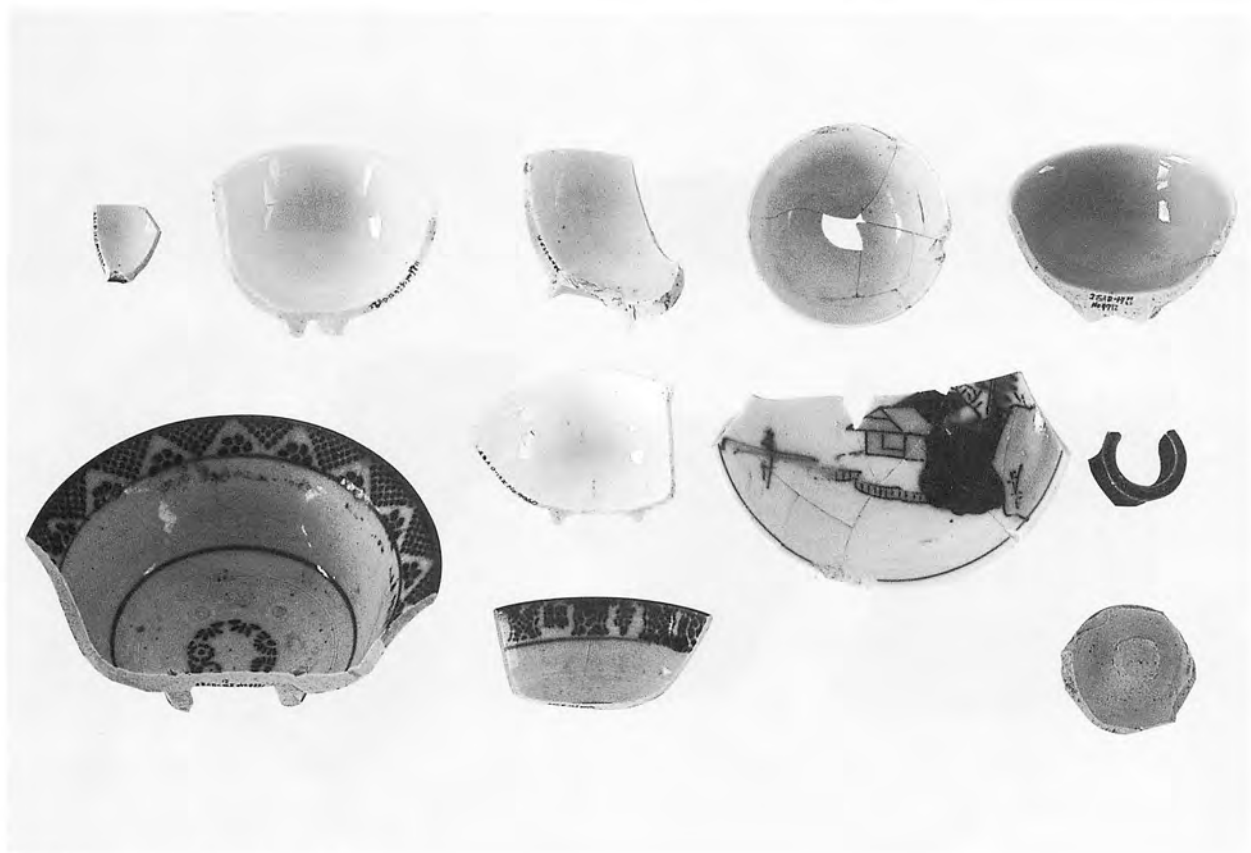
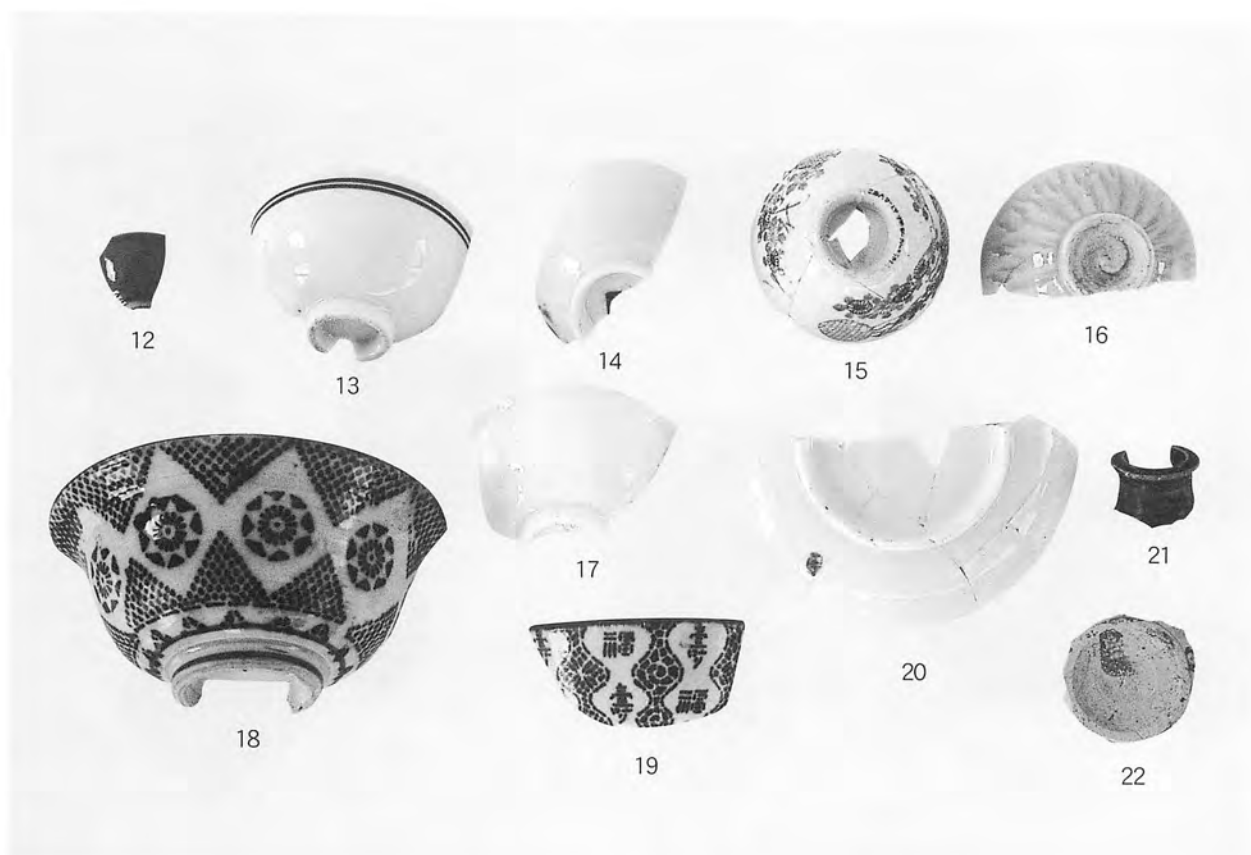
图版37 清朝磁器 (1)



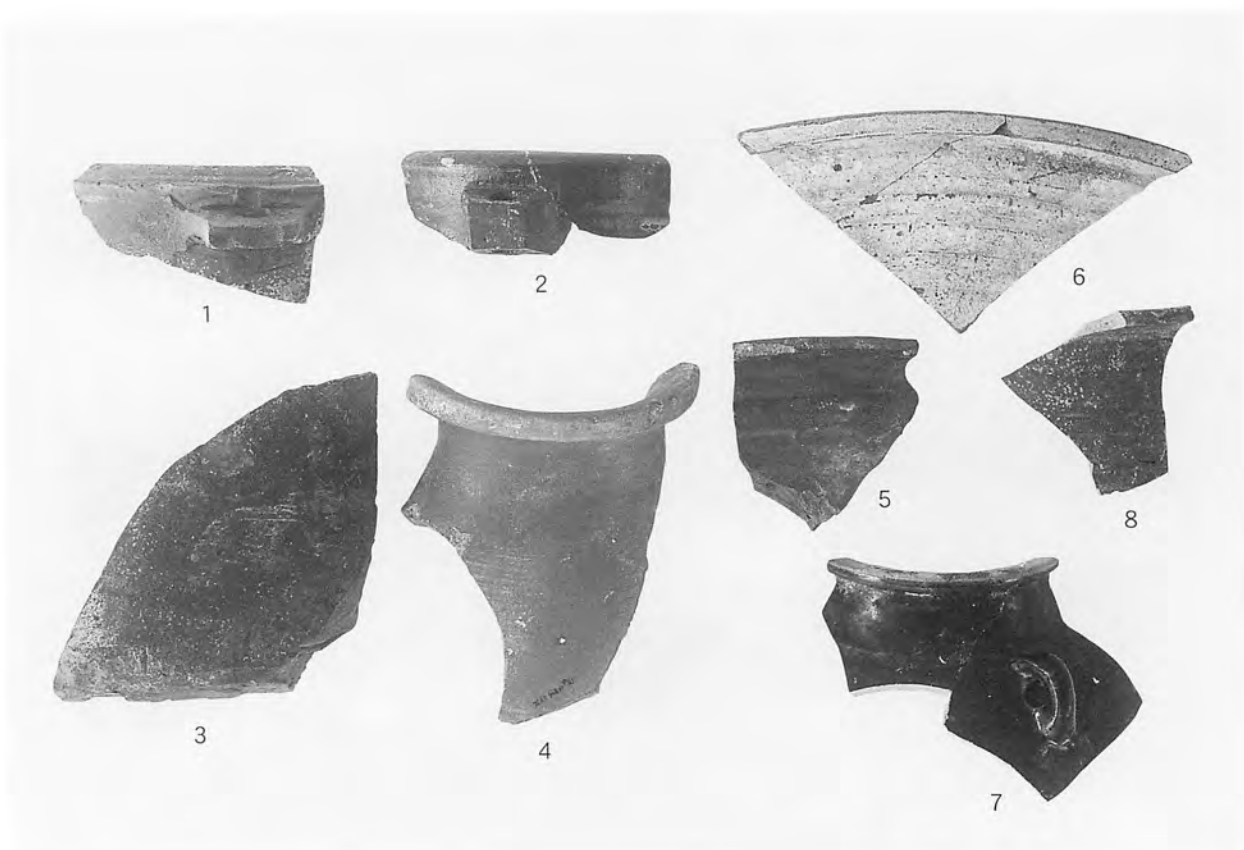
图版38 清朝磁器 (2)



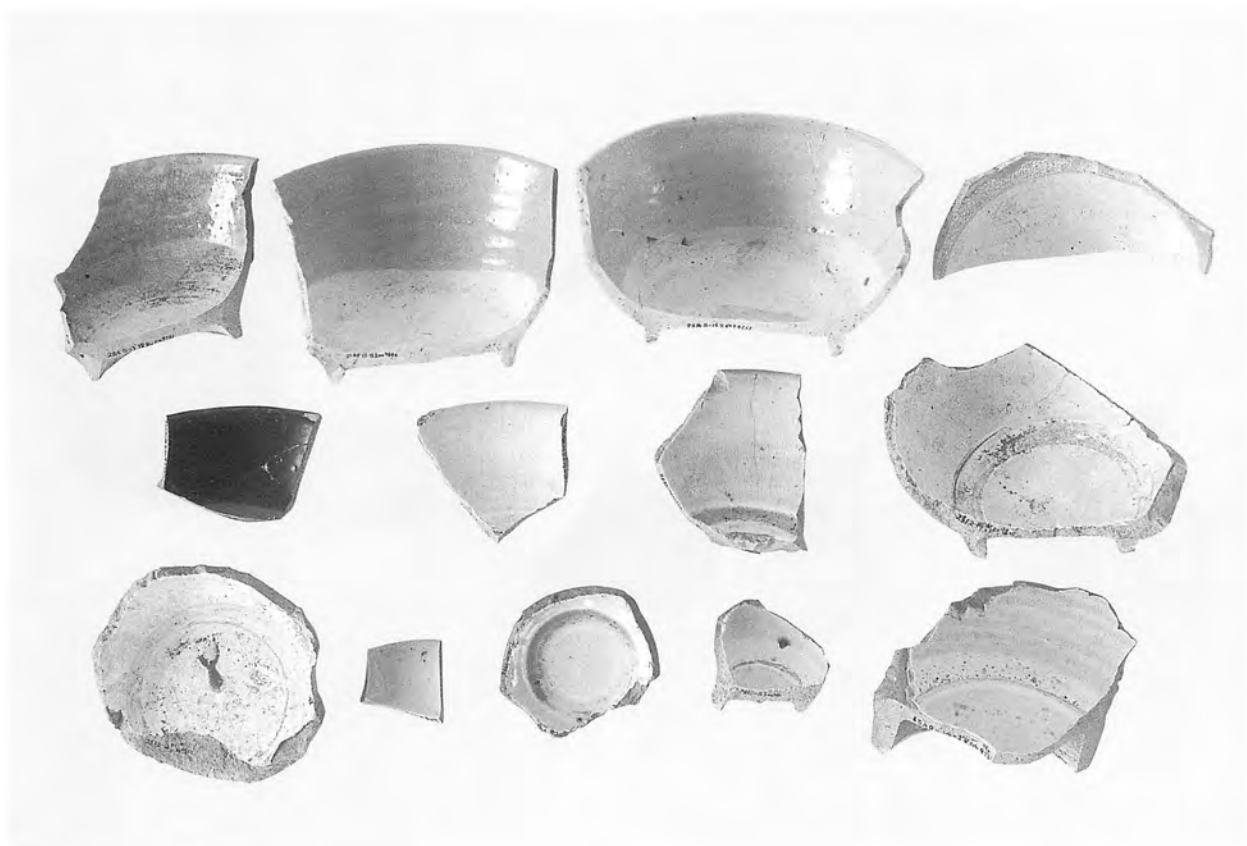
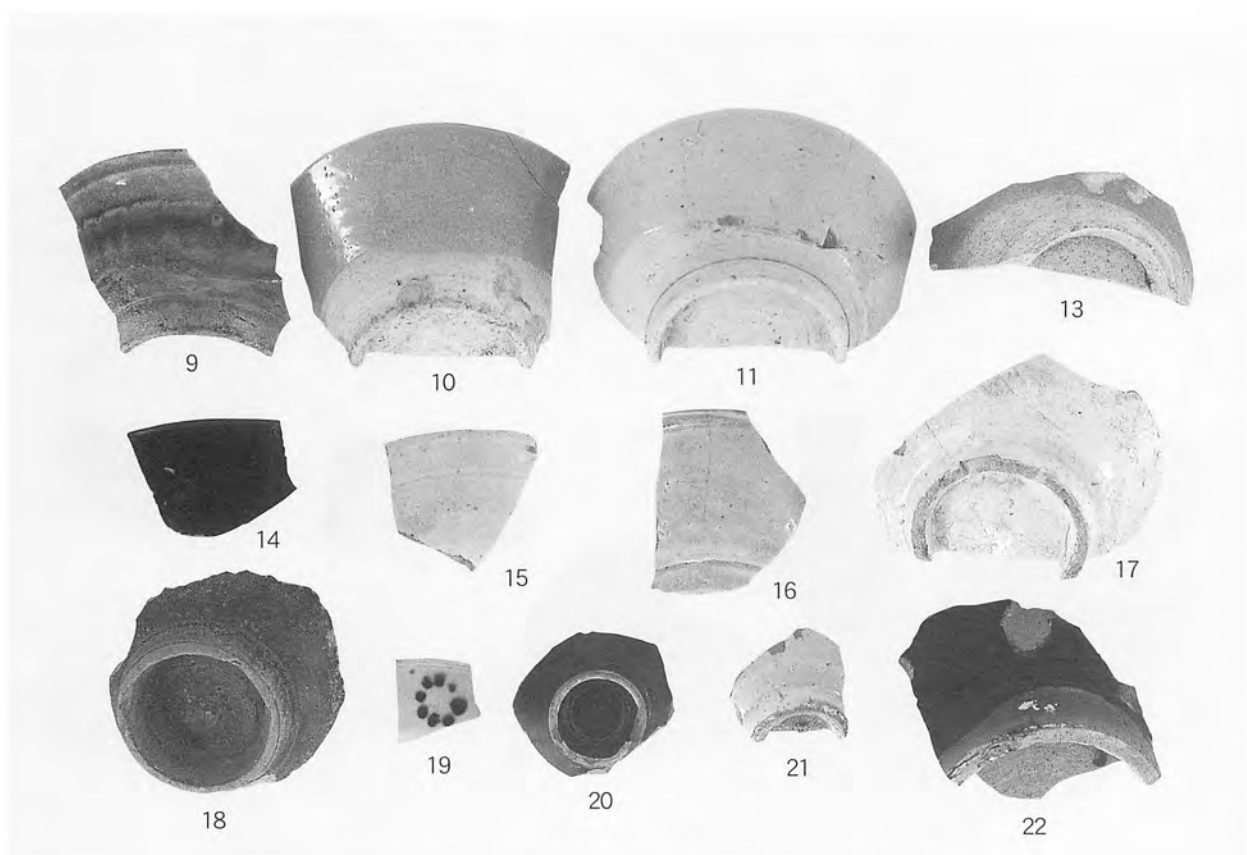
図版39 本土産近世陶磁



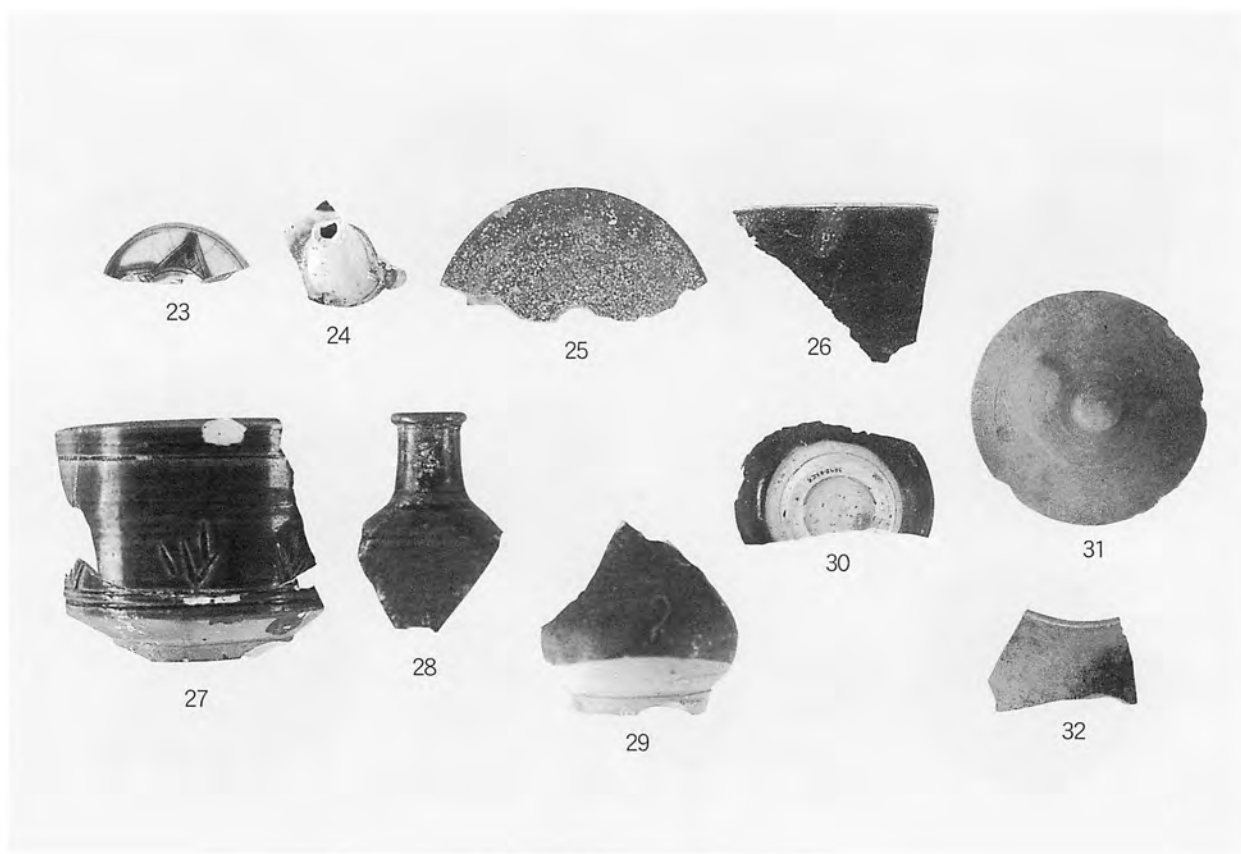
図版40 本土産近・現代陶磁



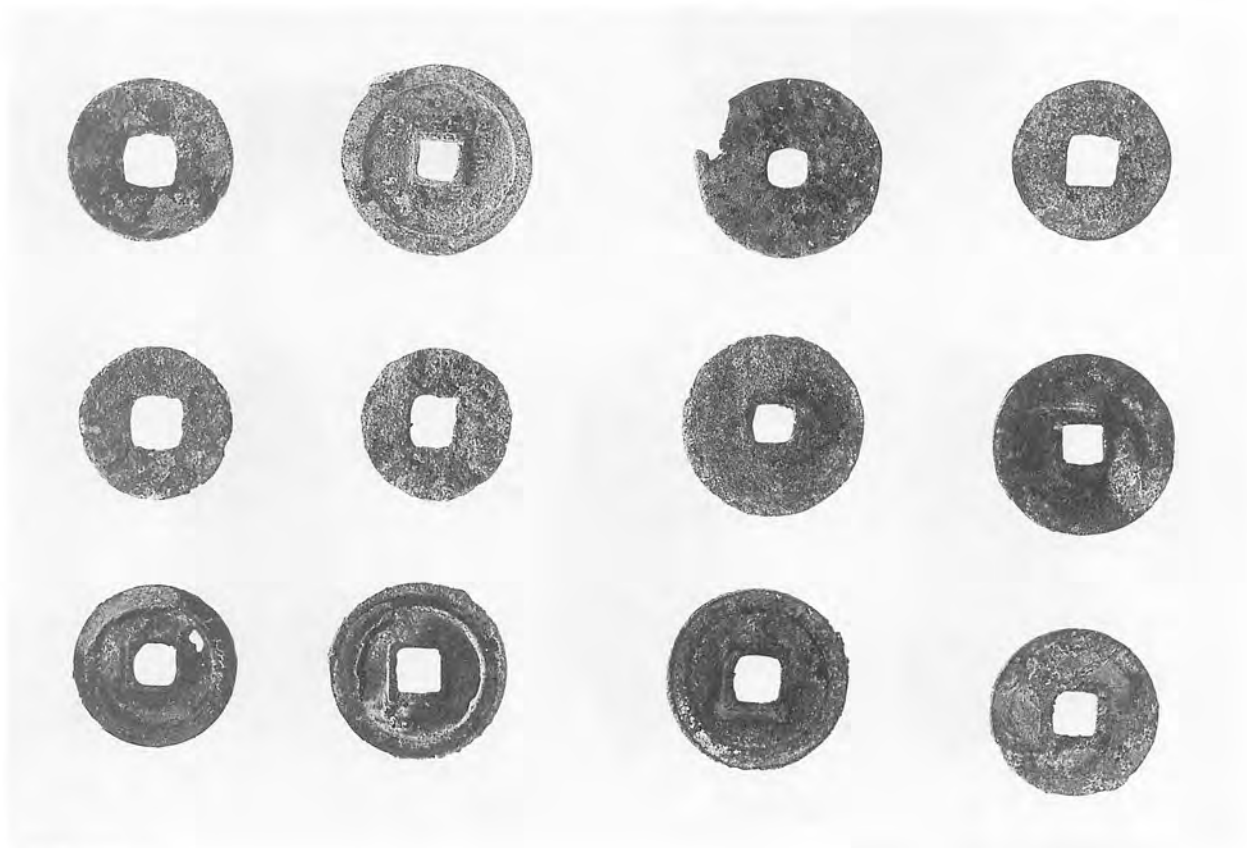
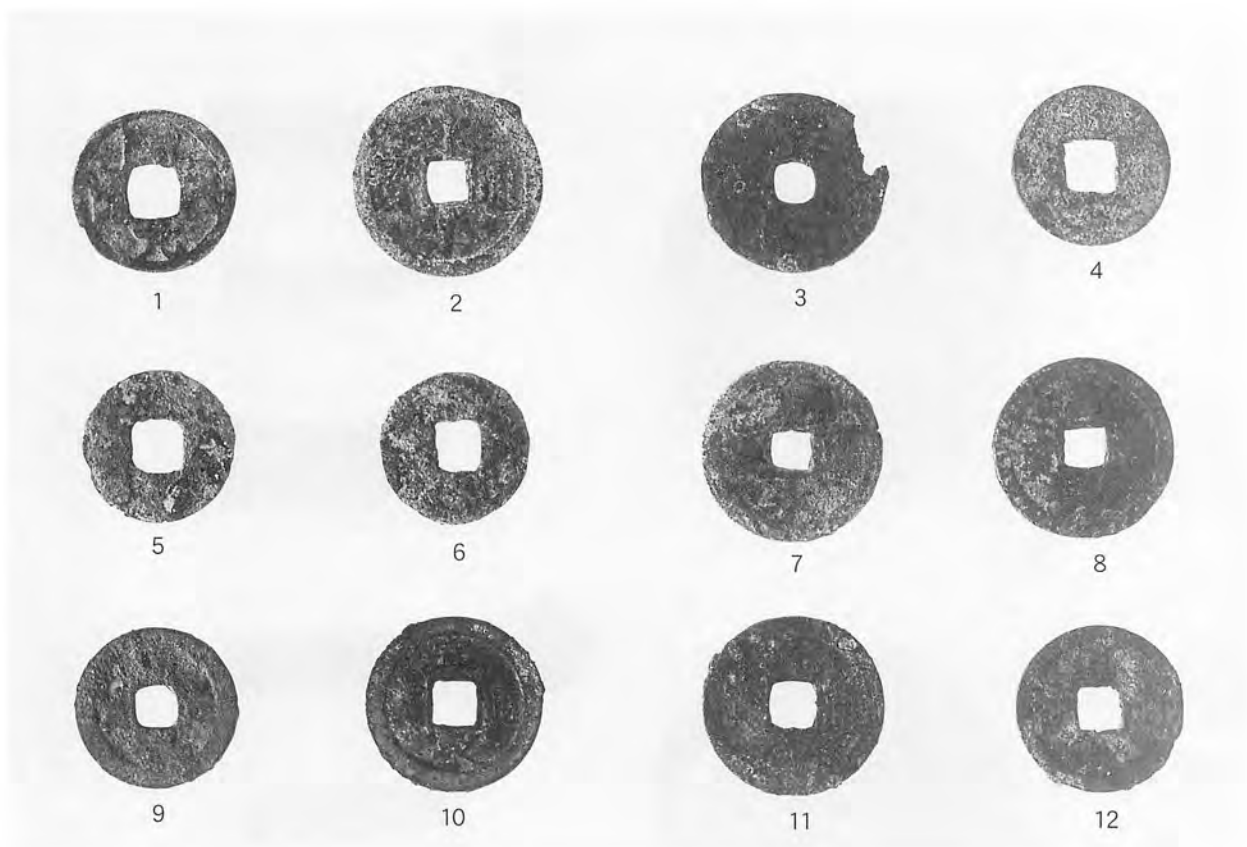
図版41 沖縄産陶器 (1)



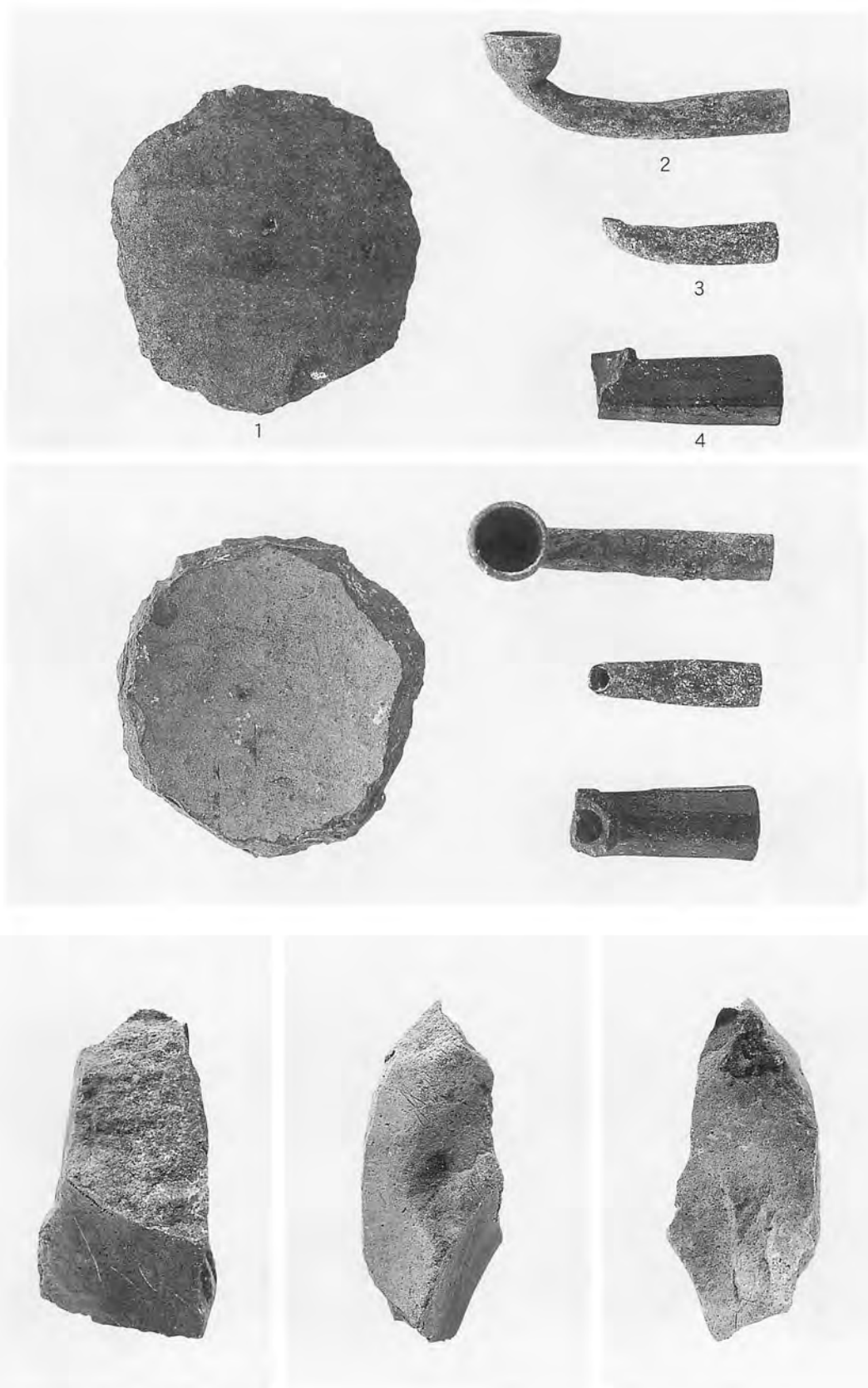
図版42 沖縄産陶器 (2)



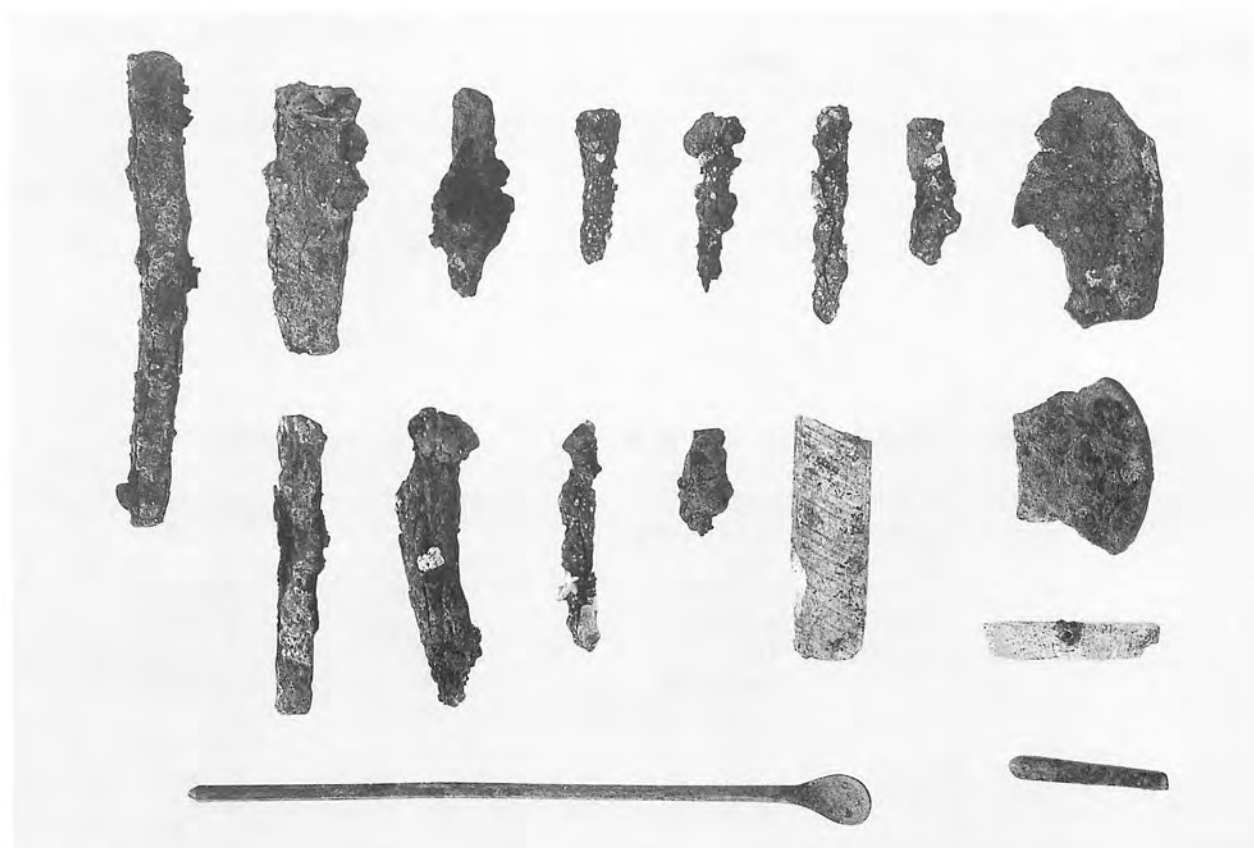
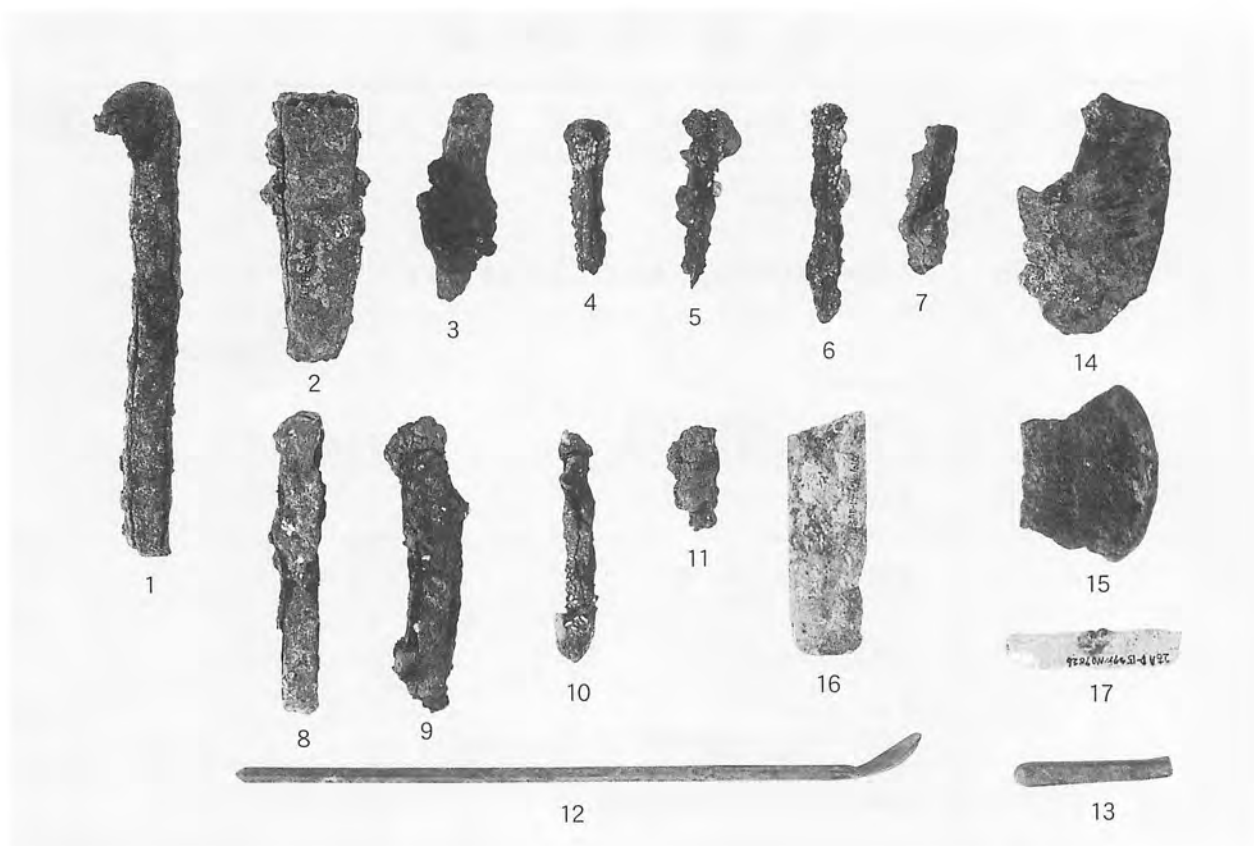
図版43 沖縄産陶器 (3)



図版44 銭貨



図版45 円盤状製品・煙管・石器



図版46 金属製品・骨製品

報 告 書 抄 録

ふ り が な		こうりばるえーいせき						
書 名		古宇利原A遺跡						
副 書 名		古宇利大橋橋梁整備事業に伴う緊急発掘調査報告						
巻 次								
シ リ ー ズ 名		今帰仁村文化財調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号		第19集						
編 著 者 名		宮城 弘樹・玉城 靖						
発 行 機 関		今帰仁村教育委員会						
所 在 地		〒905-0492 沖縄県今帰仁村字仲宗根232 TEL 0980-56-3201						
発 行 年 日		西暦2005年 3 月 1 日 (平成17年)						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
こ う り ば る えー 古宇利原A い せ き 遺跡	な き じん 今帰仁村字 こ う り 古宇利	473065		26° 41' 33"	124° 31' 02"	14年度 2002 11 ゝ 2003 03 15年度 2003 07 ゝ 2003 10	750㎡	古宇利大橋橋 梁整備事業に 伴う緊急発掘 調査
所収遺跡名		種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		
古宇利原A遺跡		集落	縄文時代 後期並行期 グスク時代から近 世。現代	先史時代 落ち込み遺構 貝塚 グスク時代 石列遺構 柱穴 貝廃棄遺構 シャコガイ集中遺構 土坑		先史時代 土 器 仲泊式 面縄東洞式 嘉徳ⅠA式 伊波式 荻堂式 大山式 室川式 カヤウチバンタ式 石 器 石斧 磨石・叩石 貝製品 骨製品 グスク以降 土 器 カムイヤキ 中国陶磁 タイ陶磁 本土産陶磁器 沖縄産陶器 銭貨 円盤状製品 煙管 石器 金属製品 骨製品		

古宇利原 A 遺跡

－古宇利大橋橋梁整備事業に伴う緊急発掘調査報告－

発 行：2005年3月1日

沖縄県今帰仁村教育委員会

編 集：社会教育課 文化財係

〒905－0401 沖縄県国頭郡

今帰仁村字仲宗根232

電 話：(0980)56－3201

F A X：(0980)56－3217

印 刷：文進印刷株式会社

電 話：(098)994－5777

表紙写真：乙羽岳から見た古宇利島